910. 2-F63-37
1200500754233

172 137
3
28. 9. 24.

910.2
F63
3

文學博士 藤村作著

日本文學史概說

東京 中興館藏版

昭和七年 帝國

623-74

序

日本文學の研究は近時長足の進歩をなし、對象性の上からも方法性の上からも新しい分野が開拓せられた所が多い。日本文學史の研究に於ても同樣であるが、殊に文學史研究は日本文學研究の中心をなすものであるだけにその進展の跡は著しい。

本書はかつて版行した『國文學史總說』を基礎にして教科用書として著したものであるが、教授上の實際に鑑みてこれを簡略にし、且つ多少の改補を試みたものである。卽ち前著に於ては大和・平安・鎌倉室町・江戸・明治の五期にわけ、その間を更に二期若しくは三期にわけたのを、上古・中古・近古・近世・最近世と改め、また各期の間は詩歌・小說・劇といふ形態によつて分けた。更に作品を解說するに當つて、前著に比較的詳しかつた古代文學の書史學的知識を簡略にし、その他全體にわたつて幾分省略した。また前著には古版本・古寫本の原形を示すとともに、作品の本文を讀むことをも目的としたが、本書に於ては古版本・古寫本の原形を示すといふ目的に止めたためにその量を尠くした。

かういふ意味で本書は組織・內容及び分量の上で『國文學史總說』と異なるものがあるために、『日本文學史概說』と題したが、その編述の精神は前者を大體踏襲して、多少簡略・平明にした

といふに止まつて新たなる立場を試みたものではない。前著並に本書のやうな編述の態度が文學史研究の唯一の態度であるとは考へてゐない。しかし尠くとも文學史研究の出發點として存在し得べきものであることを信ずるものである。

卷末の文學史年表も、『國文學史總說』に附載したものをそのまゝ用ひた。

昭和七年十月

藤村作

日本文學史概說

目次

緒論　日本文學史とその區劃……一
第一篇　上古文學……三
序說……三
第一章　神話傳說文學……四
一、古事記と日本書紀　二、風土記　三、日本國現報善惡靈異記
第二章　神祇文學……一五
一、祝詞　二、宣命
第三章　詩歌……二三
一、記紀歌謠　二、萬葉集　三、懷風藻
第二篇　中古文學……二五

序　說……三五
第一章　詩　歌……三六
一、漢詩　二、和歌　三、歌謠
第二章　物　語……五八
一、歌物語と傳奇的物語　二、源氏物語　三、狹衣物語と濱松中納言物語その他　四、歷史物語と傳說物語
第三章　日記・隨筆……七五
一、土佐日記と蜻蛉日記　二、枕草子と女性の日記
第三篇　近古文學……八二
序　說……八二
第一章　詩　歌……八二
一、和歌　二、連歌　三、歌謠
第二章　物　語……八三
一、軍記物語　二、擬古物語・歷史物語その他　三、お伽草子
第三章　戲　曲……一〇九
一、舞の本　二、謠曲・狂言
第四章　日記・隨筆……一二五
一、方丈記と日記・紀行　二、徒然草
第四篇　近世文學……一三一
序　說……一三一
第一章　詩　歌……一三三
一、古學復興時代の和歌　二、賀茂眞淵とその時代の和歌　三、香川景樹その他の和歌　四、初期の俳諧と芭蕉　五、蕪村とその時代の俳諧　六、一茶と大江丸　七、狂歌と川柳
第二章　小　說……一四四
一、假名草子と井原西鶴　二、讀本　三、洒落本と黃表紙　四、滑稽本・合卷・人情本
第三章　戲　曲……一八三
一、古淨瑠璃と近松　二、淨瑠璃の展開と歌舞伎脚本の成立
二、鶴屋南北と古河默阿彌

第五篇　最近世文學……一九九
序說……一九九
第一章　思潮概觀……二〇一
一、啓蒙思潮　二、日本的思潮の自覺　三、自然主義的思潮
第二章　詩歌……二〇八
一、新體詩の發生　二、新體詩と長詩　三、和歌と俳句
第三章　小說……二三五
一、啓蒙的小說　二、中期の小說　三、自然主義時代の小說
第四章　戲曲……二四八
一、初期の戲曲　二、活歷物と史劇　三、樂劇と社會劇
年表……卷尾
索引……卷尾

——目次終——

日本文學史概說

緒論　日本文學史とその區劃

文學史の意義

文學史は文學の歷史的展開の考察であつて、文學的現象の事實の上に流動する流れをたどつて、現代の文學が如何にして生じたかを探求する所に意義がある。文學史研究に於て事實の探求は忽諸にしてならない所であるが、たゞ事實や資料を羅列したのみでは文學史にはなり得ない。その事實と事實との間の關係を究めて、その間の展開を明かにする所に生命のある文學史が構成せられる。日本文學史はその原始文學の時代から現代に至る日本文學の流動の跡をきはめて、その展開の必然的理法を明かにする所に大なる目的があるのである。もとより此の如き展開を導出するものとしては、文學史の內的必然性とともに、種々の外的環境を閑却することは出來ない。土地の與へる影響や政治史的變化の與へる影響や、文學を創作する個人の境遇の變化も文學の上に轉機を與へる。かくて文學史の研究が政治や土地や作家の傳記、作家の屬する流派等の研究に相俟つべきことの多いことは言ふまでもないのであり、この點を主として文學

を觀察しようとする立場もある。しかし是等は文學そのものではない。文學の發生的研究として、この方面に注意すべき必要があるけれども、文學自體としてはその形態や表現・內容に中心を置くべきである。

而して本書に於ては、文學の史的展開を考察する基礎研究として、作家の傳記や、作品の解題にも注意を拂ひつゝ概觀しようとするものである。しかし文學史研究に於ける新しい態度を定め、新しい見解を立てるのを目的とせず、從來の成果を整理することを目的とする。文學史の區分としては、上古・中古・近古・近世・最近世の五期に分ち、各時期の間は細分をせず、詩歌・小說・戲曲・日記・隨筆等の文學形態を主として分ち、その各形態に屬する主なる作品・作家を解說するといふ態度をとつた。各時期の中、上古は大和時代と言はれる時期に相應し、中古は平安時代に相應し、近古は鎌倉室町時代に相應し、近世は江戸時代に相應し、最近世は明治時代を主としてさして居る。

大體かういふ風に區劃して考察したいと思ふ。

編述の態度

第一篇　上古文學

序說

上古の文學は文學の發生から文學意識の發生する迄の時期の文學である。從つて文學の發生時代から傳誦文學の時代を經て記載文學の時代に至るまでの過程がこれに見られる。その中には未だ明かな文學的自覺を以て書かれず、神話として歷史として書かれ、結果として文學になつたものもある。しかしこの時期を一貫するものは素樸な抒情的精神であり、力强い情緒である。文獻の上から日本文學の原始時代を見ると、**古事記**・**日本書紀**に見える神話・傳說並に歌謠はその最も古いものであらう。それは記載年代のまゝに作られたものではないにしても、**記紀**の製作年代卽ち奈良時代に製作されたものではなく、それらの文學の搖籃は意外に古い時代にあるであらう。更に祝詞も現存のものは後世の改作を經て居るであらうが、その發生は餘程古いものであり、祝詞のもつ本質的のものから文學の起原を說かうとする者もある。而して神話が歷史傳說や**日本靈異記**に見える佛敎傳說となり、**記紀**の原始歌謠が**萬葉集**の歌となる所に文學としての展開を見ることが出來る。この上古は時間的に見て極めて長いのであるが、その作品の

製作と文獻の製作との時期を分つて觀察するのは困難である。又文獻の成立を基礎とせずその作品の成立から傳誦文學と記載文學との二期に分つことは可能であるが、こゝでは寧ろ形態の上から分類して觀察する。

第一章　神話傳說文學

一、古事記と日本書紀

古事記は**日本書紀**・**萬葉集**とともに日本上代の最も重要なる文獻の一つであつて、古代の文學でもあり歷史でもあり、神話でもあり言語資料でもある。先づ此の書に就いて其の成立・組織・註釋書等を述べる。

古事記の成立

古事記三卷は太朝臣安麻呂の撰であつて、その成立の由來は安麻呂の序によつて知ることが出來る。天武天皇は諸家の有する帝紀及び本辭の正實に違つて居ることを嘆き、今の中に帝紀を撰錄し、舊辭を討覈して後世に傳へようとして舍人稗田阿禮に命じ、帝皇日繼及び先代の舊辭をよみならはしめ給うたが、その後果すことが出來なかつたのを、奈良時代に入つて元明天皇の和銅四年九月十八日に安麻呂に命じて、阿禮の誦した舊辭を編ましめ、功成つて上つたの

が和銅五年正月二十八日である。これに就いて從來阿禮は男性であるか女性であるかに就いて說があり、本居翁は**古事記傳**に於て男性說をとつて居るが、平田篤胤は**古史傳**に於て女性說をとつて居る。また阿禮に誦せしめたのか、種々の記錄を統一させたのであるのかに就いて、說が分れて居る（世界聖典全集、古事記神代卷解題參照）。が從來**古事記**以前は全く語部によつて語られたと言はれて居るが、**古事記**以前に記錄のあつたのは序文を見ても明かである。卽ち阿禮が二十八歲の頃天武帝の詔を奉じて諸種の記錄を統一したのを老年になつて太安麻呂が之を文章として書綴つたのであらう。その時阿禮は六十歲程であつた。而して序文の中に帝紀とあるのは帝皇の世繼の系譜の如きものであり、本辭は種々の物語をさしたものと思はれる。所謂神話などは本辭に屬すべきものであらう。また**古事記**の題號に就いて「フルコトフミ」と訓讀する說もあるが、むしろ「コジキ」と讀む方が穩當である。

太朝臣安麻呂肖像
（前賢故實によるる）

古事記の組織と神話傳說

古事記の組織を見ると、三卷の中で上卷は神代卷であつて、天地開闢神話に始まつて神武天皇御東征の前までに至つて居る。中卷・下卷は神武天皇の御東征から推古天皇に至つて居る。卽ち上卷は神話であり、中卷・下卷は歷史傳說であり、その間に遊離說話と稱すべきものが散見し

て居る。神話は神格を主動者とした宇宙の創造、國家・人類の創生、生死の問題、自然現象等に關する說話を敍述したものである。而して神格にも種々の段階があるが、大體絕對神・自然格神の三に分れる。絕對神としては天御中主神・高御產靈神・神御產靈神の如きがあれど、伊勢諸尊・伊弉冊尊にも絕對神の要素が濃厚である。次に天照大神と素盞嗚尊とは太陽神と暴風雨神として見るとき自然神であるが、一面に於て天照大神は國家統治の人格神であり、素盞嗚尊は八岐大蛇を退治して奇稻田姬を得た如き、英雄神的人格神の性質を有して居る。更に大國主神は純粹なる人格神として、沼河姬や八上比賣を得た如き、黃泉で素盞嗚尊から種々の試を受けながら遂に須勢理比賣を得た如き、英雄神としての性質が多く、更に人文神としての性質をも有して居る。彥火々出見尊の海幸山幸說話の如き人格神としての性質を示して居る。日本神話の場所を見ると、高天原と地上界と黃泉とが主なる舞臺であるが、高天原と出雲地方とは特に主要なる舞臺であり、そこから歷史的・民族的に見て天孫民族と出雲民族との交涉を表して居るとも見られるのである。

神武天皇以後の記事は歷史としての性質が多く、上卷の天孫降臨から引續いて土地の擴大に力を注がれ、民族若しくは國家の發展がその根幹を爲して居る。神武天皇の御東征、日本武尊の御征戰、神功皇后の新羅御征伐はそれらを物語る歷史傳說であつて、その中には强調された神話以來の國家的精神が見出だされる。

更に文章といふ點から見ると、**古事記**は純粹漢文ではないが、さりとて純粹な日本文でもない。兩者を混淆した文といふ事が出來る。さうして歌なども一字一音で表して居るのである。全體として素樸な文體の上に具象的表現は富んで生々した潑剌さが見られる。

眞福寺本古事記

地此時着從其河流下於是須佐之男命以爲人有其河上而尋覓上往者老夫與老女二人在而童女是中而泣尒問賜汝等者誰故其老夫答言僕者國神大山上津見神之子番塩槌者謂之上若雅女者謂櫛名田比賣尒問汝等何故泣者白言我之女者自本在八雅女是高志之八俣遠呂知此二字以音云毎年來喫今其可來時故泣尒問其狀如何着目彼自然加賀醫而化生有八頭八尾亦其身生蘿及檜柏其長度谿八谷幾峽八尾而見其腹者悉常血爛也此詞赤酸醬者今俗謂酸漿者也尒速須佐之男命

（古典保存會刊行本に據る）

終に**古事記**の古本の中、大須眞福寺に藏する古寫本は南北朝時代の寫本であつて應安四年に賢瑜といふ僧が書寫したものであるが、現存のものでは最も古い。また註釋書としては本居宣長の**古事記傳**が劃期的研究である。この書は單に**古事記**の註釋書といふよりは宣長の上代研究を綜合したものであり、近世に起つた古學はこの一書を中心として國家的意識を强調して居るのである。**古事記傳**以後幾多現れた**古事記**の註釋書も結局はこの**古事記傳**によつて作られたものであつて、吉岡德明の**古事記傳略**

（刊本四冊）の力[illegible]この最もすぐれたものであるが、**古事記傳**以外の新說は餘りないようである。チャンブレンは**古事記**を明治十六年に英譯したが、その序論の中に宣長の偏した[illegible]少非難して居る。とにかく**古事記**研究に於ける宣長の努力は永久に滅びないであらう。明治以後では次田潤氏の**古事記新講**その他がある。

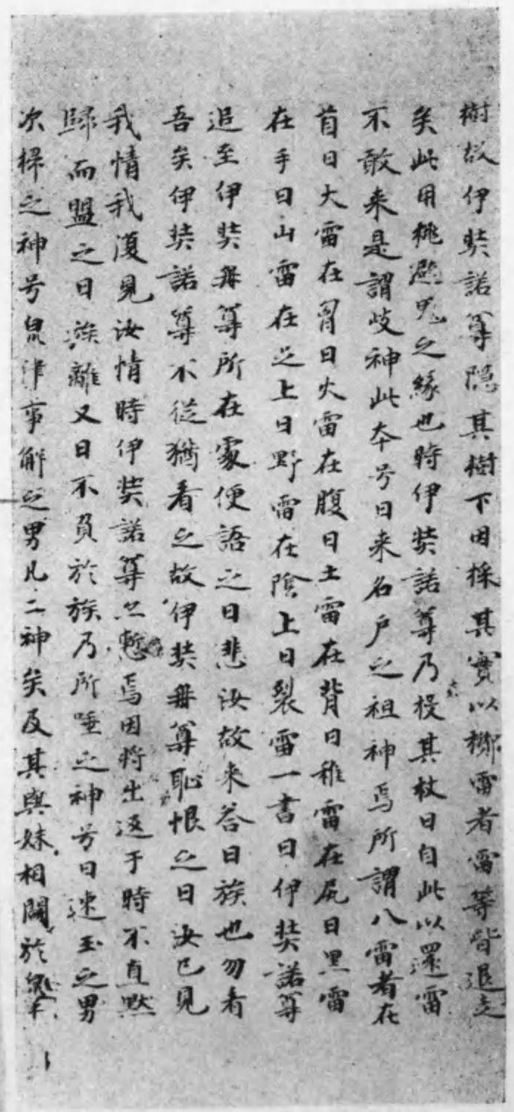
日本書紀とその成立

古事記と並んで上代の文獻の中に最も注意さるべきは**日本書紀**である。**日本書紀**三十卷は國初から持統天皇の朝までの事を誌し、漢文を以て綴つてある。撰者は舍人親王である。舍人親王は天武帝の第三皇子で、淳仁天皇の父君であり、太政大臣となつた。また太朝臣安麻呂も撰者の中に加はつて居る。かくて舍人親王が總裁として事を執り、太安麻呂を始め幾多の學者が集まつてこれを編輯したものであらう。一體歷史編纂は國民としての自覺を促された時に起るものであつて、聖德太子の修史の事業を起されたのも、佛教思想の勃興によつて國民思想の上に危殆を感ぜられた爲であらう。又天武天皇の修史事業を起されたのも、固有思想と外來思想との調和を必要とせられた爲であらう。斯の如くにして更に**古事記**の撰進となり、**日本書紀**の編輯となつたものと思はれる。**古事記**は卷數も少く歷史としては精細を缺き、且つ文體も當時に於てはもとより力をこめたものではなかつたのであつて、大規模な天武天皇の修史事業は直ちに**日本書紀**の編纂に接續する。

舍人親王肖像
（前賢故實によるる）

日本書紀の組織

日本書紀の組織を考へて見ると、三十卷の中、第一・第二は**神代紀**であつて、第三卷から第三十卷までは神武天皇から持統天皇までの歷史が記してある。**神代紀**は**古事記**の上卷より遙かに文學的價値も劣つて居るが、第三卷卽ち人皇紀以後は**古事記**が單に天皇の系譜を記した如き所が多くあるに反して極めて詳密である。且つ**日本書紀**は一書曰、一書曰として種々の記錄の說を擧げて、一に統一してないところにその歷史として史實を重んじた點が見られる。說話の大體の根幹は**古事記**と同樣であるが、神代卷に於ては**古事記**が出雲民族を强調して大國主命の多



日本書紀（竹柏園藏）

方面なる活動を敍述してあるのに、**日本書紀**はこの點に筆を極めて簡略にしたことが注意すべき相違點であり、神武天皇以後に於ては**古事記**は土地の發展と武力の發展とを根幹として居るが、**日本書紀**はこれとともに精神的・文化的方面、例へば儒教・佛教の渡來、殖産工業の發達といふ方面にも力をこめて居るのは、**古事記**の傳說的であるに比して本書の歷史的である事を立證する。

日本書紀の諸本・註釋書

更に部分的な事實の相違は極めて多いのであつて、例へば**古事記**に見える倭建命が出雲建を欺いて、肥の河に水浴して木刀とすりかへて建を殺した時讀んだとある「やつめさす出雲建が佩ける太刀つゞらさはまきさみなしにあはれ」の歌も、**日本書紀**では出雲臣の遠祖出雲振根が弟の飯入根を殺した時に、時人が讀んだと傳へて居る。かういふ風に相違して居る所があるのは、種々の記錄があつて、それらの間に相違があつた爲であらうと思はれる。而して**日本書紀**は立派な漢文に直したため、文章のために事實をまげた點も見出だされるが、然し上代文獻としての價値はこれらのために沒却する事は出來ない。

古事記の最も古い本は鎌倉以後書寫されたものであるが、**日本書紀**は古來非常に重んぜられたために、遙かに古い寫本が傳はつて居る。註釋も古來極めて多いが、卜部兼方の作とする**釋日本紀**、谷川士清の**日本書紀通證**、河村秀根の**日本書紀集解**、鈴木重胤の**日本書紀傳**、飯田武鄕の**日本書紀通釋**などは著しいものである。平田篤胤の**古史傳**も**日本書紀**研究には必要なる註釋である。更に**古事記**・**日本書紀**の歌だけを註釋したものには、釋契沖の**厚顏抄**、荒木田久老の**日本紀歌迺解**、橘守部の**稜威言別**等がすぐれて居る。この**日本書紀**に引續いて**續日本紀**以下の國史が中古に於て作られた。

二、風土記

風土記の成立

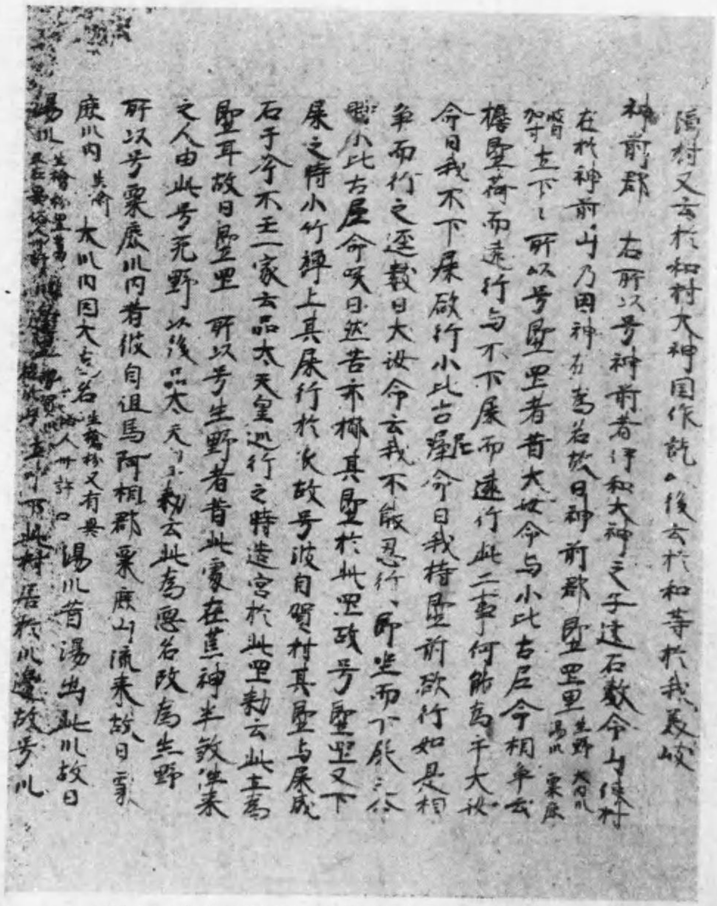
上代の神話・傳說を語る文學として**風土記**がある。**風土記**は和銅六年五月に畿內七道諸國をしてその國々の地誌を獻らしめ、延長二年にも再び撰進の命を下したとある。(**續日本紀**・**朝野群載**)。和銅の時に**風土記**を徵せられたのは、當時勅興した歷史編纂の機運に乘じて起つたものであらうが、また**日本書紀**を編纂するための材料として地方に求められたものであるかとも想像される。かうして**風土記**は各國から撰進されたのであらうが、今日殘つて居るものは極めて僅かで、**播磨風土記**・**常陸風土記**・**出雲風土記**・**豐後風土記**・**肥前風土記**の五種よりない。この中完本であるのは**出雲風土記**のみであつて、他は零本に過ぎないのである。**出雲風土記**は終に天平五年二月三十日勘造とあるから、和銅より二十一年後の天平五年に勘造したものであつて、和銅の時に撰んだのではない。地理的記述が多くて、舊聞異事は比較的少いのであるが、國引の段の如きは興味ある傳說であつて、文學的にもすぐれてゐる部分である。**出雲風土記**に見えてゐる傳說の中心は素盞嗚尊と大國主命とである。**播磨風土記**は卷首が缺けて居るが、これは

現存の五風土記

和銅撰進のものである。**播磨風土記**には興味ある傳説が多く含まれて居り、鄕土傳説の匂がゆたかである。**播磨風土記**に於ては大國主命も滑稽な臆病な神として現れて居る。**常陸風土記**も和銅撰進のものであるといふのが定説である。**播磨風土記**に比して文章も漢文的であり、多少文辭の修飾が見られる。**常陸風土記**には日本武尊の説話が中心となつて居る。**肥前風土記**と**豐後風土記**とは和銅よりは遲れて居ると思はれる。殘つて居る部分も極めて少いのであり、文學的・傳説的の興味も少いのであるが、日本武尊や景行天皇が傳説の中心となつて居るのである。かくの如く其の地方に關係の深い神によつて傳説が統一されて居るのは、興味深い點であると思ふ。

風土記の傳はつて居るものは以上の五箇國であるが、外に**仙覺抄**や**釋日本紀**等に引用せられて居る部分がある。それらを蒐集したのが伴信友の**古風土記逸文**、栗田寛の**古風土記逸文考證**等である。栗田寛には別に現存五國の**風土記**に標註を加へた**標註古風土記**の著がある。これと**古風土記逸文考證**とを參考すれば**古風土記**の大體を知る事が出來る。

風土記は上代の地理書として地方文化を知る貴重なる文獻であるが、傳説としては**記紀**のやうな統一ある説話形式でなく、遊離的な説話であり、殊に地名傳説が最も多い。地名傳説は地名を説明するための傳説であり、それには地名があつて傳説が生ずるものと、傳説があつて地名が生ずるものとあるが、**風土記**に於ける説話は多くは地名があつて傳説が生じたものと思はれる。



播磨風土記（三條西家藏）（古典保存會本によるる）

すゝきほ振別けて、みつよりの綱うちかけて、しもつづらくるやくるやに、河舟のもそろもそろに、國來國意宇と名づくるゆゑは、國引きませる八束水臣津野命の詔はく、やくもたつ出雲の國は、布狹（サヌ）の稚國なるかも、初國小さく作らせり。かれ作り縫はむとのり給ひて、たくぶすま新羅の三崎を、國の餘りやと見れば、國の餘りありとのり給ひて、童女のむなすきとらして、大魚の支太衝きわけて、はた

*米は爾の誤か

來と、引きき縫へる國は、こづのうち絶えよりして、八穗米*支豆支の御埼なり。かくて堅めたてし加志は、石見國と出雲の國との堺なる、名は佐比賣山これなり。また持ち引ける綱は、薗の長濱是なり。また北門佐伎の國を、國の餘ありやと見れば、國の餘ありとのり給ひて、童女の胸鉏とらして、大魚の支太衝きわけて、はたすゝきほ振り別けて、みつよりの綱打かけて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と、引きき縫へる國は、多久のうち絶よりして、狹田の國是なり。また北門良波(ながた)の國を、國の餘りありやと見れば、國の餘りありとのり給ひて、童女の胸鉏とらして、大魚の支太つきわけて、はたすゝき穗ふりわけて、みつよりの綱打かけて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來とひきき縫へる國は、たゆひの打絶よりして、闇見の國これなり、また高志の都々の三崎を、國の餘りありやと見れば、國の餘りありとのり給ひて、童女の胸鉏とらして、大魚の支太衝きわけて、はたすすき穗ふりわけて、みつよりの綱うちかけて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來とひきき縫へる國は、三穗の崎なり。持引く綱は、夜見島これなり。かためたてし加志は、伯耆國なる大神岳是なり。今は國引きをへぬとのたまひて、意宇の杜に御杖衝立てて意惠とのり給ひき。かれ意宇といふ。(出雲風土記國引)

佛教說話としての日本靈異記

三、日本國現報善惡靈異記

傳說文學としては**日本國現報善惡靈異記**三卷がある。本書は奈良の藥師寺の僧景戒の著であつて、その著作年代は明かに記してないが、嵯峨天皇の弘仁年間の事が記してあるから中古時代初期の著である。しかし**靈異記**に見える傳說は奈良時代に成立したものであるからこゝに擧げる。

序によつて支那の**冥報記**・**般若驗記**によつた事も分る。而して此の書が**記紀**・**風土記**の傳說と異なる所は、**紀記**・**風土記**は奈良時代の撰ではあるが、それより以前の神話傳說を統一して、そこに佛教によつて殆ど影響されない說話を見る事が出來るに反して、**靈異記**は雄略天皇頃からの傳說が見えるが、多くは奈良時代佛教の盛なる時の產物で、所謂因果應報の理を中心として、善をすれば善報があり惡をすれば惡報があるとする佛教傳說である所にある。中には雷をとらへる說話、狐と人間との結婚說話の如きもあるが、それらは例外である。

第二章　神祇文學

一、祝詞

祝詞の成立

古代祝詞の現存するものは**延喜式**第八卷に收載されて居る二十七篇が主なるものであり、他に**台記別記**に**中臣壽詞**の一篇があり、**日本書紀**「顯宗紀」に「室壽詞」がある。**延喜式**は藤原忠平・藤原淸貫・大中臣安則・伴久永・阿刀忠行等五人が勅を奉じて延長五年十二月二十六日に撰進したものであるが、祝詞の成立はそれよりもなほ古く奈良時代以前であつたと思はれる。而して現在見られる祝詞がその製作當初の原文のまゝではないことは明かであつて、**延喜式**に收

錄せられるまでに幾度か改刪を經たことは推定せられる所であるが、**延喜式**の編されたよりかなりの以前に於て既に大體現存の祝詞のやうな形式を有つてゐたことを信じたいやうに思ふ。

「この祝詞がいつの時代に何人によつて製作されたかに就いては從來種々論議された。之に就いても確定的に製作時代を定めようとする者と、たゞ漠然と推定するに止めようとする者とあるが、今日より見て明確に時代を定める事は到底出來ない事であつて、たゞその內容・形式などの考察と相俟つて、漠然と新古の區別を想像するに止むべきものである。即ち一方に於て祝詞の成立の重要なる動機となるべき祭祀及び神社の起原成立の上から考へ、他方に於て祝詞に現れた日本固有の思想生活や外來思想などを明かにして、その思想の發生等の考察の上から大體の年代を推定するに止まるべきである。」是等の種々の方面の考察の上から**出雲國造神賀詞**や**大祓詞**、更に**大殿祭・御門祭・祈年祭**などが古いといふ大體の推定はつくのであるが、しかし何時の時代に現在の形となつたかといふ點、また其の前後といふ點は確然とは言へないのである。

祝詞の作者

更に祝詞の作者に就いても、もとより或る個人の作に歸することは不可能であるが、當時神祇官として中臣・齋部二氏が世襲的にこれに當り、國家的の祭祀などにあづかつて居たらしいので、隨つて祝詞の大部分も二氏の手によつて作られたものであらう。なほ朝廷の神祇官の與らない筈の**出雲國造神賀詞**は、出雲國造が朝廷に參賀して讀んだものであるから、その國造に屬する者の作であらうと考へられ、**東西文忌寸部獻横刀時呪**は東西文忌寸部の製作する所であらうといふ事はまた想像されるのである。

祝詞の性質及び組織

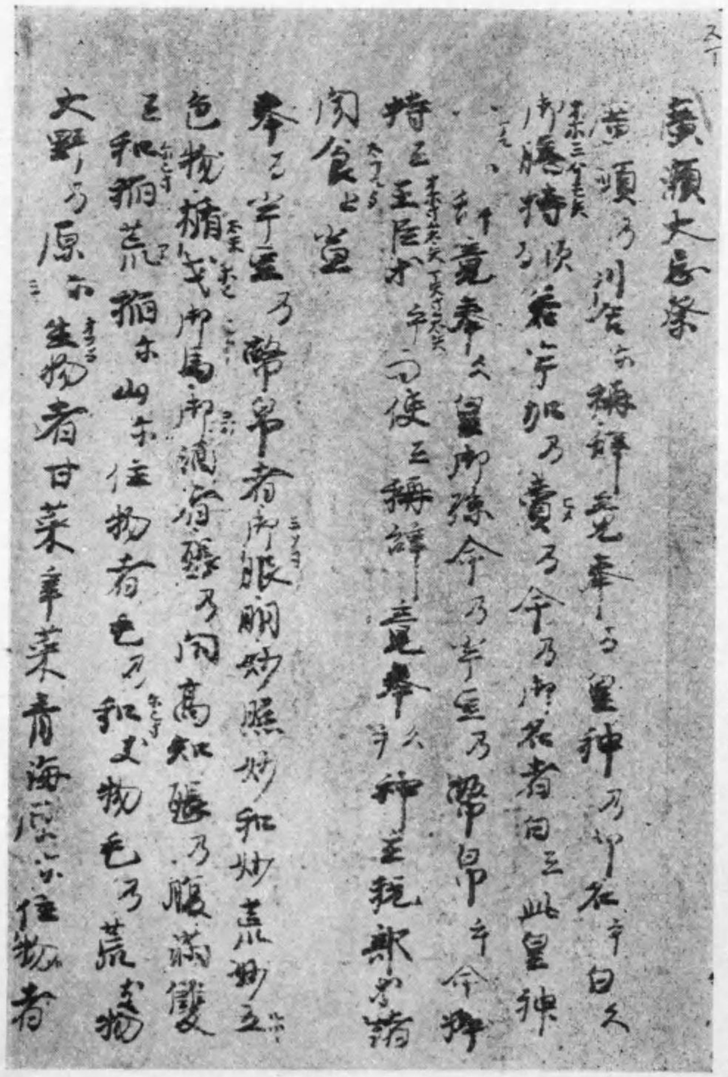
次に祝詞の性質及び組織を考へて見るに、祝詞は祭祀の時神の前に於て唱へるものであつて、その目的には種々の方面があるが、祈願もしくは祝福の意が著しきものと思はれる。祝福の意を持つたものは特に壽詞と稱せられる。祝詞は人が神に對して祈願もしくは祝福するのであるが、又神の人間に對する託宣の如き意味に解する說もある。祝詞の語義は「のることば」であらう。「のる」といふのは本來述べることであつて、人間の意志を神に對して申すのである。祝の字を當てるのは、祝の本義は言を以て神に告ぐる意、もしくは神に仕へ神を饗し言を告げて神を悅ばす人の意であつて、「いはふ」といふのは後出の義で、所謂巫祝の祝であらうと思はれる。かくて祝詞に於ける「のる」の意義は單に述べるのではなく、言靈信仰によつて述べることが實現されることを決定するのであり、そこに意志の表現又は祈願の意を含んで來るのであらう。而して祝詞の形式を見ると、主なる部分が二つに分れ、それに序と結とが附加されて居る。主なる部分の初めの方は祝詞の奏せられる神を主として其神のなした事業、又大祓の如きに於ては大祓の行はれる理由、即ち人はいかにして穢が生ずるかに就いて語つて居る。この部分は**風土記**などに見える神話的事業を語つて居る。**鎭火祭**に於ては伊弉冊尊が火を產まれて死なれる神話的事件を語つて居る。この條には**風土記・日本書紀**の所傳と異なつてゐる部分も多い。而して後半はかくの如き功業ある神に對しこれを祝福し、もしくは祈禱する祝詞の主なる

目的を表して居るのである。而してこの祈禱には多く幣物を捧げる事が見えて居る。幣物を捧げて神を祭るのである。卽ち前半の神話を語る所は祝詞として見れば副の部分であるが、こゝに建國の由來を語り罪惡の根源を說き、祝詞の文學的興趣の豐かさを增して居る。後半は祝詞としては極めて重要なる眼目であるが、幣物をならべて寧ろ興味としては前半に劣るのである。故にこの兩者相俟つて祝詞が一箇の統一ある組織をなして居るのである。

祝詞の奏せられるのは、神に對する祭祀又はそれに類する儀式の行はれる場合である。從つて祝詞の神は神社に祭られた神と一致する。而して祝詞に表れた思想のうち最も注意すべきは穢・罪・災及びこれに對する祓の思想である。現實生活の中から一切の惡とか穢れとかを消滅させて、淸淨なる世界を作り出すこと、これが祝詞の中心思想である。祝詞の祈願の對象は國家の場合も家の場合も又個人の場合もあるが、何れにしてもその家なり國家なりが災なくして安穩に、而も淸くあることを祈願するのであり、同時に國民の生業としての農作の豐なる事に對する祈願が行はれてゐる。而して壽詞に於ては平和なる國家、平和なる家に對する祝福の思想が見られるのである。

文學としての祝詞

更に文學として祝詞を見ると敍事的な部分が多いが、中心は抒情的な部分にあらう。又韻律的要素ももとより多いが、詩歌形式とは異なるものがある。而して祝詞の宗教文學としての特質は更に重要なるものがある。宗教文學たる性質上、表現の上にも莊重なる格調の美が現れてゐるのである。是はその內容から見ても超現實的な神の世界の事を扱つて居るためでもあらうが、その表現が抽象的であること、又形式が如何にも整齊して居り、部分的技巧にも繰返・對句などの修辭を用ゐてゐることも原因してゐると思はれる。



祝詞式（九條家藏）（稻荷神社刊本による）

こ

れがために又一面には個性的感情の表現を妨げて類型的となり、生々しい實感から遠ざかつて居るといふ弊も生じてゐるのであつて、文學として多くの價値を與へられない事になつてゐる。

終に從來の祝詞研究を見るに、祝詞は神道の上には注意すべきものであるから、この方面から多く研究せられ、**大祓詞**に關する研究は殊に多い。が研究として最も注意すべき最初の著作は賀茂眞淵の**祝詞解**・**祝詞考**である。眞淵は大膽なる直觀的態度で、註釋の外に祝詞の成立年代の推定を試みた。未だ從ひ難いものではあるが、この大膽なる試みは祝詞研究の機運を促した。本居宣長は祝詞中の重要なる**大祓詞**と**出雲國造神賀詞**との註釋を試みて、眞淵說の批評をもして年代推定說に反對した。また平田篤胤は祝詞の神道史的價値を**古史徵開題記**の中に主張して居るが、**祝詞正訓**を作り、**古史成文**には祝詞の本文から多く材料をとつて居る。近世に於ける祝詞研究は鈴木重胤の**祝詞講義**に至つて精細の域に達したと言ひ得る。明治以後では次田潤氏の**祝詞新講**がある。

宣命と祝詞との異同

二、宣　命

宣命の意義

宣命は天皇から臣下に賜ふ詔であつて詔勅と同じであるが、漢文で賜うたものを特に詔勅といひ、所謂宣命體で書かれたものを宣命といふのであつて、**續日本紀**に見える六十二の宣命を主なる文獻とする。しかし**日本書紀**に見えてゐる詔は漢文で書かれてゐるけれども、これは**日本書紀**の編者が漢文に改めたもので、最初書かれたものは宣命體であつたと思はれる。**續日本紀**に見えてゐる宣命は文武天皇から光仁天皇に至るまでのものであつて、純粹に奈良時代の製作である。

更に所謂、宣命體といふのは日本文であるが、手爾乎波など普通假名で書くべき所に漢字を一字一音式に用ゐて小さく書くのである。たとへば

大臣明日者參出來仕奉止待比賜間爾休息安麻利爲參出來須事波無之物

の如く、手爾乎波又は活用する詞は普通小字で書くが

受被賜而うけたまはりて

將知食國しらさむをすくに

將嗣坐御世名つぎまさむみよのな

の如く小字を用ゐない場合もある。かくの如き文體が何時頃作られたかは疑問であるが、今日ある材料では文武天皇即位の宣命の如き最も古いものであると思はれる。

宣命の特質

宣命を全體的に見ると、內容の上から見て、第一に國家を中心として、君臣の間に平和なる親子の如き關係が存する。もとより宣命は天皇の御言葉であつて臣下からの言ではないが、而も天皇が常に國家を中心として御自身を輕く見給ひ、天皇の位にある事を常につゝしみおそれて、臣民のために、御心をいためられ、功臣には感謝の心をもらされ、柔順ならざるものに對

しても尙反省せしめ、而も反省を與へても服從せざる時は涙を呑んで國家のために制裁を加へられるが、出來るかぎり制裁を輕くして居られるのである。この言を拜する臣下が感泣して忠を誓つたことは推察に餘る所であつて、奈良時代の末期には政治史的に見て種々暗い所もあつた事は歴史に見える所であり、宣命の上にもさういふ事實が多少見えるのである。天皇の御心は常に國家を中心として臣民を子の如く慈まれる御心は燃ゆるが如くであつた。かくの如きは日本固有の國家的思想である。

第五に宣命にはかくの如き固有の美しい君臣關係を基礎として作られた思想とともに、外來思想の影響も祝詞の如きよりは遙かに多く見られる。外來思想の中でも殊に佛教思想はその著しいものであつて、從來の神を中心とする思想と對立的に行はれてゐる事が知られ、而してある場合には神よりも寧ろ佛を重んぜられ、又は神と佛とを融合せしめて神佛融合の觀念を表して居るのである。而してこの佛教思想とともに道家思想・陰陽思想などもしば〳〵見えるのである。

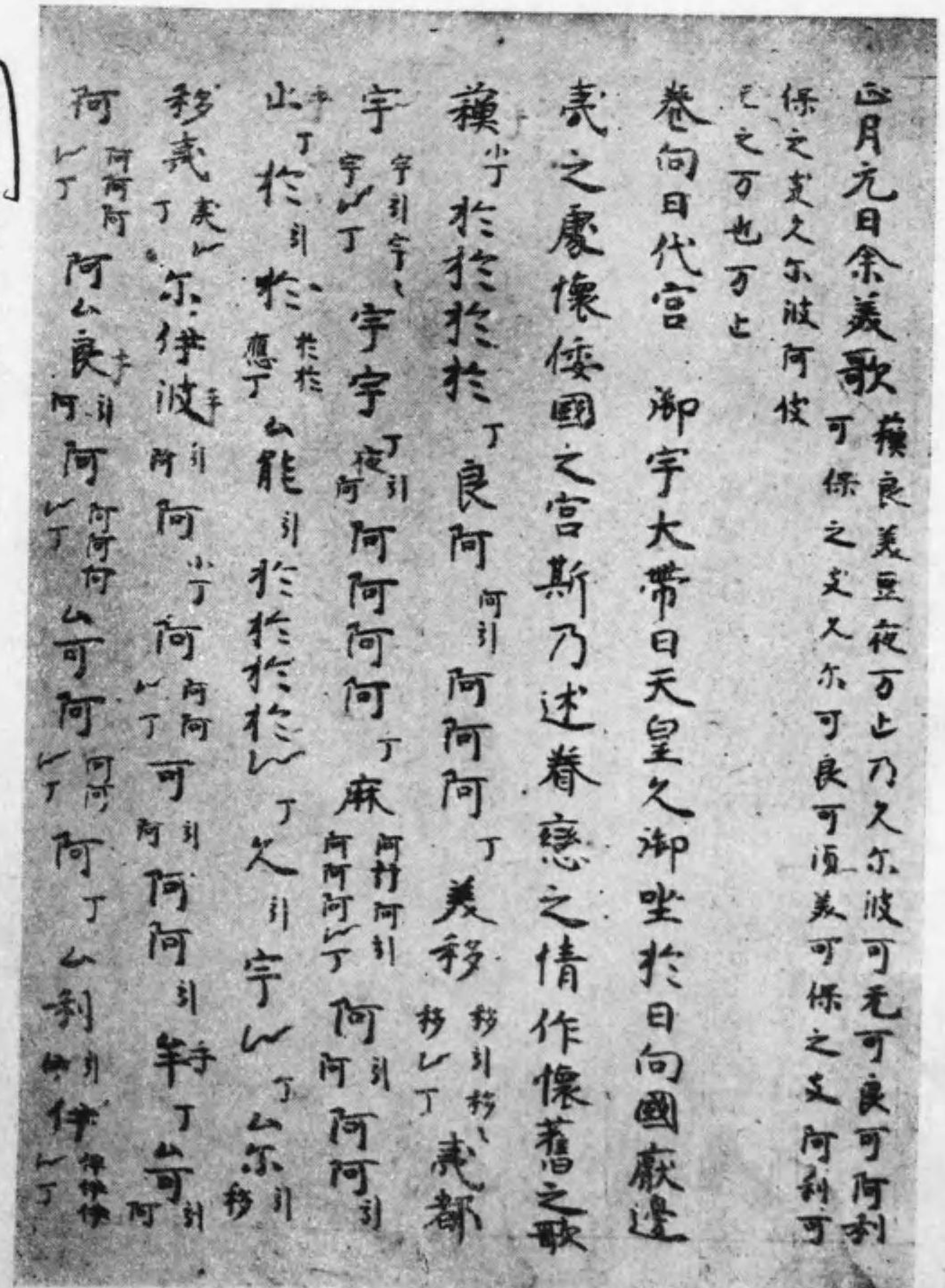
第三にこれを形式的の方面から見る時、帝王の御言葉であるといふ點に於て、又全體の形式が祝詞の如く整齊して統一されて居り、言葉も抽象的に長々とした言葉から成つて居り、かつ感情の表現が死を悼む宣命などを別として激越でないといふ如き點からみて、やはり莊重の感を與へるのである。但し繰返・對句の如きは祝詞よりも少く事柄も祝詞よりは具體的であるといふ點に於て祝詞と相違する所もあるが、全體から見て、殊に形式上から見て祝詞と同一に論ぜらるべき性質を餘程多くもつて居るものと思はれるのである。宣命の研究としては本居宣長の**歴朝詔詞解**が殆ど唯一のすぐれた註釋書である。

第三章　詩　歌

一、記紀歌謠

古事記・**日本書紀**は神話傳說文學として見られるが、更に注意すべきは、これらの中に上代歌謠の殘されて居る點である。上代歌謠は**萬葉集**の中にも見出だされ、また**上宮聖德法王帝說**・**續日本紀**・**古語拾遺**・**風土記**・**日本國現報善惡靈異記**・**琴歌譜**その他にも收められて居るが、**記紀**によつて最も多く見られるのである。卽ち**古事記**に百十餘首、**日本書紀**に百二十餘首あつて、長歌・短歌・旋頭歌その他各種の形式の整はない歌が多く見出だされる。五七音の定まらない形式や、長歌にしても反歌も獨立してゐないのであるが、しかし形態の萠芽は見られる。さうして歌謠の最初の發現である詠歎から出發して、抒情詩的の歌・敍事詩的な歌・敍景詩的の歌などに展開して居るのであるが、何れにもなほ素樸な心情を見ることが出來る。しかし、日本最古の歌謠を傳へてゐるといふ點で、この二書は日本歌史の上に尊い資料を提供するものと言はなけ

や雲たつ出雲八重垣妻ごみにやへ垣造るそのやへ垣を」



琴歌譜（古典保存會刊本による）

ればならぬ。

上代歌謠の編纂されたものには**日本歌選**上古篇（佐佐木信綱氏編）**續萬葉集**（武田祐吉氏編）がある。

みつ〳〵し久米の子らが粟生にはかみら一もと其根がもとそねめつなぎて撃ちてしやまむ

佐韋川よ雲たちわたり畝火山木葉さやぎぬ風吹かむとす

倭は國のまほろばたゝなづく青垣山こもれる倭しうるはし

ちばの葛野を見ればもゝちだる家庭も見ゆ國のほも見ゆ

二、萬葉集

萬葉集の歌は上古文學の精髓であるばかりでなく、日本文學史上に於ける有數の文學作品である。**記紀**の歌に端を發した詩歌がこゝに至つて抒情詩として行くべき極點に達したといふ事が出來る。

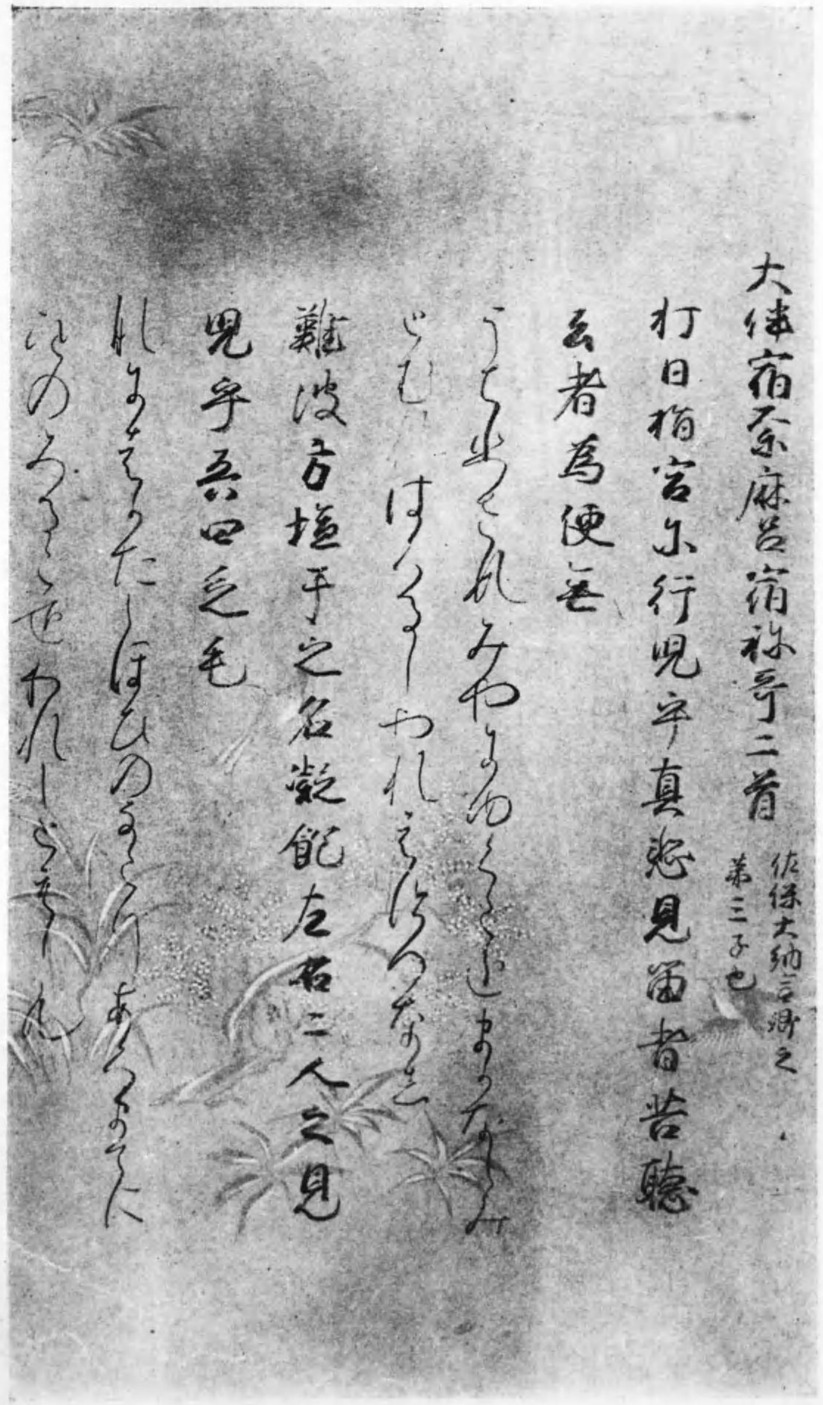
萬葉集の撰者は從來橘諸兄で、天皇の命によつて撰んだといふことが**榮花物語**に見えて世に行はれてゐたが、中古時代末期の藤原清輔の**袋草紙**や藤原定家等から大伴家持の私撰說が行はれ、仙覺は橘諸兄・大伴家持兩人說をとなへた。而して元祿になつて契沖が多くの根據を擧げて家持私撰說を唱へてから多くの學者はこれに據つた。この間に春滿は諸兄の撰に家持の集の混じたものとし、眞淵もこの說に贊して**萬葉集**に新古の二部ありとした。宣長も**全部卷々之考**に大伴家持の二度に撰したものとした。現在に於ても大伴家持が撰定の上に主に力を注いだことは大體承認せられて居るが、卷一・二の勅撰說も提出せられて居り、必ずしも一人の撰とするこ

とは出來ない。次に撰定の時代に就いて見るに、淳仁天皇の天平寶字三年正月の歌まであるから、ほゞ成立したのは稱德天皇の頃であり、更に平安時代に至るまで改定を加へられて現存の形になつたものであらう。要するに作者ならびに年代に就いてはなほ考察の餘地がある。

萬葉集の組織

萬葉集二十卷は長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首、合せて四千四百九十六首（この歌數は數へやうによつて相違が起る。こゝの計算は萬葉集古義に據つた）を含んだ歌集である。後世に於ては長歌は衰へて**古今集**にも數首見えるだけであり、その他の歌集にも餘り長歌は見ることを得ないが、**萬葉集**には長歌が二百六十餘首もあり、かつ後世に亡びた旋頭歌があるといふ事はその形式に於て**萬葉集**の變化に富む所以である。而してその分類を眺めると、大體に於て雜歌・相聞・挽歌・譬喩歌・四季・四季相聞の六部に分たれて居る。**古今集**以後は四季・戀・哀傷・羈旅・祝賀・雜などになつてゐるが、**萬葉集**の分類に暗示を得て居る事は明かである。

作者も年代も未詳の歌が多くあるが、それらの明かなものに就いて見れば、仁德天皇から淳仁天皇の天平寶字三年まで約四百五十年に亙つて居るが、天武天皇以前の歌は少く、主として持統天皇から淳仁天皇の頃まで約七十年間の作を含んで居る。二十卷のうち第一卷と第二卷は全體の組織が整然として居るから最も古い卷であらう。卷五は山上憶良の歌が多く見えて居るから憶良に關係の深い卷であらう。卷九や卷十六には傳說を取扱つた歌が多い點に民衆詩として注目すべきものがある。卷十三は古い抒情歌として注意すべき卷であり、卷十四は東歌を含



桂本萬葉集（帝室御物）（刊本による）

んで居る點に興味があり、卷二十にも防人の歌を多く含んで居るのは、家持が卷十四にならつて集めたものであらう。卷十七・十八・十九・二十は家持の日記の如き卷であらう。

用字法

萬葉集に就いて更に注意すべきことはその用字法である。卽ち漢字を以て音を表すのであつて、これにも音を表すものと訓を表すものと、更にその他のものとがある。音を表すものにも「雷」を「伊加豆知」と表す正音と、「安印」を「アイ」と訓ずるやうな略音とがあり、訓を表すものにも「天地」を「アメツチ」と訓ずる如き正訓と、「清明」を「アキラケク」と訓ずる如き義訓とがある。更に「荒磯」を「アリソ」と訓ずる如き約訓、「蟻」の字で「在」を現す如き借訓もある。更に又「山上復有山」として「イヅ」と訓じ、「馬聲蜂音石花蜘蛛」を「イブセクモ」と訓ずる如き戯訓もある。

主なる歌人

次に**萬葉集**の中で主なる歌人を見ると、第一に柿本人麻呂がある。人麻呂は持統・文武の頃に朝廷に奉仕した歌人で、官は極めて低かつた。**萬葉集**の中で歌の數も多く、かつ長歌に富んで居る。其の長歌は氣魄の力强さと格調の雄大なる事を以てすぐれて居る。その短歌も羈旅の歌の如き、流るゝやうな諧調を以て自然の姿を表さうとして居る。人麻呂と竝稱せらるゝ赤人も傳記は極めて不明であるが、その奉仕した年代を見ると人麻呂よりはやゝおくれて居る。彼は歌も少く全部で四十九首で、その中長歌十三首、短歌三十六首であるが、長歌は獨自の創造が尠く、その特質は短歌にあるのである。さうして題材からいつて敍景的な歌が多い。更に**萬葉**

集の中で外來思想の影響を比較的多く受けて居る歌人に山上憶良と大伴旅人とがある。山上憶良は若き時遣唐小錄として渡唐したことが見えて居るから、その間に儒教的教養を得たものと思はれる。筑前守に赴任したのは餘程老年であつたと思はれる。當時太宰帥であつた大伴旅人との交遊は深く、憶良から奉つた歌も多い。彼は官位に於ても高きを得なかつた上に、病疾のために苦しみ、貧窮のためにも艱んだ。加ふるに現實に執着して超然たり得なかつた彼には、事毎に憂悶の種ならざるはなかつた。彼の歌は貧窮問答を始めとして、彼の境遇・思想から產出されたものであつた。彼には強い理智的な反省的な心境のためにその歌に觀念的な歌があるが、

柿本人麻呂肖像
（前賢故實によるる）

多くは人生の底から發した沈痛な響がある。赤人を自然詩人とすれば彼は人生詩人と言ふべきであらう。而して儒教的精神を思想的根柢に持つ憶良に對して、老莊思想の影響を受けた人として大伴旅人がある。大伴旅人は名家大伴家に生れ、祖父は右大臣であり、父も大納言であつた。彼も又從二位大納言にまで昇つた。地位は高きを得、性格は明るく快活であつたらしく、其の歌は安易に過ぎると思はれるまで明朗である。

次に旅人の子の大伴家持は萬葉集の撰定にも與つて力あるのであるが、更に歌も極めて多く殘つて居り、卷十七以下の四卷は家持の歌が主になつて居る。彼は歌才には比較的貧しく、人

麻呂や憶良に私淑してその詞句を襲用したものも多いが、努力を以て展開を求めてやまなかつた彼には強い人性がひらめいて居る。以上の歌人の外にも高市黑人の如きは歌數は尠いが、其の歌は深い自然觀照の域に入つて居り、高橋蟲麻呂の如きは明かに名の記してある歌は卷六にある天平四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋蟲麻呂作歌一首幷短歌とある二首のみであるが、外に高橋蟲麻呂之歌集中出とあるのが、蟲麻呂の作と認められるのである。彼は東國地方に任にあつた事があるらしく、その地方の傳說を多く詠じて居る所に傳說歌人としての特異な色彩を放つて居る。

大伴旅人肖像
（前賢故實によるる）

又女歌人としては旅人の妹で家持の叔母に當る坂上郎女は女歌人の中で最も多くの歌を殘し、又女性として多方面の題材をうたつて居る。理智の勝つた冷靜な女性を思はしめる。又天智天皇と天武天皇とに愛された額田女王の歌も、優雅な自然愛の精神が見えて居り茅上娘子や笠女郎の如きは強い情熱的な戀愛をうたつた女歌人としても見る事が出來る。是等の歌人の外に作者未詳の歌にすぐれた歌が多くある。東歌の如きにはその點に於て注意すべきものが多く、卷十三の抒情歌も素樸の中に、強い力の籠つた作が多い。

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉襷畝火の山の、橿原のひじりの御代ゆ、あれましし神の盡、樛の木のいや繼ぎつぎに、天の下知ろし召しし、空に見つ大和をおきて、青丹吉奈良山を越え、如何さまに思ほしめせか、天ざかる鄙にはあれど、岩ばしる近江の國の、さゞ波の大津の宮に、あめの下知ろし召しけむ、天皇の神の尊の、大宮はこゝと聞けども、大殿はこゝと云へども、春草の茂く生ひたる、霞立つ春日のきれる、百敷の大宮所、見れば悲しも

反歌

さゞなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

さゞなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも

山部赤人

田子の浦ゆうち出て見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

古の舊き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり

み吉野の象山のはのこぬれにはこゝだも騒ぐ鳥の聲かも

思子等歌一首

瓜はめば子供思ほゆ、栗はめばましてしぬばゆ、いづくより來りしものぞ、まなかひにもとなかかりて、安寐(ヤスイ)しなさぬ

山上憶良

反歌

しろがねも黄金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

わかければみちゆきしらじまひはせむしたべの使おひてとほらせ

大伴旅人

しるしなき物を念はずは一杯の濁れる酒をのむべかるらし

此の世にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にもわれはなりなむ

妹として二人作りしわがしまはこだかくしげくなりにけるかも

こゝにありて筑紫やいづく白雲のたなびく山の方にしあるらし

大伴家持

朝床にきけば遙けし射水河朝こぎしつゝうたふ船人

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯なくも

わが宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけきこの夕かも

敷島のやまとの國にあきらけき名におふものを心つとめよ

作者未詳

旅人のやどりせむ野に霜ふらば我が子はぐくめ天の鶴むら

しなが鳥猪名野をくれば有間山夕霧たちぬ宿はなくして

萬葉集の研究は古くから行はれ、特にその訓法については古く中古時代の天暦五年に坂上望城・源順・紀時文・大中臣能宣・清原元輔等梨壺五人によつて古點が作られ、更に中古時代の末になつて大江佐國・藤原孝言・大江匡房・源國信・源師頼・藤原基俊等により次點が施されたが、猶訓

の附せられなかつた歌に仙覺が新點を加へた。この後も訓法は多くの學者によつて試みられたが、一方註釋の方面に於ては近古前期の仙覺の**萬葉集註釋**は最初の優れた著と言ひ得べく、その後宗祇・由阿なども註釋を試みたが、特に優れたものはなかつた。近世に於ては多く作られたが、契沖の**萬葉代匠記**、賀茂眞淵の**萬葉考**、鹿持雅澄の**萬葉集古義**等は著しきものであり、それに次いで出た明治の木村正辭の**萬葉集美夫君志**など註釋書としてすぐれて居る。

佛足石歌碑體の歌

なほ上古時代の歌としては**萬葉集**の外に佛足石歌碑體歌二十一首がある。是は奈良藥師寺にある金石文であつて、奈良時代の刻である點に殊に貴い資料である。その歌は形式に於て短歌に一句多く、謠物としての性質を示して居る。內容は佛教思想をうたつたもので概念的に失して居るが、格調の流麗愛すべきものがある　一字一音で表してあるが假名混り文で二つの例を擧げる。

佛足石歌碑體歌

みあとつくる　石の響は　天に到り　地さへ搖れ　父母が爲に　諸人のために
雷の　光の如き　これの身は　死のおほ君　常にたぐへり　長づべからずや

神樂・催馬樂もこの期の作があると思はれるが、今は中古時代に讓つておく。

三、懷風藻

懷風藻の性質

上古時代の作品はすべて漢字で記されてあり、從つて漢文も多く作られて居る。**萬葉集**の題詞がすべて漢文で記され、殊に憶良や旅人の如きは長い漢文の序などを記して居る。而してこの時代に於ける漢詩文を集めたものに**懷風藻**がある。**懷風藻**一卷は弘文天皇を始めとして六十四人の詩百二十篇を含んで作家には簡單な傳が附してある。六十四人の中**萬葉集**に名の見えるものが河島皇子・大津皇子・大伴旅人を始めとして二十人ほどある。成立の年月は天平勝寶三年十一月であり、また序に「余撰二此文一意者、爲レ將レ不レ忘二先哲遺風一、故以二懷風一名レ之。」とあるによつて**懷風藻**の意味も明かである。この書の撰者は未だ定說がない。

懷風藻の內容形式

懷風藻の詩材から觀察して見ると、第一に宴に侍する詩、殊に天皇の詔に應じて詠んだ詩が多く、君德を美し、或は自然をたゝへて居るが、類型的で、個性味が乏しい。第二に自然にか

くれ、又は諸所の自然を誦したものも多く、敍景詩と稱すべき詩であるが、純粹の客觀詩は少く自己の主觀を寓したものが多い。第三に所感を述べた主觀詩と稱すべきものがあるが、自己の不遇をいたんだ如き詩もあり、比較的個性味に富んで居る。外に少數ではあるが遊獵の詩、或は長壽を賀した詩、或は望鄕詩、又七夕の詩も數首あるが、最も多いのは宴會の詩と敍景詩とであつて、「**萬葉集**の如く戀愛をうたつた詩は**懷風藻**には極めて尠いのである。次に作者を見ると數奇なる短き生を送られた大友皇子・大津皇子の詩は心を動かすものがある。又藤原宇合・石上乙麻呂も詩人としてすぐれて居る。奈良時代後期に於ては、淡海三船・石上宅嗣がすぐれて居るが、**懷風藻**には其の詩が見えて居ない。**經國集**などに見える唐に於て名聲をあげた安倍仲麻呂も此の時代の詩人である。

臨終　　大津皇子

金烏臨西舍　鼓聲催短命　泉路無賓主　此夕離家向

五言奉西海道節度使之作　　藤原宇合

往歲東山役　今年西海行　行人一生裏　幾度倦邊兵

五言秋夜閨情一首　　石上乙麻呂

他鄕頻夜夢　談與麗人同　寢裏歡如實　驚前恨泣裏

空思向桂影　獨坐聽松風　山川嶮易路　展轉憶閨中

第二篇　中古文學

序說

上古時代の文學が素樸ではあるが純眞なる感情を發揮せられて居るに反して、中古時代の文學は感情が纖細になり情趣化すると同時に、表現も亦名文の勃興により優麗なる文體となり、形式・內容相まつてそこに統一したる文學を形づくつてゐる。而して文學の形といふ點から見ると、刹那的抒情である詩歌から感情を反省し、客觀化した物語への展開をなして居るが、時代的展開から見ると、傳奇的浪漫的傾向から寫實的となり、更に頹廢的傾向に進んで居る。卽ち第一期は中古時代の初期から延喜頃までの時代であり、一方は純粹感情の世界から理智的傾向に進んだ**古今集**の歌となり、また一方には歌から物語への展開をなす**伊勢物語**・**大和物語**となり、傳奇的傾向の著しい**竹取物語**及び**宇都保物語**等の作品となつて居る。第二期は道長中心時代であつて、浪漫的傾向から寫實的傾向に傾いて來たのであつて、**源氏物語**・**枕草子**や**和泉式部日記**・**紫式部日記**などはこの時代を代表するものであり、歌の上には**古今集**を踏襲したに過ぎない**拾遺集**などが出でたのであつて、物語がその最も盛を極めた時代であり、その作品の中心に於て理想的傾向はあるが、寫實的態度が著しく現れて居るのである。次に第三期に於ては寫實

的な態度から說話の變化や奇拔な構想を努めて求めるやうになり、一方貴族の平民化、靜の動化、小說の戲曲化といふ方面に進んで行くのである。**狹衣物語**・**濱松中納言物語**から更に**とりかへばや物語**などになつて殊に甚しいのであり、一方物語である**源氏物語**を實際の人物に求めて表現した**榮花物語**や**大鏡**の如きが出で、更に**今昔物語**の如きが作られるに至つたのである。而して歌に於ても陳套になり因襲化したのが新舊二派の對立となり、そこから新たなる文學展開の道を示して來るのである。こゝにはかういふ三期の展開を考慮におきつゝ、詩歌・物語・日記・隨筆に分つて考察したい。

第一章　詩歌

一、漢詩

中古時代は、假名の行はれたことによつて假名文の最も隆盛となつた時であるが、初期に於ては和歌が一旦衰へて漢詩・漢文が隆盛となつた。これは嵯峨帝が漢詩を好まれたにもよるであらう。從つて上古時代の**懷風藻**を承けてこの時代には多くの詩文集が撰進された。**凌雲集**・**文華秀麗集**・**經國集**の如きはその主なるものである。**凌雲集**は**凌雲新集**ともいひ、嵯峨天皇の弘仁五・六年の頃小野岑守が、勅を奉じて菅原淸公・勇山文繼と議り、また賀陽豐年の力をも得て撰進したもので、延曆元年から弘仁五年までの詩を集めてあり、作者二十三人、詩九十首を收めて一卷から成つて居る。嵯峨帝の御製が二十二首、賀陽豐年・小野岑守が各十三首ある。**懷風藻**が五言詩の古樸な詩の多いに比して優麗になつて居るのを認める。次に**文華秀麗集**は**凌雲集**に稍おくれて嵯峨帝の弘仁九年に成つて居り、仲雄の序によれば藤原冬嗣が勅令を奉じて、仲雄・菅原淸公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤等が撰したもので、作者二十六人、詩百四十八首あり、三卷になつて居る。嵯峨帝の御製が最も多く載せられて居る。更に**經國集**は良岑安世の下に滋野貞主・南淵弘貞・菅原淸公・安野文繼・安部吉人等が撰進したもので、淳和帝の天長四年に成つて居る。前の二集に比して量も大きく二十卷であるが、今は卷一・卷十・卷十一・卷十三・卷十四・卷二十の六卷のみが傳はつて居る。組織分類も整然として居り、貞主の序がある。嵯峨帝の御製が最も多く、貞主の作も多くを載せてあるが、石上宅嗣や淡海三船など古の詩人のをも集めてあり、又新しく空海の作なども見える。

詩人

この時代には、帝皇中に俊秀な詩人あらせられ、嵯峨天皇最も秀でられ、平城・淳和二帝の如きもまた詩文に長せられた。臣下にも是等の三集に多くの作を殘して居る仲雄・賀陽豐年・滋野貞主の如きすぐれて居り、冬嗣の如きもその作をとゞめて居るが、詩人としてまた詩學を傳へた點に於て空海の名は殊に忘れ難いものである。空海は入唐僧ともなつた人で、詩文の才があり、**三敎指歸**・**性靈集**などの著を遺してゐる。**文鏡秘府論**及びそれを簡約した**文筆眼心抄**は、詩

空海

の法則を論じた書で、平安時代の歌學の上にも影響することの大きかつた書である。又小野篁も空海とならんで詩文の名高かつたが、その作は**經國集殘篇**・**扶桑集**・**本朝文粹**等に見える。更にや丶時を距て丶貞觀より寛平頃には、都良香や菅原道眞が詩人としてすぐれて居り、殊に道眞は不遇なる政治家として筑紫配流の悲痛なる境遇を詠じたために人の心を打つ作が多い。**菅家文草**十二卷と**菅家後集**一卷とがあり、**後集**は筑紫の太宰府に於て詠じたものを集めたのであつて、初め**西府新詩**といひ、紀長谷雄に贈つたものと傳へられる。その卷頭の五言詩「離家三四月　落涙百千行　萬事皆如夢　時時仰彼蒼」の如き先づ人の肺腑をつく。而して是等の詩人の中でも小野篁の如き歌人としても名があり、道眞また歌を**大鏡**などに留めて、その平易暢達の中に無限の感慨を述ぶる所彼の詩と同樣である。

小野　篁

菅原道眞

以上の如く三詩集などを中心とした中古時代初期の漢詩漢文は、一面に於て**日本書紀**などの系統を承けて、律令格式や**續日本紀**以下の國史をも產出したのである。さうして中期以後に於ては和歌・物語の隆盛になるに隨ひ漢詩漢文は衰へたのであるが、男性はなほ漢文に親しみを持ちこれを綴つて居たのである。而してその詩文を見るべきものには、藤原明衡の撰した**本朝文粹**があり、外にも**扶桑集**・**本朝麗藻**などがある。**本朝文粹**は十四卷と外に目錄一卷があり、嵯峨天皇の弘仁年間から一條院の寛弘年中に至るまで十五代二百餘年間の文を卷毎に類別して集めてある。卽ち賦・雜詩から詔・勅書・官符・論奏・序・讃・論・記・祝文・落書其の他の類に分つてある。作家としては菅原・大江の二家が著れて居り、菅原家の菅三品輔正、大江家の以言・匡衡の如き殊にその名が高いが、他にも源英明・紀齊名・慶滋保胤を始めすぐれたものが多い。

中期の漢詩人

更に中古時代の末期に於ては**續本朝文粹**・**朝野群載**があり、外に**本朝無題詩**の如きもある。**續本朝文粹**は十三卷あり、明衡の**本朝文粹**に次いで藤原季綱が撰したもので、**朝野群載**は三十卷あつたが今二十一卷存して居る。三善爲康の撰したものである。而してこの時代に最も漢文に名の高かつた者は大江匡衡の曾孫匡房であり、その著は**續本朝文粹**や**朝野群載**に載つて居るものの外、有職の書である**江家次第**や、その談を門人の筆記した**江談抄**がある。

後期の漢詩文

二、和　歌

中古時代の詩歌の中心は和歌であつた。初期に隆盛を極めた漢詩文が衰へるに及んで和歌は再び起つてきたのであつた。しかし**萬葉集**時代の長歌、旋頭歌などの形式は衰へて短歌形式が中心となり來つた。而して延喜年間に**古今集**が撰定されるに至つたのであるが、その前にも菅原道眞の撰といふ**新撰萬葉集**が編まれて居る。

新撰萬葉集は上下兩卷から成り、それ〴〵の卷前に序があり、上卷は寛平五年九月二十五日の年附があるが、下卷は延喜十三年八月二十一日に成つた由記してある。而して終りに上卷は菅公の撰であるが下卷は他人の撰であらうとしてある。すべてで三百餘首の歌が萬葉假字で記

新撰萬葉集

古今集の編纂と組織

古今集の三期

してあり、七言絶句で同じ意味の詩が記してある。道眞の詩と歌とを思はせるやうな佳麗な詞句から成つて居る。この**新撰萬葉集**とともに、中古初期の私撰集として**古今六帖**がある。紀貫之の女の撰といはれて居る。歌としての價値は尠いが、私撰集として注意すべく、その分類論に注意すべきものがある。而して是等の集の上に立つて初期の歌界を代表するものは延喜五年になつた**古今集**である。

古今集は醍醐天皇が延喜五年に紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑に勅して撰ばしめ給うたものである。一體この集は**萬葉集以外**の古歌・新歌すべて千百首程を選んで**萬葉集**の後を繼がさうとしたもので、卷數も二十卷ある。首に序があつて、歌の本質論から**詩經**の六義によつて歌の分類、更に從來の歌の變遷を述べて六歌仙論に及び、**古今集**編纂の由來に筆を結んで居る。歌論としてはもとより簡單であるが、全體に統一があり、歌論の初めのものとして注意せらるべき文字である。而して二十卷は四季・賀・離別・羇旅・物名・戀・哀傷・雜歌・雜體・大歌所御歌に分類してある。この分類は**萬葉集**の雜歌・相聞・挽歌を主體とする分類から更に一歩を進めたものであつて、これより後の歌の分類の標準となつたものである。

而して**古今集**の歌を見ると大體三期に分れるのである。第一は讀人知らずの歌であり、第二は六歌仙時代の歌であり、第三は貫之・躬恒時代の歌である。讀人知らずの歌は大體に於て平安時代初期の作と思はれ、萬葉風の素樸な感情と表現とを示して居る。六歌仙時代は貫之が**古今集**序に於て批評した在原業平・僧正遍昭・小野小町・大伴黒主・喜撰法師・文屋康秀等の歌人の輩出した時代であつて、既に上代の素樸なる歌風を離れて平安時代の特色を十分に現して居る。然し六歌仙時代にはそれ〴〵技巧が意識して用ゐられて居るけれども、其の技巧が感情內容と融合して、單なる智巧的なものは尠いのであるが、**古今集**撰定時代である貫之等に至ると、その智巧に煩はされて理窟に走つてしまつた點も認めざるを得ないのである。

主なる歌人

古今集の主なる歌人を見ると、先づ六歌仙の中在原業平は平城天皇の皇子阿保親王第五の子であつて中納言行平の弟である。元慶四年五十六歳で卒した。その多感多情の性格は、一面に於ては藤原氏のためにはゞまれて帝位につくを得なかつた惟喬親王の御境遇に同情せしめ、一面に於ては奔放なる戀愛生活に陶醉せしめた。その熱情がほとばしり出でたのが彼の歌であつたのである。次に僧正遍昭は俗名を良峯宗貞といひ、大納言良峯安世の男である。寵をうけた仁明天皇が嘉祥三年に崩ぜられたので哀慕の餘り出家して佛理を求めた。高德の聞え高く、宇多天皇も之に歸依せられた。がその心情は洒落であつた事はその詠ずる歌によつて知られる。平俗なる言葉を用ゐて、洒々たる心情をうつす所業平とは別の趣がある。寛平二年正月十九日七十六歳で死んだ。又小野小町は出羽國郡司女とあり、それ以上詳細なる傳は知られないが、一生を戀のために費した樣に見える。而も初めは矜恃の心を持ち、次第に衰へてゆく容色に對して今更に嘆じた心持が見える。その歌には強き心情よりは弱々しき心が見られ、戀の情をば

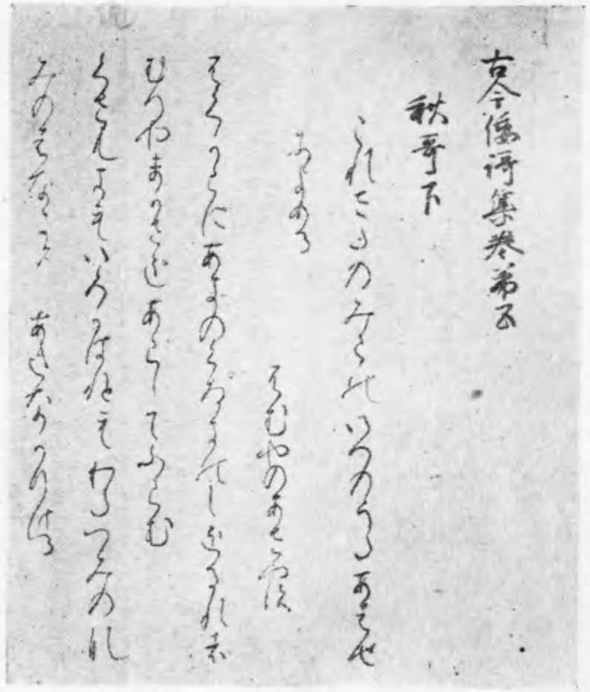
人の一般の心と對比したり、人生に對する感情に推し及ぼしたりして居り、又技巧としては夢に託して戀愛の情を表して居るものもある。

紀貫之肖像
（前賢故實によるる）

六歌仙の中、以上の三歌人は歌も多く傳はり、またすぐれても居るのであるが、他の三人は傳はる歌も尠いのである。

次に貫之は延喜六年に越前少掾兼御書所預となり、加賀介・美濃介・大監物・右京亮等を經て延長八年土佐守となり、天慶三年玄蕃頭となり、後從五位上に敍せられ、木工權頭となつて同九年に卒した。貫之の手に成つた散文は**古今集**序を始め、**大堰川行幸和歌序**・**土佐日記**があり、漢文には彼が**古今和歌集**から歌を抄出した**新撰和歌集**の序があるが、歌人としての彼には、理智的の技巧が一首の中心興味となつて居るものが多く、天眞なる情趣の叫びには未だしいものがある。之に反して撰者の一人である凡河内躬恒には卽興的の歌が多いが、客觀的の傾向がある。この外にも紀友則・壬生忠岑を始め、**古今集**の歌人は多いが、是等の三期殊に貫之時代を中心として見た**古今集**の歌は、**萬葉集**の如く感情の直接的表現といふよりは、感情を反省し、理智的に曲折せしめて居り、刹那の感動から時間的連續を示して居る。而して形式的にも**萬葉集**の二句切・四句切から初句切・三句切が多くなつて、所謂五七調から七五調への推移を示して居る。

古今集の註釋書を見ると、此の集が舊派學者の間に重んぜられたに比して研究書は尠いのである。近世以前に於ては顯昭の**古今集序註**や**古今集註**、定家の**顯註密勘**、一條兼良の**古今集童蒙抄**などが主なるもので、他は古今傳授として傳統的に尊重せられて居つたものが多い。近世に於ては契沖の**古今餘材抄**、本居宣長の**古今集遠鏡**、香川景樹の**古今集正義**などがあり、明治に於ては金子元臣氏の**古今和歌集評釋**がすぐれた註釋である。



高野切古今和歌集（原富太郎氏藏）

古今集の撰定は和歌勅撰集の起原を開いたものであつて、これ以後引續いて近古後期に**新續古今集**の撰定される迄二十一代集を數へる事が出來る。その中文學史的意義の深いものは**新古今集**に至る八代集である。**古今集**についで撰定されたのは村上天皇の天曆五年に清原元輔・源順・大中臣能宣・紀時文・坂上望城等梨壺の

後撰和歌集

五人が撰した**後撰集**二十卷である。**後撰集**は**古今集**に比して撰定の態度も杜撰であり、又歌そのものも劣つてゐる。**古今集**は序を始めとして組織も整然としてをり、**萬葉集**に對して、新しき立場を開拓して居る。歌も六歌仙時代のも採つてはゐるが、撰者の時代を中心として彼等の強い自信を語つて居るに反して、**後撰集**に於ては序もなく、**古今集**時代を規範として、それより一歩もはづれざらんとして居る。隨つて貫之の歌を最も多くとり、撰者時代の歌は個々の歌人から見ても全體の量から言つても尠いのである。

つひにゆく道とはかねてきゝしかど昨日今日とは思はざりしを　在原業平

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく　僧正遍昭

○**花の**色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに　小野小町

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものを

おもひいでて戀しき時は初雁のなきてわたると人知るらめや　大伴黒主

拾遺和歌集

藤原公任

かすが野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ　紀貫之

黒ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり

都にて春をばたゞにすごしきていづちと雁のないてゆくらむ　凡河内躬恒

千鳥なく濱の眞砂をふみわけてゆく旅人はあはれ誰れぞも

○ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　紀友則

秋風に初雁がねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらむ

中期に於ては詩歌より物語が中心となり、從つて詩歌は前期の因襲に陷つたのであるが、勅撰集はひき續いて撰定された。卽ち**拾遺集**はこれである。

拾遺集の歌人を見ると、人麿・貫之の歌が最も多く、當代歌人の作の極めて尠いのは、**後撰集**と同じく**古今集**を模範とした態度を見る事が出來る。然しながら歌風は**古今集**時代のやうな智巧的な風から次第になだらかな風になつて來たが、一面に力のぬけた點をも認めざるを得ない。

拾遺集時代に最も重んぜられた歌人は藤原公任である。公任は小野宮實賴の孫、賴忠の子であるが、賴忠と兼家とは從兄弟で勢威を爭つたために、兼家の子の道長と賴忠の子の彼とは競爭の位置に立ち、兼家が勢力を得てからは彼は世に容れられず、その不平を歌にもらしたのが

ある。が彼の歌人としての位置は餘り高くはなく、寧ろ歌に關する博識を以て尊崇されたのであつて、**新撰髄腦**はその撰と傳へる。この時代に於て眞の歌人として優れたのは和泉式部であり、更に新様の歌人として最も注意すべきは曾禰好忠である。その歌は**古今集**以來の陳套な歌風を破つて、詞句の上に表現の上に新しい態度を開いた點が注意される。好忠の態度もその時代には認められなかつたが、後**金葉集**・**詞花集**の時代に至つて次第に重んぜられた。しかし彼の歌は詞句表現の上に新しい態度はあつたが、心情の上には未だ特に注意すべきものがない。この點に於て**拾遺集**時代に最もすぐれて居るのは和泉式部である。和泉式部の歌は**拾遺集**よりも**後拾遺集**に多く見えるのであるが、時代としては**拾遺集**時代であり、赤染衛門などと並んで當時のすぐれた女流歌人である。　**和泉式部集**・**續和泉式部集**といふ家集がある。又**和泉式部日記**もあるが、これは後に述べる。和泉式部は越前守大江雅致の女で、和泉守橘道貞の妻となつて小式部を生んだが、後更に冷泉第三の皇子爲尊親王、第四の皇子敦道親王に愛せられ、更に丹後守藤原保昌の妻となつて丹後に往つた。その一生は情熱的な戀愛に陶醉したのであつて、その多感な心情が表現されてその歌となつたのである。從つてその歌には強い情熱がさながらに歌はれて居るのを感ずる。

人もがな見せむきかせむ萩の花、咲くゆふかげのひぐらしの聲

和泉式部

うきことも戀ひしきことも秋の夜の月には見ゆるこゝちこそすれ
夕ぐれは物ぞ悲しき鐘の音を明日もきくべき身とししらねば
はるがすみたつやおそきと山川の岩間をくぐる音きこゆなり
人の身もこひにはかへつ夏蟲のあらはに燃ゆとみえぬばかりぞ

なけやなけよもぎがそまの蟋くれゆく秋はげにぞかなしき
なつかしく手にはおらねど山がつの垣根のむばら花咲きにけり
人はこず風に木の葉は散りはてゝ夜な夜な蟲は聲よはるなり

拾遺集から**後拾遺集**に至ると、時代は中古時代の後期に進み、物語のゆきつまりとともに、和歌にも漸く何物か動くものが見え、**金葉集**・**詞花集**に至つて外形的ではあるが、新しい革新の氣が見え、**千載集**に於て心情表現相俟つて渾然たる領域に入らうとして居る。

後拾遺集二十卷は承保二年に白河天皇が藤原通俊に勅を給うてから十餘年を經て、應德三年九月十六日に撰成つて奉つたものである。**拾遺集**の後、勅撰集の撰せられないこと八十六年であつたが、こゝに至つて漸く機運が起り來つた事を示して居る。通俊はこの時代に於ける歌人としては源經信に劣つてゐたにかゝはらず、撰者となつた上にその撰集に不整の所が多かつたので、時人から種々非難を受けた。**後拾遺集**の組織を見ると、雜の部に神祇釋敎と俳諧歌の加

曾禰好忠

はつて來た事は特質とすべきで、宗教思想の浸潤して來た事を認めしめる。全體の歌風には**拾遺集**の後を承けて感情並びに表現のなだらかになり來つた事を見るが、それだけ力の缺けて居る感がある。しかし一面に於て小主觀に捉はれた境を脱して、清新なる敍景の多くなつて來た事は、新しい機運の動く所を示したものである。歌人に於ては、源經信の如き好忠の風を承けて清新なる格調を以て當代歌人の中に卓出して居る。

金葉集

金葉集十卷は經信の子源俊頼が白河法皇の院宣を受けて撰したもので、崇德天皇の天治元年に撰進したが、再度改訂を命ぜられ、三度目に奉つて嘉納せられたものである。**金葉集**も種々非難を加へられ、**臂突集**の如き異名を與へられたが、古歌人よりも當代の歌人を多く採るやうになつた事は注意すべき點である。殊に撰者俊頼は一方藤原基俊が公任に私淑して保守派の歌人であつたに比して、極めて革新的態度をとつた歌人であり、從つて**金葉集**には形式の上に新しい空氣の見えるものが尠くない。集中最も歌の數の多いのは撰者自らの三十五首であり、父經信が二十六首ある。從來の撰集に比して、連歌の部の加はつた事も形式の上に注意すべきことである。

詞花集

詞花集十卷は崇德上皇の仰せで近衛天皇の天養元年六月二日に左京大夫藤原顯輔が撰進して奉つたものである。この場合にも最初に奉つたのを更に改めて仁平元年に重ねて奏覽した。八代集の中最も歌數が尠い。歌風も**金葉集**の風を大體追つて革新の風に滿ちて居ることは曾禰好

忠の歌が最も多いのを見ても知られる。次に**後拾遺集**から**詞花集**時代の主なる歌人の歌を二三擧げる。

能因

心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春の景色を

源經信

夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く

旅ねして曉がたの鹿の音に稻葉おしなみ秋風ぞふく

源俊頼

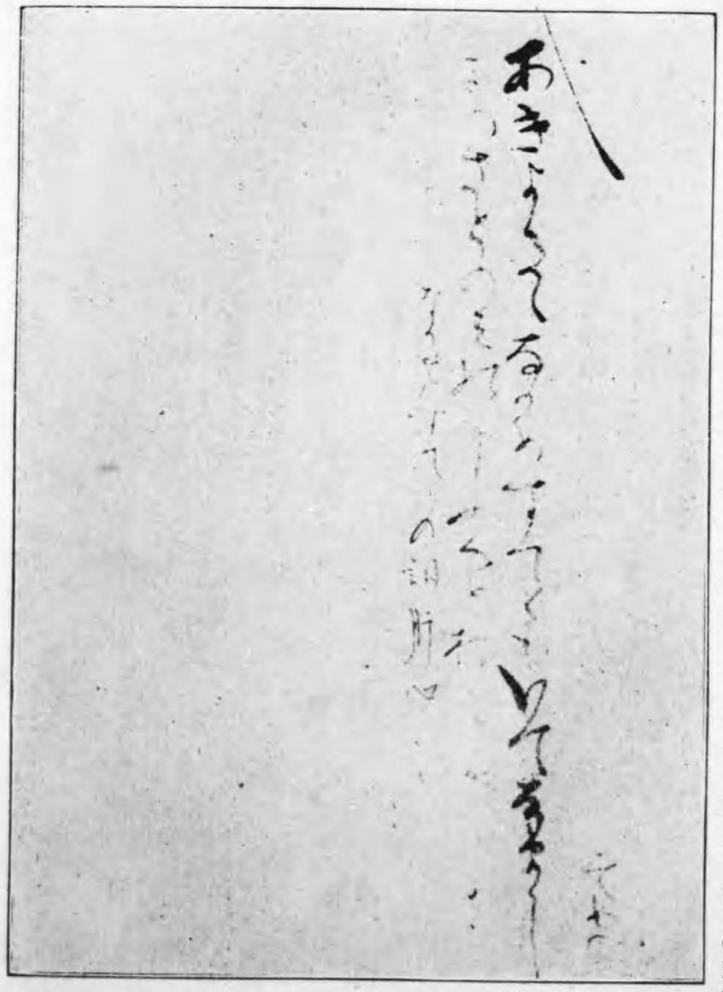
夕まぐれ戀しき風に驚けば荻の葉そよぐ秋にはあらずや

風吹けば蓮の浮葉に水こえて涼しくなりぬ茅蜩の聲

千載集

千載集は後鳥羽天皇の文治四年四月二十二日に、白河院の院宣によつて入道俊成の撰して奏したものである。此の集は**金葉集**・**詞花集**が十卷としたのを舊に復して二十卷とし、序もまた加へられた。而してその歌の特質は**金葉集**・**詞花集**の奇智から離れて、溫雅なる中に平安末期の幽寂なる境地を現して居る所にある。撰者俊成は始め名を顯廣といひ後俊成と改めた。正三位皇太后宮大夫となつたが、安元二年に官を辭し、入道して釋阿と稱し、元久元年に九十一歲で死んだ。彼は始め六條家に關係があつたらしくあるが、後基俊を師とした。然し**千載集**を撰ぶに

當つては、公平に基俊とは反對の立場に在つた俊頼の歌を最も多く取つた。而して彼の歌論の中心となつてゐる幽玄體はまた**千載集**を撰ぶ上の標準であつた。俊成の外に**千載集**時代の歌人

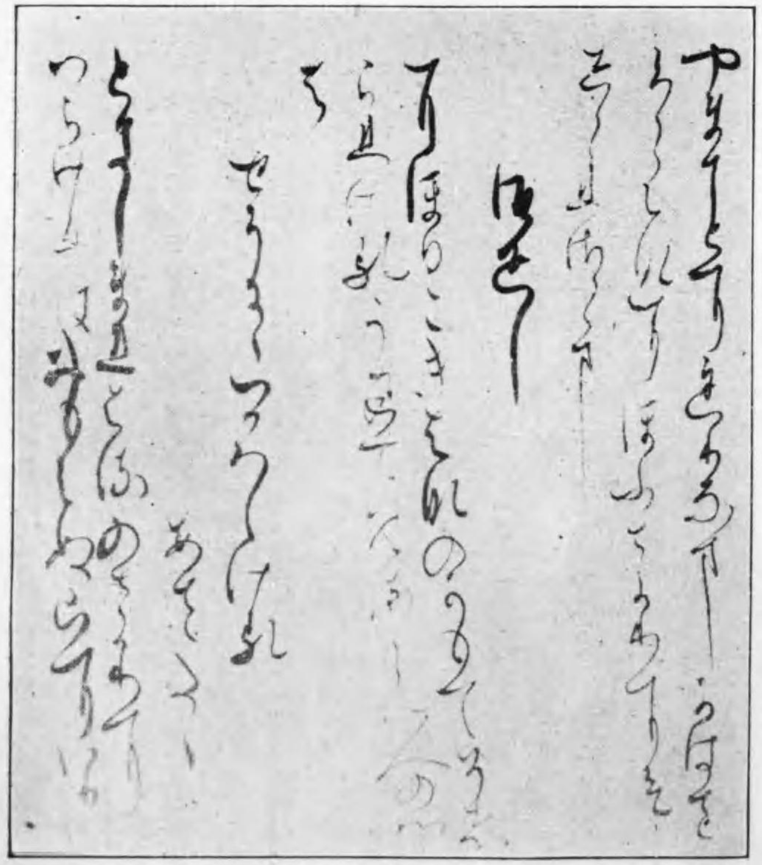


定家歌俊成判（自筆）

（日ぐらし帖によるる）

には西行を始め數多いが、それらの中で西行に就いては特に一言する必要がある。

西行は佐藤義清といひ藤原秀郷の九世の孫として武勇の名があつた。始め鳥羽上皇の北面の武士として仕へたが、一朝遁世の心を起し、妻子を棄てて諸國行脚の旅に上つた。それより自然を友とし吟詠を事として建久元年二月十六日七十六歳で死んだ。西行の歌は**千載集**・**新古今集**等の勅撰集にある



白河切（傳西行筆 日ぐらし帖によるる）

外、家集**山家集**があり、その著書と傳ふるものに**撰集抄**があり、傳には**西行物語**を始め數あるが、**撰集抄**以下は信ずべきか否かを知らない。**山家集**等によつて僅かに知らるゝものの外、傳說の部分が極めて多い。

「西行の歌は自然の中にひたつて、其の中に自己の生命を托したものが多く、殊に自然を跋渉してその閑寂なる氣分を捉へ得てゐる所に、我が國文學に於て始めて眞の自然愛の詩人を得たといふ感じがする。固より西行は自然の中に浸り切つてしまふには尙人間に對する執着が多過ぎる點もあるが、彼の如く自然を愛し得た歌人は中古時代に於て見ることを得ないのである。

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里
哀なる野島がさきの庵かな露おくそでになみもかけけり
ながむとて花にもいたく馴れぬればちる別れこそ悲しかりけれ
津の國の難波の春は夢なれやあしのかれ葉に風わたるなり
年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山

藤原俊成

西行法師

三、歌謠

上代に於ては歌と謠物とは同一であつたが、平安時代以後は歌が謠はれなくなつたので、獨立に謠物が生じた。その純然たる謠物として考ふべきは神樂・催馬樂である。この神樂・催馬樂もその成立はあるものは奈良時代にあつたのであるが、今日殘つて居るものは平安時代に至つて修正されたものであつて、神樂の如きは清和天皇の貞觀年間と醍醐天皇の延喜年間及び圓融・花山天皇の頃とに修訂されて居る。故に之を中古時代の謠物と見て差支ない。今日殘つて居るものは神樂は七十八首（數へ方によつて異なる）、催馬樂は六十一首ある。この外に風俗歌が二十餘首と東遊歌が數首ある。風俗歌は催馬樂とほぼ同性質を有する民謠であり、東遊歌は神樂と同じく神前に奏せられたが、神樂よりも重々しくない場合に用ゐられた。

神樂は神を祭るときに神前で歌つたものであらう。隨つて多くは謹嚴で乾燥である。神樂の起原はたしかには分らないが、現存の神樂を見ると、岩戸隱れの中の「あはれあなおもしろ」と同じやうな形式である事から見て、餘程前からあつたものである事を推測させる。勿論現存の神樂が古い形式をそのまゝ傳へて居るものとは思はれないが、神樂そのものの起つたのは餘程古いことと思はれるのである。神樂の中にもいろ〳〵名がついて居るが、採物といふものが神樂の純なるものであらう。その中の篠（サヽ）といふのを見ると

本 此のさゝはいづこのさゝぞ、とねり等が、こしにさがれる、ともをかのさゝ、ともをかのさゝ
末 さゝ分けば袖こそやれめ、とね川の、石はふむとも、いざ川原より、いざ川原より

の如く思想も形式も極めて單純なものである。更に神樂に小前張・大前張といふ種類がある。「庭燎」「採物」等の單に儀式的のものであるのに比べると、前張は神樂の儀式後餘興にうたはれたものらしく趣味あるものである。神樂に本と末とあるのは本座と末座とにわけて兩方で謠つたためである。

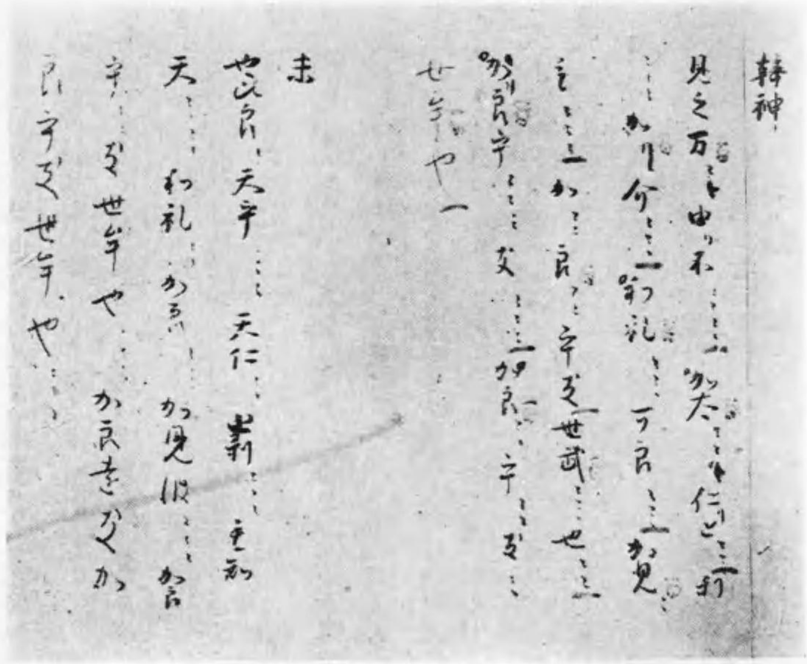
催馬樂は當時の俗謠であつて、神樂に比して更に興味あるものである。催馬樂といふ名義については說があるが、**體源抄**に催馬樂といふのは催馬樂といふ樂があり、それから起つたとある。**和名抄**雙調の部に桃花苑・春庭樂・催馬樂・狹鱠河・和風樂とならべ皆唐樂とあるのを見ると、催馬樂はもと唐樂の樂曲であるかも知れない。又長瀨眞幸が催馬樂の初めにある「我駒」といふのに

いでわが駒はやくゆきこせ　まつち山あはれまつち山、はれつち山待つらむ人を、
ゆきてはや、あはれゆきてはや見む

とあるから來たのであるとするのも一說であらう。

催馬樂は律と呂とに分けてあるが、これは調子によつて分類したのである。催馬樂には近古以後に榮えた小唄俗謠的思想をうたつたものがあつて、甚だ興味がある。たとへば「我門爾」といふのは

わがかどにや　我門に　うはもの裾ぬれ　下裳のすそぬれ　あさなつみ　夕なつみ　朝なつみ



神樂和琴秘譜（近衞家藏）

あさなつみ　ゆふなつみ　わが名を知らまく　ほしからば　御園生の　みそのふの　みそのふのや　みそのふの　あやめの　こほりの　大領の　まなむすめといへ　おとむすめとこそいはめ

など小唄的である。催馬樂は當時ひろく行はれて、上流の人々も遊宴に際して餘興として謠つたらしく、**源氏物語**の中、「竹川」「東屋」の如きは催馬樂の曲名を取つて居る。和歌の如く單調でなく博奕の事をうたひ、（大芹）或は世を諷刺し人を嘲弄して居る。和歌が次第に智巧的になつたに對して、寧ろ僞らざる中古時代民衆の叫びを是等に聞くことが出來るのである。催馬樂の形式は複雜であ

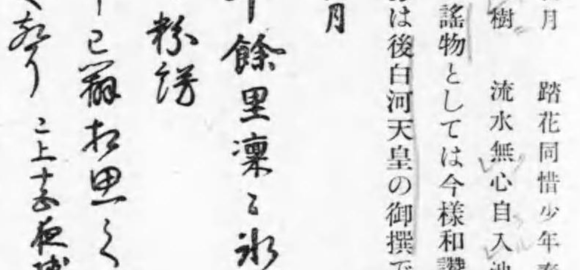
つて「はれ」「おけ」「そよや」等の拍子の詞を挿入して聲調を助けて居る。がその雜多の中にも七五調の形式はこれを認めることが出來るのである。

次に中期になると和歌も振はなかつたのであるが、それは謠物に於ても朗詠の如きが專ら行はれた事によつても知られる。朗詠は詩文の佳句を二句づつとつて、これに曲節をつけて謠ふのであつて、それも多くは四六駢儷體の二行を朗詠したものである。卽ち**文選**や**白氏文集**・**唐詩選**などの流行した時代の産物といふことが出來る。朗詠を集めたものに藤原公任の**和漢朗詠集**がこの期に成り、更に後期に至つて藤原基俊の**新撰朗詠集**が編まれた。現存の**和漢朗詠集**には短歌も載つて居るが、それ等は多くは三代集等に見える歌であり、詩句もすべてこれまでの詩文の佳句であつて、新たに作られたものはない。既に創作力が衰へて、一種の衒學的に赴いた時代の産物として見るべきであらう。而して朗詠の詩文の佳句も漢詩そのまゝに謠はずに殆ど軟い平安朝式の文になほして居る。當時支那の小說**遊仙窟**などが大いに行はれたが、やはり同樣な訓法を用ゐて居るのであつて、一種の飜譯文學といふべきであらう。

和漢朗詠集の古寫本には行成筆といはれる御物の**和漢朗詠集**があり、註釋は**和漢朗詠集**の方には北村季吟の**和漢朗詠集註**もあり、明治になつて金子元臣・江見淸風兩氏の**和漢朗詠集新釋**、柿村氏の**和漢朗詠集考證**も作られたが、**新撰朗詠集**の方にはこれといふ獨立した註釋書もないやうである。

背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春　白居易
落花不語空辭樹　流水無心自入池　白居易

次に中古末期の謠物としては今樣和讃があるが、文獻として最も注意すべきものは**梁塵秘抄**である。**梁塵秘抄**は後白河天皇の御撰であることは法皇の皇子守覺法親王の**右記**、順德天皇の**八雲御抄**に見えて居る。近時知られた零本は卷二の一卷、及び卷一の一部分であつて、**梁塵秘抄**二十卷の中、僅かに一部分に過ぎないがこれによつて資料乏しきこの時代の謠物の性質を大體知る事が出來るのである。



和漢朗詠集（帝室御物）

此の書に收めた歌は法文歌と神歌とから成つて居る。法文歌は二百二十首あり、歌體は主として今樣體である。內容は佛教に關係したものであり、和讃として謠はれたものであらう。神歌は四句神歌と二句神歌とに分れて居る。四句神歌は大體今樣體であり、二句神歌は短歌體である。外に六句體もあり、又

種々の雜體などもある。是等の歌には短歌などの如く囚はれた所がなく、感情・事件等にも生々とした所があり、又自由な形式の潑剌たる感を與へるものがある。

第二章　物　語

一、歌物語と傳奇的物語

詩歌の方面から物語の方面に移る。物語の勃興したのは假名文の發達に負ふ所も大であらうが、物語の展開の過程を見ると歌より進んで來た道と、傳說から進んで來た道との二つの方向がある。卽ち物語の初期に於ける歌物語と傳奇的物語とはその二つの道を示して居るやうに思はれる。**伊勢物語**・**大和物語**は前者であり、**竹取物語**・**宇津保物語**・**落窪物語**は後者であり、この二つの合流したのが**源氏物語**であると見る事が出來る。但し**落窪物語**の成立に就いては議論があるが、こゝでは從來の說のまゝに第一期の物語として見て置く。以上の立場からこの兩者の物語の解說を試みる。

伊勢物語

伊勢物語は歌を中心とする說話の集であつて、個々の說話は多く「昔男ありけり」といふ冒頭で書き起してある所に、**萬葉集**卷十六の傳說歌の系統をひくものであることを思はせる。而してそれが獨立した小篇のやうであつて、實は在原業平の歌を中心として、それに興味の多い詞書を添へてある物語がほぼ統一的に收められてある。勿論これを純粹の在原業平の著といふことは出來ないが、業平の日記の如きものがあつて、それを基礎にして、かく一篇の歌物語となつたものだとは推測せられる。**古今集**の中にも業平の歌は多く載つてゐるが、その詞書は他の業平以外の歌に比して頗る詳しいから、或說の如く**古今集**によつて**伊勢物語**が出來たとは想像されない。むしろ**古今集**以前に**伊勢物語**が成つて居り、それによつて**古今集**の撰者が取つたのか、或は**伊勢物語**の粉本の如きがあつてそれによつて取り、**伊勢物語**もそれを基礎として書いたのか、何れにか歸着されるより外はない。在原業平が昔男と身をなして自ら書きとめて置いたものを、其の死後もと親しかつた人（子の棟梁か滋春か）が多少加筆したのであるとする（如蘭社話卷二十七、伊勢物語論）本居內遠の說は蓋し穩當であらう。年代もたしかには分らないが、文章も簡古で、假名文の初期のものと思はれるから、業平の時代である文德・淸和頃からほど遠からざる間に出來たものであらう。

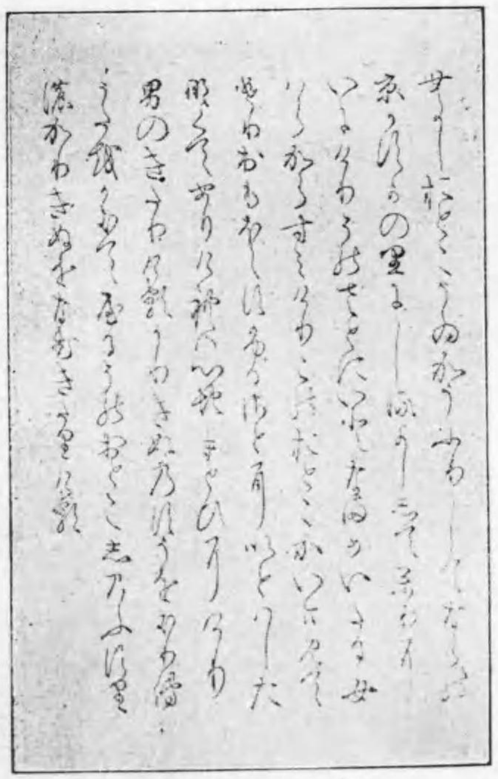
また**伊勢物語**の題號に就いても古來幾多の說がある。卽ち伊勢は「ひがごと」の意であり、ひがごとの物語であるから斯くなづけたといひ、また伊勢の御の作であるからだらうといひ、またある說には、篇中多くある伊勢國に關する說話が物語の初めにあつたためであらうとするものもある。

在原業平は文德・淸和頃の人であつて、**大鏡**に宇多天皇のまだ殿上人でおはした時、殿上の御

倚子の前で業平と相撲をとられた時に高欄を折り給うたとあるから、光孝天皇の頃までは在世してゐたかと思ふ。惟喬親王に仕へてその帝位につかれるのに盡力したが、終に事に失敗したのは情熱的な業平を如何に失望せしめた事であらう。御ぐしおろし給うて比叡の山の麓、小野に佗住居したまふのを雪の日詣でて

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは

とよんだその歌を見ても想像する事が出來る。而して**伊勢物語**はその情熱的抒情的な業平の人物を中心として、その情熱生活の展開を眺める所に無限の興味を生ずる。



嵯峨本伊勢物語

（嵯峨本考によるる）

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京には居らじ東の方にすむべき國もとめむとて往きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは水ゆく河の蜘手なれば橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におり居て餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上にすえて旅の心を詠め」といひければよめる

唐衣きつゝ馴れにしつましあればはるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。

行き〳〵て駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて我が入らむとする道はいと暗う細きに蔦楓生ひしげり物心ぼそく、すずろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかいまする」といふに見ればみし人なりけり。京にその人の許にとて文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば五月のつごもりに雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ

この山はこゝにたとへば比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。猶行き〳〵て武藏の國と下總の國とのなかにいと大いなる河あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守「はや舟に乘れ日も暮れなむ」といふに、乘りて渡らむとするに皆人ものわびしくて京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも白き鳥の嘴も脚も赤き、鴫の大きさなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京に見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。

渡守に問ひければ「これなむ都鳥」といふを聞きて

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

而してこの**伊勢物語**を形式的に踏襲したものは**大和物語**であるが、**源氏物語**もまたその形式をかへては居るが、**伊勢物語**の影響を大いに認める事が出來るのである。また**伊勢物語**の註釋書は後の源氏物語とともに極めて多いが、一條兼良の**伊勢物語愚見抄**、細川幽齋の**伊勢物語闕疑抄**、北村季吟の**伊勢物語拾穗抄**は舊註の中で注意すべく、契沖の**勢語臆斷**、荷田春滿の**伊勢物語童子問**、賀茂眞淵の**伊勢物語古意**、藤井高尙の**伊勢物語新釋**は新註として勝れたものであるが、殊に**伊勢物語新釋**はすべてを集成した上に創見も多く、最も注意すべきものである。

大和物語は**伊勢物語**の系統を引いた歌物語で、種々の說話を擧げてある。作者は在原滋春であるとし(**皇胤紹運錄**)、又は花山院の御撰(**歌林良材集** 尾崎雅嘉)であるとも言はれて居るが、たしかではない。延喜帝を先帝といふ所を見れば天曆の頃何人か書き出したもので、淸愼公實賴を今の左のおとど(實賴は天慶十年左大臣となつた)といふ點から見れば、花山院の寬和・永延頃の人が書き加へなどしたものであらうといふ說はほぼ妥當であらう。題號を**大和物語**といふのは**伊勢物語**に對して大和といつたのであると思はれる。**大和物語**は、歌物語ではあるが、**伊勢物語**のやうに或る一個の人を中心として書かれたものでもなく、また**伊勢物語**のやうに歌が珠玉として說話をくゝつて

居るといふやうなところもなく、また文章も彼の如く情熱と力のある文でない。ただ歌を含む多くの傳說を書きあつめたものといふべきで、むしろ後の**今昔物語**とか、**古今著聞集**などに似通ふ所があるのである。姥捨山の話、采女投身の話、菟原處女の話、平仲の話などもこれに見えて居る。

註釋書には北村季吟の**大和物語抄**、賀茂眞淵の**大和物語直解**、井上文雄の**冠註大和物語**などがある。

竹取物語は、**源氏物語**「繪合」の卷にも物語の出でき初めのおやとしてあつて、**伊勢物語**と共に平安時代の物語の先驅となるべきものである。成立年代に就いては諸說がある。普通に**竹取物語**の作者を源順としてあるが、この說には確な根據は無いのである。宣長は**玉の小櫛**に「いたく古きものとも見えず、延喜よりは以來のものとぞ見えたる」と言つて居り、田中大秀は**竹取物語解**に「**源氏物語**に繪は巨勢相覽、書は紀貫之書けりと見ゆれば、延喜の以往よりありしものなるべし」といひ、更に文德・淸和の頃、或は弘仁の頃の作とする說がある。藤岡博士は大秀の說を穩健として延喜を距たる遠くない時に作られたとして居る。

竹取物語は竹取の翁が竹の中から一少女を見出だしたといふ點から筆を起して、その少女が輝くばかりの女性となつたために、五人の公卿から婚を求められたが、難題を設けてすべてを失敗させ、天皇のお召しをもお斷りして月の夜昇天したといふ說話を扱つてある。**萬葉集**の中

にも竹取翁と九人の女性とをうたつた歌はあるが、それとは殆ど關係なく、竹から生れるといふ事は契沖も言ふ如く**大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品**に見え、その他の説話形式は**柰女耆婆經**などに見えるのであつて、月中の女・不死の藥・蓬萊山・龍首の玉の如き支那神仙思想などを基礎として一篇がつづられたと思はれる。全篇が傳奇的傾向に充ちて、歌物語とは別の敍事的傾向の著しいものである。文章もなほ簡素で、その初期の作品である事を思はせる。

註釋書としては田中大秀の**竹取物語解**六卷がすぐれて居る。

竹取物語の傾向を有しながら次第に寫實的傾向に進みつゝあるものに、**宇津保物語**・**落窪物語**を擧げる事が出來る。

宇津保物語の作者と成立の年代には諸説あるが確證はない。**河海抄**には源順説を擧げ、細井真雄の**玉琴**には紫式部の父藤原爲時ではないかといつて居る。その男性の作である事は首肯されるが、それ以上に作者を定める事は困難である。成立年代は**伊勢物語**・**竹取物語**より遲れて圓融・花山帝の頃であらう。**枕草子**にも「物語は**住吉**・**宇津保の類**」とあり、**源氏物語**「繪合」にも「**竹取**の翁に**宇津保**の俊蔭を合せ」とある。この物語は「俊蔭」の卷を始めとして「藤原君」「忠こそ」「梅花笠」など二十帖に分れて居るが、卷々の間に錯簡があり、又字句にも錯誤があつて一定し難いのである。田中道麿・細井貞雄などはこの**宇津保物語**の本文批評に力を盡したのであるが、未だ極めて不完全である。故に**宇津保物語**は一般に讀まれること尠く、「俊蔭」の卷のみが讀まれて居つたのである。

この物語は貴宮といふ美しき女性を中心として仲忠を始め其の周圍に集まる多くの男性を配し、終に貴宮が皇太子の妃となる次第を敍してある。**竹取物語**の赫夜姫に比して、**宇津保物語**の貴宮は現實的・寫實的傾向に富んで居るが、しかし人物の性格描寫に進まず、説話の上に傳奇的傾向が頗る多いのである。仲忠の出生を描いた「俊蔭」の卷は藤原俊蔭が十六歳で渡唐し、波斯國に漂流して多くの異人に琴の傳授を受けた如き、或は阿修羅に逢つた説話の如き、俊蔭が歸朝して得た女兒と藤原兼正との間に生れた幼兒が、母と共に杉のうつぼの中で養育された如き、傳奇的傾向に富んで居る。後の卷は比較的寫實的であるが、なほ「樓上」の卷に見える高樓の上で琴の傳授をするが如き神祕的の趣を見ることが出來るのである。

宇津保物語を研究し本文批評・註釋を加へたものに細井貞雄の**宇津保物語玉琴**があるが、卷々の間に錯簡があつてなほ歸一する所を知らない。

宇津保物語とほぼ同時代に成つたものに**落窪物語**がある。**落窪物語**の成立に就いても現存のものは後世の作であるといふ説があるが、一方に松木琴園は村上天皇の御代より下らないであらうといひ(**落窪物語大成所載**)、賀茂眞淵は冷泉天皇の頃の作であらうといひ(**伊勢物語古意**)、また中村秋香は圓融・花山以前のものであらう(**落窪物語大成**)として居る。作者は**宇津保物語**と同じく確説はないのである。**落窪物語**は四卷であつて、繼母の爲に虐遇されて寢殿の放出の一間の落

住吉物語

窪に置かれて居つた爲に落窪の君と呼ばれた姫君が、左近少將といふ貴公子に見出されて、其の妻となつて榮え、繼母は報復されるといふ說話を描いて居る。**宇津保物語**に比して短篇であり、性格描寫若しくは敍景の如きは見られないが、敍事に變化あり、波瀾あり、而も統一がある。かつ所々に滑稽の筆もあつて物語としてはすぐれて居る。

中村秋香の**落窪物語大成**四冊がその最もすぐれた註釋書である。

この**落窪物語**に關聯していふべきは**住吉物語**であつて、これは**源氏物語**や**枕草子**にも見えて居るから、古くあつたものであらうが、現存する**住吉物語**は古きまゝのものではない。而して其の現存のものの語る所は**落窪物語**と殆ど同じき繼子いぢめの說話であつて、**落窪物語**に倣つて記したものであらう。或は**住吉物語**の原形が**落窪物語**に影響したのかも知れない。なほ**源氏物語**以前に作られた物語の名が、**源氏物語**・**枕草子**などに種々見えて居るが、傳はつてはゐない。

二、源氏物語

源氏物語

源氏物語は中古時代小說の中心をなすものであつて、日本文學史上にも有數な作品である。この物語の作者に就いては種々の說があるが、やはり全體を式部の述作とすべきであらう。然しながら其の作られた時代、また成立の過程に就いては容易に決し難い問題がある。普通に**紫式部日記**の寬弘五年霜月の條に「左衞門督あなかしこ此わたりに若紫やさふらふと伺ひ給ふ。

源氏物語の組織

源氏に似るべき人見え給はぬに、かの上はまいていかでものし給はんと聞きわたり」とあるを始め、寬弘六年の條にも**源氏物語**のある事などを證として、長保の末、寬弘の首に式部が寡婦生活の時に記したとされるが、寬弘の初めにある部分まで作られた事は明かであらうが、その全部完成したのはやゝ後の事であらう。是は更に物語の人物を實在の人物と比較する事によつても解決を見出されると思はれる。**源氏物語**の組織を見ると、五十四帖から成つて居る。初め四十一帖は光源氏を中心としてその花やかな生涯を描き、次の三帖は薫君等の生立を描き、後の十帖は薫君を中心としてその失意の半生を描いて居る。而して後の十帖は場面を宇治にとつて居る所から宇治十帖と言はれる。光源氏は身分いやしき桐壺更衣の腹に生れ、更衣も弘徽殿の女御などの嫉視を受けて早く病がちになつて逝き、光源氏も臣下に下つて源氏となつた。

容貌も美しく才識すぐれた源氏は、多くの女性との間に戀愛を構成する。其等の女性はそれぞれ性格を異にして居た。夕顏や朧月夜の內侍や女三の宮の如きは意志の弱い男性の心のまゝに引かれる女性であつた。空蟬や藤壺や玉葛の如きは意志の强い男性のまゝには動かない女性であつた。而して藤壺の姪で、幼少の時から源氏が養育して妻とした紫の上に至つては誠に中庸を得た女性であつた。源氏は亡き母君に似て居るといふために、繼母に當る藤壺に懸想してその腹に皇子を生ませた事は宥し難き過失であつて、その應報として己が妻に賜はつた女三の宮と柏木君とが通じて薫君が產まれるやうになつた。かくの如くして花やかな源氏の晩年にも

寂しさと此の世の頼りなさとが、ひし〳〵と感ぜられたやうに思はれた。この後を承けた「宇治十帖」の薫君はいかにも寂しい佛の道に専念する人物であつて、戀愛にもふりむかうとしなかつた。これと親しき好色の匂宮と對照して居るが、薫君も宇治の大姫君が死んでから次第に戀に狂奔して中姫君に失敗し、浮舟をも匂宮に奪はれるといふ所に、どこまでも薫君の失意の半生を描いて居る。背景も靜かなる宇治の自然を描いて、しつとりとした空氣がみなぎつて居る。

平瀬本源氏物語（刊本によるる）

源氏物語の中に現れる人物はその時代に多少モデルを有したであらうし、また**源氏物語**以前の**宇津保物語**等の影響を受けた事は、細井貞雄が**宇津保物語玉琴**に詳説してゐるのを始めとして古來種々考へられて居る所であるが、而も**源氏物語**に於て人物の性格が活躍し不自然な作爲の跡が見られずして、この長篇をなして居る事は從來の作品に比して遙かに卓越して居る。もとより**源氏物語**の描く所は平和なる戀愛物語であり、複雜なる事件なく、場所も須磨・明石及び宇治を除いては概ね京都の中で、五十四帖の長篇冗漫の點もないではないが、その筆は深く人生の内面的觀察に進み、心理の變化を寫し、而して自然の描寫を時に加へて人と自然との調和的美を味はせる。

源氏物語は後世に影響する所甚だ多く、後の物語にこれを踏襲するものが尠からずある。その翻案的な作品も近世に至つて種々出てゐるが、それは後に讓つて、一方**源氏物語**の研究を見ると、これも極めて多く行はれて居る。**源氏物語**の本文としては「河内本」と「青表紙本」とがあるが、古代は「河内本」が行はれたが、後世多く行はれたのは定家の校合になる「青表紙本」である。註釋書は光行の**水原抄**が最も古いと傳へるが、これは今見る事が出來ない。重んずべきものは中世に於ては四辻善成の**河海抄**と一條兼良の**花鳥餘情**とがあり、近世に於ては中院通勝の**岷江入楚**、北村季吟の**源氏物語湖月抄**、契沖の**源註拾遺**、賀茂眞淵の**源氏物語新釋**、本居宣長の**源氏物語玉の小櫛**、萩原廣道の**源氏物語評釋**等がある。就中**源氏物語評釋**は「花の宴」までしかないが最もすぐれて居る。

三、狹衣物語と濱松中納言物語其の他

源氏物語以後の物語は、一面には**源氏物語**の傾向を追つて行き、他の一面には別の物語形式に展開していつた。而して前者に於ては先づ第一に**狹衣物語**を擧げる事が出來る。**狹衣物語**の作者は紫式部の女大貳三位とも、其の妹辨の局とも、或は後朱雀天皇の皇女禖子内親王に仕へ

た宣旨とも言はれて居るが、宣旨說が穩健である。作られた年代は永承・天喜の頃であらうと言はれて居る。

梗概を述べよう。狹衣大將といふ才色雙絕の貴公子が、同じ家に養はれた源氏宮に戀したが、思ふやうにならない。その中に東宮も源氏宮に思をかけて宮中に召されようとするが、狹衣はなほ諦めきれない。帝は女二宮を狹衣に降嫁させようと思召し、その計畫が進んで來た時に、計らずも狹衣は飛鳥井姫君が拘はれて行くのに會つてこれを助け、姫君の家に宿して契を結ぶ。源氏宮を思ひつゝ戀を打明けても容れられざる心の艱みを、飛鳥井姫君によつて辛くも慰める。後飛鳥井姫君は筑紫の方に落ちてゆく途中入水したのを救はれて都のほとりにあつたが、その後病歿する。女二の宮は狹衣大將とはからずも契り、そのために懷姙したので、女二の宮の母君も思ひなやんで死に、生れた子は母君の子といふ事にする。女二の宮は出家され、源氏の宮も齋院となる。而して狹衣大將は帝の妹一品の宮といふさだすぎた女を妻とするやうになるが、もとより愛のない結婚である。狹衣大將は後天皇になられるが、その戀愛生活に於ては常に得られざる戀に惱む事、**源氏物語**の薫君と同樣である。かくして**狹衣物語**は心理の描寫よりも說話の複雜變化によつて興味を與へようとした作である。而も說話として**源氏物語**を踏襲した所も尠くないが、全體としてよく統一を得て居る事はこの作のすぐれた所であると思ふ。**狹衣物語**には**狹衣系圖**・**狹衣物語下紐**がある。

濱松中納言物語

濱松中納言物語は**狹衣物語**と殆ど同時に作られたものと思はれる。その作者は明かでないが、**更級日記**の著者と同人であるとする說はほゞ信ずべきと思ふ。此の物語は場所を支那にとり、且つ夢の極めて多い事が着目せられる。濱松中納言は亡父が唐の第三皇子に生れかはつて居ると聞いて唐に渡り、母后とともに高陽縣といふ所に住む第三皇子に逢ひ、母后と相思の仲となり、一子が生れる。三年の後中納言は日本に歸り、唐の后の母が尼となつて吉野にゐるのに逢つていろ〳〵語る。昔契つた大姫君が今は尼となつて居るのと共に住む。後尼君も唐の后も去るが、尼君が日本で得た一女と契を結ぶやうになる。此の物語は闕卷になつてゐるが、近時末卷が世に出た。全體支那を背景とし、且つ夢に支那と交通するなど變化を求めた構想があり、且つ**狹衣物語**が記述的であるに對して感傷的な筆致に富んで居る。

堤中納言物語

次に**狹衣物語**・**濱松中納言物語**についで此の頃に作られたと思はれるものに**夜半の寢ざめ**がある。寫本のまゝで傳はつて居るが注意すべき作品である。また**とりかへばや物語**も平安末期の作であるが、現存するものは鎌倉時代の改作であらう。是等によつて、平安末期の物語が如何に荒誕なる說話に富んでゐたかを推察する事が出來る。

なほ此の時代の物語として特異なものに**堤中納言物語**がある。これは「花櫻折る少將」を始め十篇の短篇から成つて居るが、各篇それ〴〵主題の捉へ方や表現の確かさに極めて優れて居る。「蟲めづる姫君」の如き庭に種々のむくつけき蟲を養つて愛して居る姫君を描いて、耽美

主義的傾向を示して居る。

四、歴史物語と傳説物語

前節に述べたやうな小説物語は、**源氏物語**を極點として次第に頽廢的に傾いて來たのであるが、平安末期に於ては別の形式を作り出して來た。卽ち歴史物語と傳説物語とである。是等は近古時代にも引續いて作られて居るが、此の期に於ては歴史物語として**榮華物語**と**大鏡**とがあり、傳説物語として**今昔物語**がある。

榮華物語は**世繼**ともいひ、藤原道長の榮華の一生を中心として描いた所に、**榮華物語**の名があるのであらう。作者は赤染衞門と傳へられて居るが、この考に就いては安藤爲章も疑ひ、そ**の榮華物語考**の中に、女性の日記などを集めて堀河院より後の男性が記したものといつて居る。全體が四十帖に分れ卷毎に優美なる卷名を附してあるが、編年體で宇多天皇から筆を起して堀河天皇の寛治六年までの記事である。第一帖「月の宴」から第三十帖の「鶴の林」までは、道長を中心としてその薨去までを記し、後の「殿上の花見」以後の十帖はその薨後の記事である。而してこの兩者は文體も相違し、また佛語などの多寡によつて作者が異なるといふ説を伴信友が説き、更に信友は藤原爲業がその何れかを記したものではないかと唱へて居る。藤岡博士もこの前篇・後篇に分つことに從つて居るが、なほ同一人が後より記したものとして居る。要する

に**榮華物語**の作者も未だ斷定するまでに至つて居ないのである。而して**榮華物語**の組織を見るに、道長を中心とした事は**源氏物語**が光源氏を中心としたと同一であり、たゞ源氏が架空の人物であるに對して道長が實在の人物である事に相違する。又**榮華物語**の前篇・後篇に分れる事は**源氏物語**に於ける初めの四十四帖と後の宇治十帖の如きである。**榮華物語**の敍述は事實を敍述し、道長の榮華を讃嘆するのみで、文學的の價値は餘り高くないが、なほ精細なる事實の記述は**源氏物語**の背景としても興味があり、道隆の薨後伊周・隆家等の左遷、定子の哀歎を記した「浦々の別れ」の如き讀むに足るものがある。

榮華物語の註釋としては和田英松・佐藤球兩氏の**榮華物語詳解**が最も精緻なる研究である。

大鏡は**榮華物語**と同じく道長を中心として記述してある。年代は文德天皇より後一條天皇の萬壽三年までであるが、**榮華物語**と異つて列傳體であり、支那の**史記**にならつて帝紀・列傳に分つてある。初めに序があつて、雲林院の菩提講に大宅世繼・夏山繁樹といふ百五十餘歳と百四十歳程の老人が行きあひ、それに若侍も一緒になつて、世繼が主として語り、繁樹が合槌を打ち、若侍が批評をするといふ全體の組織をなして居る。而して作者は萬壽二年の記述のやうに裝つてゐるが、萬壽二年以後の事柄をも知らず識らずの中に記して居る。作者は**尊卑分脈**に爲業の所に世繼の作者とあるのによつて爲業説が行はれて居るが、この**世繼**は**榮華物語**を指したらしく必ずしも從ふ事が出來ない。

大鏡は**榮華物語**に比して分量も尠く、記述も簡略であるが、一の事件を敍するにもその核心を捉へて事件を印象的に知らしめようとする。且つ記述的よりも批判的であり、道長の榮華を敍する側に、若侍をしてその陰謀を深刻に批判させる所に特色がある。而して文章の簡潔にして力強い所、翁等の洒脱なる風貌が躍如として居る點などに、歴史文學として見るに足るものがある。

大鏡の註釋は大石千引の**大鏡短觀抄**のある外、餘り見るべきものが無かつたが、明治以後鈴木弘恭の**大鏡註釋**、落合直文・小中村義象の**大鏡詳解**、佐藤球の**大鏡詳解**、關根正直氏の**大鏡新註**が出た。

次に傳說物語は中古初期の**日本靈異記**などの系統を引くもので、この末期に於て**今昔物語**が作られた。**今昔物語**は三十一卷から成り、卷一から卷五までは天竺の說話を、卷六から卷十までは震旦の說話を、卷十一から卷三十一までは本朝の說話を纂めてある。この中、卷八・卷十八など數卷闕けて居る。其の說話の範圍は極めて廣く、佛教傳說が多數を占めて居るが、本朝の部に於ては世俗・合戰・爭鬪・宿報・靈鬼・惡業等の一般民衆生活の上に現れる傳說を集めて、中古時代の貴族生活以外民衆生活に觸れた所がある。**今昔物語**は各傳說の初めに「今は昔」とある所から稱したのであり、宇治大納言隆國の作と稱せられる。隆國は源俊賢の子であつて、寛弘元年に生れ、十二歳で從五位下に敍せられたが、累進して正二位權大納言に至り、承保四年出家して其の年七十四歳で薨じた。傳によれば、宇治平等院一切經藏の南の山際南泉坊といふ所に籠つて居たために、宇治大納言といはれ、往來の者を呼び集めて昔物語させて書き寫したのが**今昔物語**であるといふ。この**今昔物語**の事を一名**宇治大納言物語**ともいふ。別に**宇治大納言物語**三卷があるが、是は後世の作品である。又**宇治拾遺物語**は鎌倉時代の作品である。研究には芳賀博士の**攷證今昔物語集**、坂井衡平氏の**今昔物語集の新研究**がある。

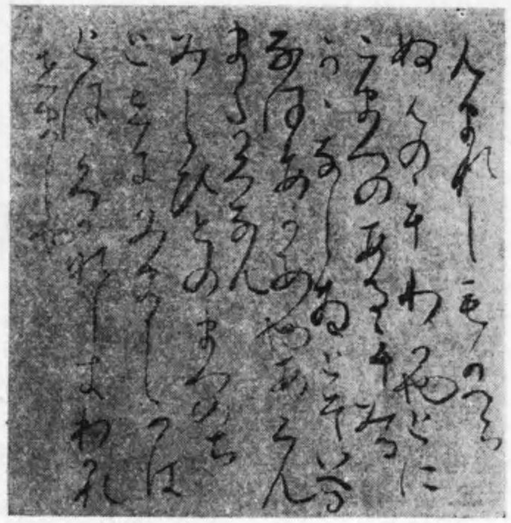
第三章　日記・隨筆

一、土佐日記と蜻蛉日記

中古文學は物語が中心を占めて居るのであるが、それらの物語も主觀的抒情的要素の多いものであることは前述した所であるが、その物語の主人公を第一人稱で記す時には、直ちに日記・隨筆となり得るのであつて、この兩者の關係は頗る密接なるものである。中古時代初期に於ける日記の最初のものは紀貫之の**土佐日記**である。

土佐日記は醍醐天皇の延長八年に土佐守となつて赴任した紀貫之が、朱雀天皇の承平五年に都へ歸るときの日記である。景樹の說によれば、貫之が七十三・四歳の頃の作である（**土佐日記創見**）。首に「男もすなる日記といふものを、女もして試みんとてするなり」とあるが如く、未だ男性は漢文のみで記して假名文を用ゐなかつた時であるために、故意に女性として筆を執つた

ものである。この意味に於て**土佐日記**は假名文の創始の上に力あるものであり、貫之の**古今集序**などと共に文學史的意義も高いのである。が中古時代初期は物語・歌に於ても見得る如く、**土佐日記**にも快活な明るい色調が中心となつて居つて、失つた子をいたむ悲痛な心情をも洒脱な滑稽的筆致で蓋つてゐる感がある。



定家筆　土佐日記（松雲公小傳によるる）

土佐日記は近世の學者にも比較的多く注目され、北村季吟の**土佐日記抄**、岸本由豆流の**土佐日記考證**、香川景樹の**土佐日記創見**、富士谷御杖の**土佐日記燈**などある。

この**土佐日記**は男性の日記であるが、平安時代の日記・隨筆は寧ろ女性が彼等の宮廷生活を記したものに於て其の特色を見る事が出來る。而してそれらの中最初に出たものは右大將道綱の母の著である**蜻蛉日記**である。

蜻蛉日記は道綱の母が其の夫兼家との間の家庭生活を主として記したもので、三卷になつて居る。天暦八年兼家が二十六歳の頃通ひ初めてから、道綱を生み、それから天延二年兼家が四十六歳になる頃まで二十一年間の日記であるが數年とぎれてゐる所がある。中古時代の結婚生活は初め夫妻別居したために、一旦愛を許してからは妻は夫の愛の衰へる事を憂へた。殊に一夫多妻であつた當時には、權門の出である妻に愛が集つて、勢力のない家の出である妻は夫の離れゆくことを常に悲しむのであつた。兼家にも多くの妻があつた。殊に仲正の女は道隆・道兼・道長などの子を擧げて權勢があつたが、倫寧の女である**蜻蛉日記**の著者には、道綱を得たのみで勢力もなかつた。そこに家庭生活の寂寥と憂愁とがあつた。彼は夫のつれなさをかこつて鳴瀧に籠り、容易に歸らなかつたが、兼家や道綱にすゝめられて歸つた。しかしあきらめの寂しい生活であつたのである。その妻としての寂寥の心持の披瀝されたのが此の日記である。而も彼の女は貞淑なつゝましやかな性格であり、佛教に對する信仰心もあつたために、その日記にはしめやかな眞率の氣が溢れて居る。この**蜻蛉日記**には契沖の**蜻蛉日記考證**、坂徵仲文甫の**蜻蛉日記解環**十八冊などある。

二、枕草子と女性の日記

蜻蛉日記を先驅として、中古時代中期に於て女性の作品が多く出でた。物語に於ける**源氏物語**の外に、隨筆に於ける**枕草子**、日記文學に於ける**紫式部日記**・**和泉式部日記**の如きはその著しきものであり、やゝ後れて**更級日記**・**讃岐典侍日記**も現れた。こゝにはそれらに就いて解說を試みる。

枕草子の作者清少納言は梨壺の五人の一人である清原元輔の女である。彰子と對立せられた一條天皇の皇后定子に仕へて居たのであるが、定子の薨後宮廷に仕へる事も出來ず、不遇の中に一生を終つたのである。**枕草子**を記したのは宮廷に仕へてかららしいが、宮廷生活以前の文もあるのであつて、第二段の宮中の白馬の節會を拜觀に行つた記事の如き、或は小白河の法華八講の如き、宮廷生活以前の記事である。清少納言が宮廷に仕へたのは三十歳頃であらうか。**枕草子**の記事にも己れの事を「さだすぎ」といふやうに述べた所が多くあるのも、既に若さを失つた事を自覺した時に書かれたものの多いのを推察せしめる。

枕草子は清少納言が日常生活の經驗ならびに感想を敍述したもので、自己の周圍に關するものと自然の觀察に關するものとが交錯して居る。而して中には「雪の山」や「法興院の供養」の如き長篇もあるが、物盡しの如き名詞を羅列した極めて短いものもある。かくの如くして三百一段の記事はその間に連絡もなく統一もなく、たゞ思ふがまゝに書いてあるので、自然觀照の文の後に自讃の文があり、次にもの盡しがある如きである。この一見不統一である如き中に清少納言の環境が浮び出で、その自然觀が現れて居るのである。而してそこに感覺の鋭敏な彼女を見る事が出來るのである。この點に**枕草子**の特質もあり長所もあるが、彼女の觀察はどこまでも感覺的であつて、內面に入り得ず、また彼女の自我も外面的な自己優越感であつて、それ以上深く內面的に入り得なかつた所に、やはり彼女も此の時代の一女性であつたことを思はしめる。

澁野侯爵家藏　枕草子繪卷（刊本によるる）

枕草子は異本が極めて多く、その研究も殆ど顧みられなかつた。僅かに北村季吟の**枕草子春曙抄**、加藤盤齋の**枕草子抄**の如きがあるのみであるが、明治になつて武藤元信の**枕草子通釋**、金子元臣氏の**枕草子評釋**の如き最も注意すべき註釋が作られるに至つた。

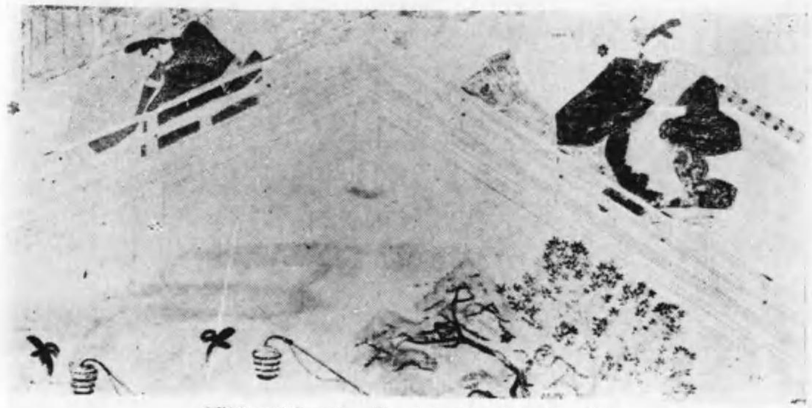
枕草子と殆ど同時に作られた日記に、紫式部の**紫式部日記**と和泉式部の**和泉式部日記**とがある。**紫式部日記**は紫式部が夫藤原宣孝に死別して宮廷に仕へてからの日記で、一條天皇の寛弘五年彰子の懷姙から筆を起して、皇子御降誕を始め、自己の經驗した事柄を記し、又清少納言や和泉式部などの批評を加へ、自己の幼時のこと、或は道長に懸想された事柄などを記して居る。

宮廷生活の上に現れる服裝・儀式などを細かく描いて居るのであるが、式部は清少納言のやうな觀察をそのまゝに表現しないで、これを情趣の世界に統一して表すために內面的な氣分を感得し得る。而してこの日記によつて味ひ得

る所は夫を失つた女性の人生に對する寂寥さである。花やかな宮廷生活の間にあつて靜かに過去の家庭生活を思ひやり、何となき哀愁の世界にひたつたのが彼女であつたやうに思はれる。それは**源氏物語**を通じても見られる特質である。此の書の註釋としては壺井義知の**紫式部日記傍註**、淸水宣昭の**紫式部日記釋**、足立稻直の**紫式部日記解**がある。

和泉式部日記は和泉式部の日記であつて、**和泉式部物語**ともいつた。奔放なる戀愛に陶醉し、情趣的な歌を殘した式部の戀愛生活を描いたもので、冷泉院第四の皇子の帥の宮が、式部のもとへ通つてゐられた間の事を記したのである。**紫式部日記**のやうなしんみりとした自己を反省する心境は見られずして、どこまでも進んでやまない情熱が見られる。而してその中に見える歌は此の日記の價値をより重からしむるものである。

この二書にやゝおくれて**更級日記**がある。菅原孝標の女の著であつて、女の母は倫寧の女であるから**蜻蛉日記**の著



紫式部日記絵巻（藤田家藏）

者と伯母と姪との關係である。孝標の女は貞淑順良の性質であつて、孝標が上總介となつて任に赴いたとき、彼の女も伴はれて行つたが、任滿ちて京に歸る時、父とともに上總から都に上つた。その時寛仁五年で彼の女は十三歳であつた。日記はこの時に筆を起して、幼き彼の女が憧憬に充たされて富士山を眺め、京に接し、而も夢と憧憬とが破れて行く心持がつゝましく描かれて居る。後橘俊通の妻となり、子仲俊を生み、五十歳で夫に別れた頃までの記述である。田舍の叔母の土產として物語を多く貰つて喜び、寢る間も忘れて耽讀し、さうして**源氏物語**中の浮舟を憧憬するなど夢多き心持が現れて居る。現行本は錯簡があるのが殘念であるが、近時定家自筆の古寫本の發見によつて其の錯簡がほゞ明かにせられた。

讃岐典侍日記は讃岐典侍が堀河天皇・鳥羽天皇に奉仕した時代の日記であるが、堀河天皇の御病重つて崩ぜられる頃の御いたましい記錄や、御幼少の鳥羽天皇に仕へまつつた頃の作者の心情が素樸ではあるが、つゝましく眞實に描かれて居る。この日記は從來文學的には殆ど顧みられなかつたが、近時注目されて來た。

以上の日記を通して當時の女性の眞實の生活が見られる所に大きなる意義があるのである。

第三篇　近古文學

序說

中古時代の纖細な統一のある作品から近古時代の作品に至ると、素樸な雄健な所が生じて來た。これは一面には中古時代の假名文から和漢混淆文に變化した爲でもあるが、同時に銳敏な感性と優美な情趣との世界に浸りきつて、強い意力と人生に對する內面的統一を失つた立場から平安末期の榮枯盛衰に直面して得た人生に對する強い無常觀に統一せられたためであると思ふ。而して近古時代の前期である鎌倉時代には、佛教觀によつて人生を厭離しようとする心持が、意識的な意力によつて行はれたために、そこに自己の中にめぐる二つの心持が互に爭つて居るのを見る。現實の自己を脫離して永遠の世界に統一しようとする心持と、現實の自己を生きたいといふ心持との爭鬪が見られ、現實から脫却したいといふ心持の後から現實に對する執着が現れて來るのである。それは西行にしても長明にしても同樣であつたが、近古の後期としての室町時代に至ると人間としての弱い執着から脫離して無我な普遍的世界に入り得たやうに思はれる。差別の相から普遍の相に歸一し得たのが此の時代の相であつたやうに思はれる。かくして近古時代はこの前後の二つの時期によつて特質があるが、而も全體を貫くものは佛教思想の行き亙つた事である。而して一方には家を重んじ、教權を尊ぶ傳統的思想が漲つて居たのである。所謂傳授思想はこの家を尊重する觀念と宗教的神祕思想とが結びついて生じたものと思はれる。次に詩歌・物語・戲曲・日記隨筆等に分つて解說する。

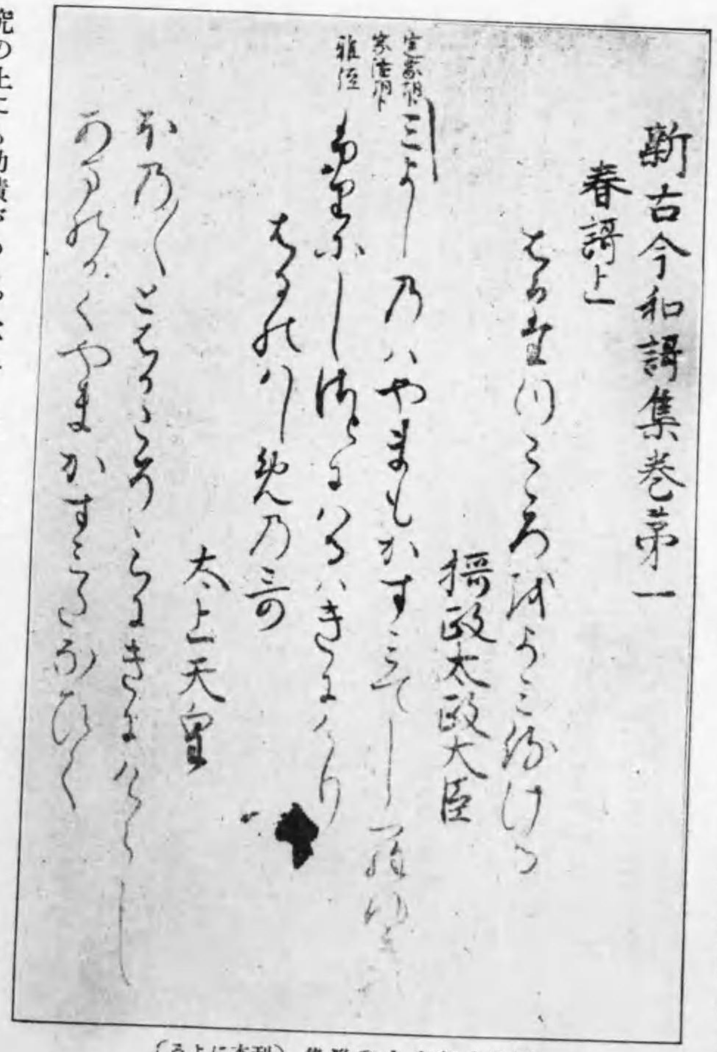
第一章　詩歌

一、和歌

新古今和歌集

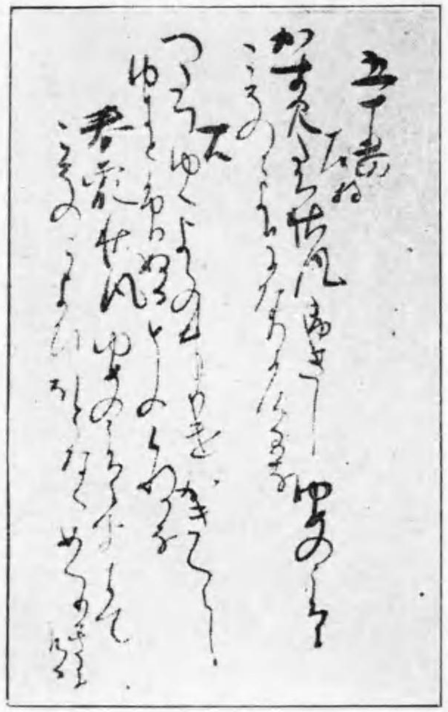
近古時代に於ける歌集の中で第一に注意せられるものは**新古今集**である。**新古今集**は後鳥羽院が參議右衞門督通具・大藏卿有家・左近中將定家・前上總介家隆・左近少將雅經の五人を鳥羽離宮に召して撰せしめたものであつて、序によると土御門帝の元久二年に完成して居る。**新古今集**は假名・眞名の兩序があり、組織の上にも**古今集**以來の整つた撰集であるが、歌風の上にも表現を重んじて藝術的な匂が最も高まつて居る。**後拾遺集**の頃から多くなつて來た敍景的な歌が更に多くなり、その表現を洗練する事によつて氣分を象徵するに至つた。歌の形式の上にも初句切・三句切が多くなり、體言止の歌が多くなつた。而して一面に於て本歌取が行はれて、古歌の同じ題材を**新古今集**特有の技巧形式のもとに表現するに至つた。

新古今集の歌人として最も注意すべきは、撰者の中の藤原定家と藤原家隆とであつて、この二人は**古今集**の貫之と躬恒との如き位置を占めて居る。定家は俊成の子であり、歌人としてのみならず歌論の上にもまた古典研究の上にも功績がある。歌人としては歌の彫琢に苦心を重ね、**新古今集**の歌調を代表して居るが、西行のやうな心情の自らに發して歌を成したものとは趣を異にして居る。**新古今集**に歌の見える外家集として**拾遺愚草**がある。彼の歌論の中心は俊成の唱へた幽玄體を更に深く究めて、所謂有心體の歌を理想とするに至つた點にある。更に**源氏物語**・**古今集**・**伊勢物語**等の古典のテキストを制定した功績も忘れることは出來ないのである。天福元年十月出家して明靜と改め、仁治二年八月二十日に八十歳で卒した。



隠岐本新古今和歌集（刊本によるる）

家隆は壬生中納言光隆の第二子で、母は實兼の女である。若くして寂蓮の婿となつたが、後俊成の門下となつた。歌人としての力は定家を壓して居る。家隆も新古今調の巧緻な表現を用ゐて居るが、定家に比して率直に自然の姿を捉へようとして居る。其の家集に**壬二集**がある。



定家筆蹟（日ぐらし帖によるる）

この外にも當代の歌人は多いが、殊に注意すべきは後鳥羽上皇であつて、その不遇なりし御半生の間に生れ出でた御歌には人の心を自らに動かすものがある。

霜まよふ空にしをれし鴈がねのかへるつばさに春雨ぞふる
見わたせば花ももみぢもなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ
駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ
玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふるやどのあきかぜ
夕暮はいづれの雲の名殘とて花たちばなに風のふくらむ

昨日だにとはむと思ひし津の國の生田の杜に秋はきにけり
あけぬるか衣手寒しすがはらや伏見の里の秋のはつ風
鳰の海や月の光のうつろへば浪のはなにも秋は見えけり

藤原定家

藤原家隆

この時代の歌人として忘るべからざるものに源實朝がある。その家集**金槐集**は**山家集**に次いで注意すべきものである。實朝は源氏の三代將軍として天下の政權を掌握して居つたのであるが、彼もとより蒲柳沈鬱の質である上に、北條氏の爪牙逞しくして武人としての地位は決して安固でなかつた。かくて彼は二十八歳を以て、公曉のために此の世の生命をたちきられたのであるが、この不遇なる短い生涯を飾るものは歌人としての彼である。彼は定家に歌を學んだが、**後萬葉集**を見てから萬葉歌風を得て清新なる調を開いた。彼の家集**金槐集**の注意すべき特色は、萬葉調を取入れたその復古的な所にある。その歌の悉くを金玉の響ありとは稱し難いが、萬葉風の力強い表現とともに眞率なる人間性の閃きを見せた歌には三唱措く能はざるものがある。

大海の磯もとどろに寄する浪われて碎けてさけて散るかも
箱根路を我越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ
ものいはぬよものけだものすらだにも哀なるかなや親の子を思ふ
いとをしやみるに涙もとゞまらずおやもなき子の母を尋ぬる

新古今集以後の勅撰集

更に翻つて**新古今集以下**の勅撰和歌集を觀る。

新古今集以後近古前期の末までに作られた勅撰集には、**新勅撰集**より**續後拾遺集**に至る八集があるが、是等の歌集はもとより**新古今集**の糟粕を嘗めるに過ぎないのであつて、文學史的には多くの價値を置き難い。殊に此の時代には定家の門閥が歌界を統一して、たゞ家風を傳統的に傳へるに過ぎないやうになつた。定家の子爲家は凡庸の資ながらなほ努力によつて其の歌風を繼承したが、その以後は家風が三つに分裂するに至つた。是等の中、二條家は定家の直系であると稱したが、其の歌風は保守的であつた。之に反して京極・冷泉家は寧ろ傍系の形をとつたが、二條家に比して新しき傾向を有し、殊に爲兼の如き優れたる才を以て二條家に對抗した。その爲世との論爭を記した**延慶兩卿訴陳狀**は兩派の態度を示してゐる。而して勅撰集も是等兩派のものが撰者として撰定したのである。

新勅撰集二十卷は後堀河天皇の勅宣によつて藤原定家が貞永元年に撰進したものであつて、**新古今集**の幽玄な巧緻な歌風から淡雅な歌風に推移するのを認める。所謂**新古今集**は花をとつたから、これは實をとつたとある。が當時に於ては非難もあつたので、俊成卿女も定家の撰集でなかつたならば手にもとらないであらうと言つて居る。契沖に**新勅撰集抄**の著がある。

續後撰集は後嵯峨上皇の院宣によつて後深草天皇の建長三年に爲家が撰した。**續古今集**は後嵯峨上皇の院宣によつて龜山天皇の文永二年に、藤原爲家・同基家・同行家・同光俊の撰定したものである。**續拾遺集**は龜山上皇の院宣により後宇多天皇の弘安元年に二條爲氏が撰進したものであり、**新後撰集**は後宇多上皇の院宣により、後二條天皇の嘉元元年に二條爲世が撰進した。**玉葉集**は伏見上皇の院宣により、花園天皇の正和元年に京極爲兼が撰進したものである。**續千載集**は後宇多上皇の院宣により、後醍醐天皇の元應二年に二條爲世の撰進したもの、**續後拾遺集**は後醍醐天皇の勅宣により、正中二年に二條爲藤と二條爲定が撰進したものである。斯の如く見ると、是等の撰集の撰者は爲兼の**玉葉集**を除く外は、すべて二條家によつて撰せられ、而も大覺寺統の天皇の命せられた所である。斯くして當時の歌の家の分裂は、皇室に於ける兩統と結びついて居る事を知るのである。是等の中で爲兼の**玉葉集**は新傾向を唱へた人の撰であるだけに、新しき傾向を示して居るが、要するにこの時代の勅撰集は、**新古今集**等より餘り出る事は出來なかつたのである。

かういふ狀態は近古後期にも引續いて居る現象であるが、しかしなほ勅撰集は撰進された。卽ち**續後拾遺集**に續いて**風雅集**二十卷が花園院御自らの御撰として貞和二年に作られた。花園院の序がある。花園院は爲兼の歌風を重んぜられたために、**風雅集**は**玉葉集**の傾向にたつて新しい境地を開拓された。次に**新千載集**二十卷は後光嚴院の勅宣によつて、二條爲定が延文四年に撰進した。**新拾遺和歌集**は後光嚴院の勅宣によつて、二條爲明が撰したが、爲明が早く歿したので頓阿が繼いで撰したと言はれる。撰進し終つたのは貞治三年である。又**新後拾遺集**は後圓融帝の勅宣により初め二條爲遠が當り、爲遠の歿後二條爲重が代つて永德二年に撰進した。二條良基の假名の序がある。序には「權中納言藤原朝臣爲重に仰せて、古より今に至るまで歌を集め撰ばしめ給ふ」とある。最後に**新續古今集**は後花園天皇の勅宣により永享十年八月に、飛鳥井雅世が撰進したものである。而してこの後勅撰集は絕えてしまつた。かくて近古後期に於て五部の勅撰集が撰せられたのであるが、既に因襲に流れて歌に力なく、文學的價値は極めて乏しいのである。この時代に於て特に注意すべきものは**新葉集**であり、又二條家に於て重んせられたのは頓阿の**草庵集**である。**新葉集**は弘和元年十二月に宗良親王の撰進されたもので、後龜山天皇から勅撰に准せられるべき勅宣を下されたとある。この集が勅撰集よりも注意さるべきは吉野朝の人々の歌集である點にある。吉野朝の人々は吉野に籠つて悲痛なる境遇を經驗したものであり、その經驗から自らに發した悲痛なる心情を歌つた事に於て、從來の因襲的な

感情をうたつた歌に對して遙かに尊むべきものがある。歌風そのものに就いては此の時代の他の歌集に比して特異な色彩を有するものではない。

新葉集の註釋としては村上忠順の**新葉集標注**がある

題しらず　　中院入道一品

いかにせんさらでも霞む月影の老の涙のそでにくもらば

歸る雁なにいそぐらむ思出もなきふる里の山としらずや　　中務卿宗良親王

吉野の行宮におはしましける時、雲居の櫻とて世尊寺のほとりにありける花のさきたるを御覽じてよませ給うける。

こゝにても雲居の櫻さきにけり唯かりそめの宿と思ふに　　後醍醐天皇

高御座とばりかゝげて櫻原の宮の昔もしるきはるかな　　後村上天皇

鳥のねにおどろかされて曉のねざめしづかに世を思ふかな　　後村上天皇

新葉集とならんで歴史的に注意すべき歌集に頓阿の**草庵集**がある。頓阿は兼好・慶運・淨辨と

ともに四天王と稱せられ、二條爲世の弟子として二條派の傳統を承けたのであり、その歌を集めた**草庵集**は二條派に於て極めて重んぜられた。頓阿の歌は自然の捉へ方に於て、また感情に於て、鋭い所もまた清新な所も見られないが、その平易暢達の點が當時にあつて愛賞せられたものと思はれる。本居宣長も**草庵集**を愛して**草庵集玉箒**を著して居る。

たかまどの野路のしのはら打靡き朝道く露に秋はきにけり

ことはりと思ひながらも淋しきは深山の庵の秋の夕ぐれ

行くまゝにいや遠ざかる故郷の山さへ今は雲がくれつつ

この後も歌の傳統は引續いて歌人は輩出し、正徹の**草根集**の如き特色ある歌集も現れたが、文學史的に和歌は衰退の道をたどつたのである。

二、連　歌

和歌が歌の家の專有の樣になつて生氣がなくなつた時に當つて、連歌が盛んに行はれ、近世に於ける俳諧へ導く過渡的産物をなして居る。連歌は三十一文字の歌を上下に分けて二人で唱和するのであつて、伊弉諾尊・伊弉冊尊二神の唱和が初めであるといひ、又**記紀**に見える日本武尊が甲斐國酒折宮で「新はり筑波を過ぎて幾夜か寢つる」と言はれた時、御火燒(ヒタキ)の翁が「かゝなべて夜にはこゝの夜日には十日を」と答へたといふ說話や、**萬葉集**卷八に尼が「さほ川の水

せき入れて植ゑし田を」と言つたのに對して、大伴家持の「かるわさ稻はひとりなるべし」と答へたなどを以て起原とせられて居る。近古後期に出來た連歌の書物に筑波といふ文字を多く附するのは、日本武尊の御歌を以て起原としたものである。その後、**拾遺集**の雜の部にも數首見えるが、特に連歌の部を設けてあるのは、**金葉集**が初めであるが、中古時代では全く遊戯的であり、一首の歌を二人で唱和するに止まつたが、近古以後には五十韻・百韻とつゞける樣になつた。而して既に近古前期にも多少の法則があつて、發句は必ず言切るべきであるといひ、三句の中には病を去るべきであるといふ如き是れである。而して柿本衆と栗本衆とに分れ、柿本の衆は優美なる歌の趣味にたち、栗本の衆は滑稽の趣を主として居るのである。かくて鎌倉時代にも連歌は盛んであつたが、歌のやうな嚴肅なものでなく、遊戯的に見られて居つたのであるが、近古後期になつて和歌と對立して、否歌よりも生々とした力を以て行はれるに至つたのである。而して近古後期の連歌の位置を高からしめたものは二條良基であり、連歌を文學的に見て價値多からしめたのは宗祇である。二條良基は攝政にまで至つた社會的地位の高い人物であるが、連歌を好み救濟その他のものを集めて連歌を深くきはめ、古代から當時に至る連歌を集めた**筑波集**二十卷を後村上天皇の正平十一年に撰した。更に連歌の法式を記した**應安新式**を作り、又連歌に就いて說いた**筑波問答**もある。良基の後、幾多の連歌師が輩出したが、その最もすぐれたのは宗祇であつた。宗長・肖柏は是にならんで注意すべきものである。宗祇は**萬葉集・古今集・源氏物語**等主なる古典の研究家としても注意すべき業績を殘して居るが、連歌に於ては**新筑波集**二十卷を撰し、また**吾妻問答**など連歌を說いた著もある。彼は西行の如く諸國を周遊して自然の中にひたり、その間に古典の講義を各地で行つて居るのであつて、その作は自然の靜寂を捉へた點に於て自然詩人といふ事が出來るであらう。

連歌の例として**水無瀨三吟百韻**の一部分を擧げる。

長享二年水無瀨三吟百韻

雪ながら山もとかすむ夕かな　宗祇
ゆく水遠く梅匂ふ里　肖柏
河風に一むら柳春見えて　宗長
舟さす音もしるきあけがた　宗祇
月やなほ霧わたる夜に殘るらん　肖柏
霜おく野原秋はくれけり　宗長

三、歌謠

近古時代に於ける歌謠として注意すべきは前期の宴曲と後期の小歌である。

宴曲は神樂・催馬樂・朗詠・今樣等の中古時代の謠物と近古後期の謠曲とを結付くる謠物の一

形式であつて、**續群書類從遊戯部**に**撰要目錄**・**宴曲集**五卷・**宴曲抄**三卷・**眞曲抄**一卷・**究百集**一卷・**拾菓集**二卷・**拾菓抄**一卷・**別紙追加曲**一卷・**玉林苑**二卷の十七帖が收められてあるが、此の十七帖は嘗て吉田東伍博士によつて校訂を加へられて世に出でたが、更に**外物**一帖を加へた十八帖をば**宴曲全集**として大正六年世に出だしたものがある。宴曲といふ名は宴遊に供ふるためであるといふ考が行はれて居り、又**撰要目錄**によつて**宴曲集**から**究百集**までは沙彌明空が正安三年八月上旬までに敍した事が分り、**拾菓集**二卷は明空が更に嘉元四年三月下旬に集めた事が分る。**拾菓集**は正和三年、**別紙追加曲**・**玉林苑**は文保三年二月に成つた事が記してあるが、編者の名は見えない。而して明空の作が多い事は**究百集**まで十帖の中、愚作ならざるものが二十餘首であるといふ自序の言によつて知り得る。作られた年代も野村八良氏は後鳥羽天皇御登遐前後から弘安の頃までだというて居る。

宴曲の形式は中古時代の歌曲に比して極めて大きく、**宴曲集**に見える「海道上り」の如きは、三段に分れて居り、**伊勢物語**の業平東下りや**平家物語**の「海道下り」などによつて作られてあり、**宴曲抄**の「熊野參詣」の如きも極めて長篇であるが敍事的構想はなく、又敍景としても極めて不自然で、たゞ美しき言葉を錦の如く列ねて、そこに音樂的諧調を示さうとして居る。題材としては極めて廣く、**宴曲集**の如きは四季・祝・戀・羈旅の如く大體勅撰集の部立によつてゐるが、或は「源氏」・「伊勢物語」・「狹衣袖」の如く物語より得たものもあり、「聖廟靈瑞譽山王威德」の如く靈驗に關するものもあり、そこに謠曲などに近づいて居ることを認める。內容思想としては特に見るべきものはない。

夕陽西に傾て、東にかへりみれば又、麓に霧のへだてつゝ、山より遠の夕日影、さすがに暮やはてざらむ。松の行あひの木枯に、つれなき色を殘しても、よその木の葉や時雨るらむ。夕越かゝる旅の空、かこつ方なき哀さは、夕やわきてまさるらむ。夕しほ夕なぎ夕波千鳥、なく音さびしき夕まぐれ、夕のことにわりなきは、野分の風も身にしみて、思みだれし折かとよ。忘るゝ間なく忘られぬ、夕の空の村雲に、猶立まよふ夕霧の、籬の花の夕じめり、手折りし袖やそぼちけむ。夕顏の花さく宿の主や誰、たそがれ時の空目は、げにおぼつかなくぞ覺ゆる。夕立の晴れぬる跡の夕づく日、かげろふかたの涼しきは、雲間をわたる夕風、夕霧の晩稻のいな葉うちなびき、風にたまらぬ夕露は、結びもあへずや亂るらむ。墨染の夕の色の凄じきは、檜つむ山路のそば傳ひ、麓の野寺のはるばると、そことも見えぬ歸るさに、時しもあれや入相の、かねて思ひし有明より、猶こゝろすむ山陰の、五百代小田の夕嵐、草の戶ざしの明暮は、袖も干しあへぬ露の間に、聲よわりゆく古鄕の、蓬が柚のきり〴〵す、暮れゆく空のけしきは、誰もあはれやまさるらむ。夕はもろき泪かな。

次に近古後期の謠物を見るに、前期に行はれた宴曲は發展して舞の本から、謠曲となるのであるが、是等は單なる謠物といふよりは劇的要素を加へてゐるから別に述べる事にして、こゝには近世の俗謠等に導く短形式の謠物に就いて一言する。小歌といふものが近古後期に行はれ

た。此の時代の小歌は**閑吟集**といふ集によつて殘されて居る。また別に**室町時代小歌集**が近時世に出で、**閑吟集**以外の多くの小歌が知られた。**閑吟集**は永正十五年に成つたもので三百餘首の歌謠が含まれて居る。是等の歌謠は初めから小歌として獨立したものでなく、謠曲や狂言等に見える小謠を切離して一首の小歌として認められるに至つたものもあると思はれるが、斯の如き小詩形の謠物が獨立して行はれるに至つたのは興味ある事である。その格調には近世の俗謠の趣を既に示し、その感情は民衆の生きた心が現れて居る。

第二章　物　語

一、軍記物語

この時代の物語で先づ第一に注意すべきは軍記物語である。中古時代の小說物語及び歷史物語から、更に武人の爭鬪を扱つた軍記物語の出でたことは非常に興味のある事である。而してこの時代に於ける軍記物語としては**保元物語**・**平治物語**・**平家物語**・**源平盛衰記**を擧げる事が出來る。是等の四書の成立の順序に就いて**保元物語**・**平治物語**が最初に作られ、次に**平家物語**・**源平盛衰記**が作られたと見るのが從來の說であるが、藤岡博士は**鎌倉室町時代文學史**に於て**平家物語**の後に**保元物語**・**平治物語**が作られたとし、野村八良氏も**鎌倉時代文學新論**に於て此の說に從つて居られる。又**平家物語**と**源平盛衰記**との先後に就いても說があるが、藤岡博士は**源平盛衰記**を先として居られる。が一般の說である**保元物語**・**平治物語**が作られ、次に**平家物語**が成り、**源平盛衰記**は**平家物語**の後に成つたといふ考も必ずしも否定せらるべきものではない。

保元物語

保元物語は保元の亂を中心として記した物語であつて、三十七章ほどに分れて、その次第を記してあるが、作の中心人物として活躍して居るのは源爲朝であり、父爲義に從つて崇德上皇方に盡した彼の剛勇と、味方が破れて後彼の陷つて行つた失意の中に發揮したその剛勇とが基調となつて居る。その筆は華麗ではないが、勇健な力に充ちたものである。作者は葉室大納言時長といふ說が最も有力であるが、中原師香とする說もある。

平治物語

平治物語はその組織並に文章も**保元物語**と同一であつて、同一作者の手によつて引續いて成されたものと思はれる。この物語は平治の亂を扱つたもので、信西と信賴との不和に筆を起して、源義朝と平清盛との爭鬪に至つて居るが、保元の亂に於ける爲朝に匹敵する人物として惡源太義平が活躍して居る。

平家物語

平家物語は平家の榮華に筆を起して其の滅亡に至る間を記した物語であつて、初に「劍の卷」があり（但し劍卷は普通に云ふ平記について居る）、次に廿二卷あつて、終に建禮門院の御出家の次第を記した「灌頂卷」がある。**平家物語**の作者に就いては諸說があるが、何れも確な根據はない。その僧侶の手に成り、謠物として多くの手によつて改刪もされ、增補もされたものであらう。今日流布本・異本の

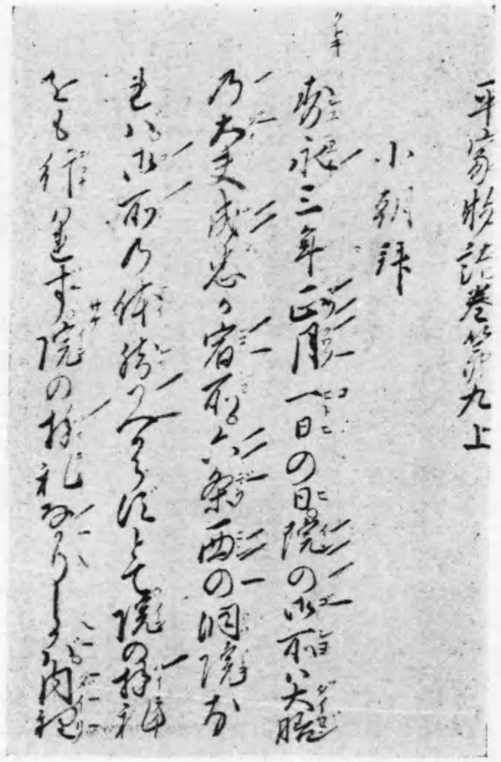
平治物語繪巻（帝國圖書館藏）

極めて多く存するのも、謠物として各流派に傳承されたためであらう。

平家物語の全篇を見ると、人生に對する無常觀が中心となつて平家の二十年の榮枯盛衰のあはたゞしい事件を貫いて居る。強烈なる自我をあくまで通さうとした清盛の一生は、その全體の空氣の上から見てむしろ痛ましい。この物語の中には重盛の如き賴朝・義仲・義經の如き活躍して居る人物も多いが、清盛の前には副人物たるに過ぎない。

平家物語の一面には貴族的精神が武士的精神によつて次第に亡ぼされて行く經路が描かれてある。平家は兩者の間の過渡に立ついたましき犧牲者であつたのである。それが**平家物語**のもつ悲劇的性質であると思ふ。文章も和漢混淆文であつて强い所があるが、中古時代の假名文脈と程よく織交せられて、祇王祇女や小督の如き優美な事件を敍するには、纖細優雅な文を用ゐ、戰鬪を敍するにはひきしまつた句法を用ゐて場景を活躍せしめて居る。

源平盛衰記四十八卷は平家の盛衰興亡を記したもので、扱つた題材は**平家物語**とほゞ等しくして詳密である。そのために**平家物語**の異本であるといふ說もある。異本といふ說にはにはかに從ひ難いが、兩者の密接な關係は否定し難いものがある。



平家物語（東京帝國大學國語研究室藏）

源平盛衰記は**平家物語**と同じ題材を扱ひ、**平家物語**よりも敍述の精細なる點はあるが、物語の中心點が稀薄で全體を貫く精神の力强さが見られない。又平家のやうな音樂的諧調も見られない。是は一面には**平家物語**は謠物であつた爲でもあらうが、又他面には作者が平家の榮枯盛衰に就いて痛切に世の無常を感じ、それが筆端に自ら迸る所があつたためであらう。

次に近古の後期の軍記物語として**太平記**がある。**太平記**は四十卷から成り、花園天皇文保二年から後村上天皇正平二十二年、北朝の貞治六年迄の記載であるが、主としては後醍醐天皇が

北條氏追討の軍を起される所から筆を起して、朝廷軍の敗北から笠置の御沒落となり隱岐への御遷幸となり、やがて建武中興となつたが、また足利尊氏の叛によつて四海亂れ、楠木正成・新田義貞・北畠顯家なども陣歿し、後醍醐帝も吉野に崩御になり、吉野朝の勢威衰へて行く次第を敍してある。作者に就いては**太平記理盡抄**に玄惠法師が主として記し、後數人の僧侶の手を經て完成したといふ說が見えるが、近時**洞院公定日記**によつて**小島法師**とする說が多く行はれて居る。書名に就いても**理盡抄**によれば、四度も代つたのであつて、初めは**安危由來記**といひ、次に**國家治亂記**とし、また**國家太平記**と改め、四度目に**天下太平記**と號したとある。

太平記は**平家物語**等と同じく戰爭を敍してあるが、敍事の進行に直接關係の薄い和漢故事を夥しく引くために、敍事が岐路にわたる事が多く、又漢文の語句を多く引用して居るために華麗ではあるが、率直な力がない。且つ**平家物語**のやうな統一ある花やかな事件と、中心となる思潮に乏しいために散漫に流れて詩的興味に乏しい。が南北朝が分れてから吉野朝の忠臣の苦鬪も效なく、楠木父子や北畠顯家・新田義貞等が次第に戰死し、後醍醐帝も怨を呑んで崩ぜられる等、吉野朝の衰滅に陷つてゆくあたりのじめ〳〵した陰慘な氣分はよく寫し出されて居る。そこに**平家物語**の樣な劇的な效果は無いにしても、實人生そのものを思はしめるものがある。

次に**太平記**等とはやゝ性質を異にするが、軍記の中に入れらるべきものに**義經記**と**曾我物語**とがある。是等は**平家物語**や**太平記**が時代の戰爭を扱つてゐるに反し、義經といふ一個の英雄

若しくは曾我兄弟の敵討といふ極めて狹い事件を扱つて居る所に相違がある。**義經記**は作者も年代も確かには分らない。伊勢貞丈は鎌倉將軍の末に記したものといつて居るが、山崎美成の**海錄**には**義經記**の中に「御兔やうの軟革」とあるが、御兔やうの軟革の名は室町將軍の時出でたから、**義經記**は室町將軍の時の作であらうと言つて居る。島津久基氏は足利義滿・義持時代の作であつて、儒教風の教育を受けた公卿が義經傳說を集成したものであると言つて居る。義朝の都落から筆を起して牛若の鞍馬入となり、金賣吉次につれられて奥州の秀衡にたよる所から、賴朝擧兵のために是に從ふ事になる。しかし**平家物語**に精細に敍せられてある平家追討の花々しき義經に就いては全く省略し、直ちに腰越の申狀となり土佐坊の堀河夜討となり、かくして判官の吉野落に悲壯の筆をふるひ、更に判官の北國落となり、判官自害の事に終つて居る。卽ち義經の所謂英雄としての花々しき時代は是を略して、少年の頃の苦楚艱難を嘗めた次第、兄賴朝と仲違をしてから、居るに所なき逃亡落魄の悲痛なる時代を主として描いた所に、**義經記**の作者の態度が窺はれるのである。

曾我物語は十二卷に分れ、曾我兄弟の仇討を扱つて居る。作者も時代も確かには分らないが、**義經記**とほゞ同時代に作られたものであらう。主題は仇討であるが、軍記一流の溯源的敍述法により、神代の始の事から筆を起して惟喬・惟仁の位爭などを敍し、次に曾我兄弟の先祖の事から委しく說いてある。その間に支那や印度の故事を盛んに引用して居る。曾我兄弟の仇討は**義**

經記とともに國民精神の或るものに觸れて居る點で、國民の愛好して止まなかつたものである。その意味に於て、この兄弟の仇討を始めて精細に敍した物語として注意すべきものである。

二、擬古物語・歴史物語その他

軍記物語はこの期に於て始めて作られた文學形態であり、この時期に於ける文學を代表するものであるが、なほ物語の上に於て中古時代に創始された文學形態が引續いて作られて居る。それらを次に考察して見たい。

第一に**源氏物語**の系統を引いた假名物語に就いて考へると、中古時代の頃にその名の見えて居る**住吉物語**や**とりかへばや物語**も現存の本は近古前期の作と思はれるが、是等はその文章に於ては近古時代の趣があるが、内容は中古時代末期のものと思はれる。更に二三のものに就いて見ると、**石清水物語**は上下二卷に分れて居り、**續々群書類從**歌文部に載せられて居る。**石清水物語**の說話は複雜である。骨子となる所を見ると、常陸守の子鹿島の君は、後に伊豫守となつたが、右大臣と宰相の君との間に出來た姫君を戀して姫君を得るが、後に出家するといふ所にある。中古時代のやうな奔放な情がないと同時に、佛敎的思想の浸潤して居るのを見る事が出來る。**近古小說解題**ではこの書の成立を寶治元年以後、文永八年以前二十四年の間の作と見て居る。

次に**苔の衣**は寫本で五冊から成つて居る。**古物語類字抄**には建長頃の作であらうとして居る。關白の一子右大將が、その從妹を慕つて夫人とし、一男一女を擧げたが、冷泉院が其の姫君を右大將に賜はらうとしたので、夫人は憂愁して病を獲て逝き、右大將も横川に隱遁したといふ事を中心として居る。この說話は源氏に女三宮を賜はらうとして、そのために紫の上が怏々として居る所に類似して居つて、その影響を受けた事は想像されるが、その失意の境遇をのみ寫した所に此の時代の特質を見る事が出來る。

更に歴史物語に就いて見ると、**大鏡**に次いで**今鏡**・**水鏡**が作られた。作者は**今鏡**は源通親、**水鏡**は中山忠親といふ說が比較的信ずべきであらう。**今鏡**の記述は**大鏡**の記事をついで高倉天皇まで十三代に亙つてゐ、體裁は**大鏡**に似てゐる。**水鏡**は神武天皇から仁明天皇まで五十四代の敍述で、體裁は編年體で、敍述は簡單である。たゞ**大鏡**の前を補つたに過ぎないものであつて、全體としての强い統一點は見られず、文章としても味ふべき所は少い。しかし材料に就いては新しいものも取られて居る。初めに**大鏡**にならつて、泊瀨寺で七十三歳の尼に三十四・五歳の修行者が以前葛城で仙人から聞いた事を夜をあかして語つたことといふ序がある。

この歴史物語は更に近古後期になつて**增鏡**を出だしたが、これは更に後に述べる事にする。なほ**增鏡**序に「まことや**いや世繼**に、隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御ほどまでをしるしたりとぞ見えはべりし」とあり、**本朝書籍目錄**にも「**彌世繼**二卷」とあるが今は傳はつて居ない。更

に**水鏡**の記述以前の神代紀を書いた作に**秋津島物語**がある。

次にこの期に於ける**今昔物語**の系統を引いた傳說物語を見ると、第一に**宇治拾遺物語**がある。**宇治拾遺物語**は**今昔物語**の補遺といふべき意味であらうが、**今昔物語**に重複するものが全體の百九十四段の中八十餘段もあるから多く傳誦された說話を基礎として、更に後人が敷衍したものであらうか。是を隆國の著とするはもとより誤であらう。說話には佛敎傳說もあるが、民衆生活に觸れたものの方が多く、文章も**今昔物語**に比してやゝ平易になつて居る。**今昔物語**のやうに說話の性質によつて分類せずに集めてある。

十訓抄は其の序に「建長四とせの冬神無月の半の比おのづから暇あき、心閒なる折節にあたりつゝ、草の庵を東山の麓にしめて蓮の臺を西土の雲に望む翁、念佛のひまにこれをしるし終ることしかりとなむいへる」とある事によつて、建長四年の冬佛敎に信心あつき老翁によつて作られた事は明かであるが、然らば何人であるかといふに、まだ確說はないのである。或は是を**著聞集**と文體の似て居る所から**著聞集**の著者である橘成季の著ではないかとする說もあり、又正徹の**清巖茶話**の記事によつて菅原爲長說をとる者もあり、又妙覺寺本の奧書に「或人云六波羅二藺左衞門入道作云々長時時茂等奉公」とあるによつて六波羅二藺左衞門入道說をとる者もある。この第三說は最も有力なるが如く、屋代弘賢もこの說に贊し、藤岡繼平氏もこの說をとつて居る。

（**十訓抄詳解**「十訓抄考」に據る）

十訓抄は全體を十篇に分ち、「可定心操振舞事」・「可離憍慢事」・「不可侮人倫事」・「可誡人上多言等事」等それ〴〵敎訓的の題目を擧げて、先づその趣旨を說き、是に關する說話を擧げてある。和漢・印度等の說話もあるが、**今昔物語**や**宇治拾遺物語**その他より材を取つたのであつて、**今昔物語**の如き說話としての價値は尠く、說話を材料として敎訓を說いた所に此の書の特色がある。而してその說く所は儒佛敎の說などにより、その洒脫なることは**徒然草**に及ばないが、諄々として說く所に此の時代の特質を見る事が出來る。

十訓抄研究としては、石橋尙寶氏の**十訓抄詳解**が見るべきである。

更に**古今著聞集**がある。此の書は著者の序に「于時建長六年應鐘中旬散木士橘南袁愁課小童猥敍大較而已」とある事によつて、作者ならびに成立年代を知る事が出來る。南袁は南里須袁の二字をとつたのであつて、橘成季であり、建長は後深草天皇の御代である。同序に「余稟二芳橘之種胤一顧二璅材樗質一而琵琶者賢師之所レ傳也。儻辨二六律六呂之調一圖畫者愚性之所レ好也」とある事によつて、成季の性行をも推知し得る。**著聞集**は神祇・釋敎・政道・忠臣・公事・文學・和歌・管絃・歌舞等三十篇に分ち、是を二十卷となして居る。**著聞集**も種々の說話を集めてあるが、**今昔物語**や**宇治拾遺物語**のやうな民衆的な素樸な所が失せて、やゝ批評的・敎訓的な所が見られる。例へば、一の說話を擧げた後に、「祕すべき事もいたく過ぎぬるは罪となるにこそ、能く心得べき事なり。」といふ如き言葉を加へた事は、近古時代の特色を示して居る。

次に近古の後期に出でた歴史物語として**増鏡**を擧げる事が出來る。**増鏡**は治承四年後鳥羽院の卽位し給うてから、元弘三年後醍醐天皇が隱岐から御還幸になるまで、十五代百五十年間の編年體の歴史物語である。此の書の成立に就いては一條兼良作といふ説もあるが、未だ從ひ難いのであつて、たゞ**應永本**の奥書によつて元弘三年から永和二年までの四十八年間に或人によつて書かれたといふ事のみは確かであらう。本文の中に錯簡があつて「大内山」と「烟の末々」とは一部重複があり、且つ年代も錯誤して居り、又「山のもみぢ葉」と「北野の雪」とも重複して居る。

増鏡は是を内容の上から見れば、**承久の亂**と**元弘の亂**といふ二つの事件を中心とした皇室と執權北條氏との交渉史卽ち公家と武家との爭鬪史である。此の如く皇室對幕府の爭鬪史であるために、公卿でありながら武家に接近した西園寺家の榮華を極めた點、武家が皇室の反武家的御精神を幾分でも弱めるために計らつた兩統迭立問題や攝家將軍・親王將軍の如きは委曲を盡して居るが、武家と皇室との融合一致した元寇の亂はそれが歴史としては重大な問題でありながら、この書の精神に觸れる事が少かつたために筆をば省いたのであるとも思はれる。その文章は**源氏物語**を摸した擬古文であつて、優麗な點はあるが、力が弱く描寫も生々として居ない。嵯峨の清涼寺で老婆が語る形になつて居るのは**大鏡**にならつたものであるが、**大鏡**のやうにそれらの人物が躍動して居ない。

註釋書としては和田英松・佐藤球兩氏の**増鏡詳解**がある。

更に史論的の著作を見ると**神皇正統記**がある。

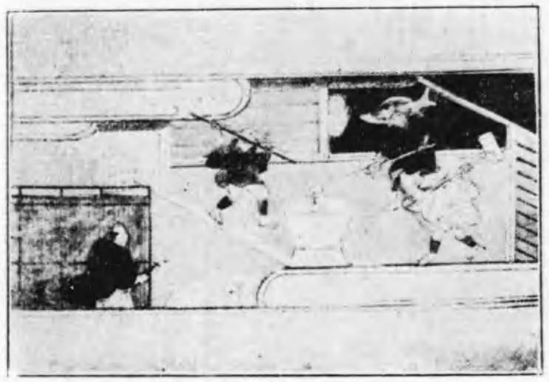
神皇正統記は北畠親房の著である。親房は村上源氏の出であつて、伏見・後伏見・後二條・花園・後醍醐・後村上の六朝に歴仕したが、殊に後醍醐天皇の御代には碎身の忠を勵み南朝の忠臣として仰がれた。而して後醍醐帝の怨を呑んで吉野に崩ぜられ、南朝の運非ならんとする時、關東に轉戰して恢復をはかつた。關城にこもつた時、結城親朝に書を送つてその救を乞ひ、また小田城内にある時、大義を明かにするために**神皇正統記**を著した。蓋じたのは正平九年であつた。**正統記**は神器の存する所に正統のある事を證せんため、建國の初めより筆を起し、歴代を概觀して後村上帝の卽位に終つて居る。その間に一貫するものは大義の精神であり、建國の條には佛教的解釋も多く見えるが、「神代より正理にて受け傳へる謂を述べん事を志して常に聞ゆる事は載せず。されば**神皇正統記**とや名づけ侍るべき」とある如く、神道を中心として居るといふ事が出來る。而して一面には政道の正しかるべき事を説いて、賴朝や泰時の功績をたゝへて居る。君の政もその可否に隨つて御運の通塞があるべき事を説いて居る。正統記は此の如く親房の熱血の溢るゝ所に成つたものであるから、その文章は飾らないが力が漲つて居る。建國から後村上の朝までの大きい範圍を描いてよく統一を得て居る。

吉野拾遺は南朝に關する種々の説話を擧げてある。たとへば後醍醐天皇が吉野の行宮でよま

れた、

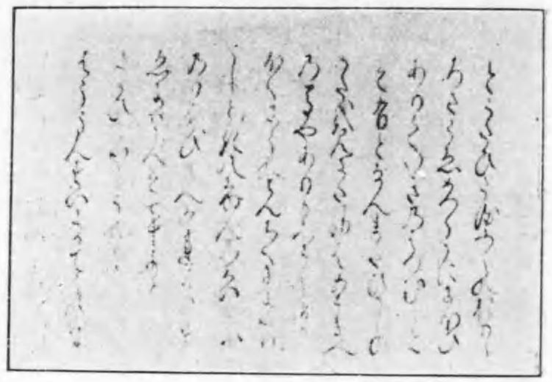
こゝにても雲居の櫻咲きにけりたゞかりそめのやどと思へど

の御歌を始めとして、辨内侍に關する說話や伊賀局が藤原の基任を慰めた說話など數十項を集めてある。**神皇正統記**が史論を中心として居るに反して、是は說話集として一貫の主潮はないが、南朝の悲慘なる運命に對する詠嘆が全體に流れて居る。



三、お伽草子

次に近古の後期に於て源氏物語の系統を追つた擬古物語が引續いて作られるとともにお伽草子が作られた。擬古物語は大體に於て寫實的傾向を追ふものであるが、お伽草子はこの時代に起つた說話を平易に敍述したものであつて、寫實的分子よりは空想的・想像的要素が濃厚である。例へば**鉢かづき**をとつて其の說話を見る。河內の國かた野の邊に備中守さねたかといふ人があり、家富み榮え、夫婦の中に一人の姫君を得たが、母君は鉢に何か入れて眉の隱れるほどにかぶらせ觀世音に祈願した。その中十三になつたが母はかりそめの病に死した。そこで姫の頭の鉢を取らうとしたが如何にしても取れなかつた。その中に繼母は姫の鉢かづきである事を嫌つて、父に讒して姫を逐ひ出した。姫は泣く〳〵流浪する中に、中將殿といふに見出だされてその家に伴はれ、湯殿におかれたが、矢張人からあざけられて居た。かくてその中將殿の四人目の御曹司はこの鉢かづきの姫と契を結ばれた。兩親は是を諫めたけれども用ゐないので、兄三人の嫁などと共に嫁合をする事になつた。鉢かづきの姫と御曹司は悲んで家を出ようとする時、鉢が落ちて金銀の調度や小袖などが出て來た。さうして顯れた姫の容顏は輝くばかりであつた。かくて嫁合せで恥を與へようと思つて居た人達も姫の美しき姿に驚き、又音樂・歌すべてに優れて居るのを感じて、父はこの四男と鉢かづき姫とに財產の大部分を與へた。姫を逐ひ出した繼母も今は悔悟して、この姫にめぐり逢ふのである。此の如く一時は輕蔑されたものが再び榮華の春にあふ事は、**物ぐさ太郎**にしても**一寸法師**にしても同樣であつて、行きつまつた現實から離れて、ほしいまゝに空想の世界をめぐらした所に是等の說話が生れ、又お伽草子が生じたのであ



（東京帝國大學國文學研究室藏）

る。而して一面には教訓的要素が加へられて居るのである。

お伽草子を集めたものに、**お伽草子前後篇・新編お伽草子**があり、兩書を通じて四十三篇ある。又平出鏗二郎校訂**室町時代小說集**、島津久基編**近古小說新纂**に右に漏れたものを收めてある。

第三章　戲曲

一、舞の本

舞の本は幸若舞の詞をさすのである。幸若舞は舞舞ともいつて、源義家から八代の後胤桃井播磨守直常の孫の宮内少輔直詮が始めたと言はれる。而して直詮の童名を幸若丸と云うたために幸若舞と稱するのである。足利義政の頃から行はれ、近世にかけて盛んであつた樣である。舞の詞の存するものは貞享の**書籍目錄**に三十六番あり、**群書一覽**には**書籍目錄**にある**鎌田・いづみが城**が見えないが、別に**夢合・劔讃嘆**の二番が見えるので、兩者で三十八番ある事になるが、この外にも數番あるから總べてで四十餘番存する事になる。

製作者と製作時代

舞の本の製作者竝に製作時代は確かには分らないのであるが、謠曲や狂言などの如く、次第に作られていつたものと思はれる。而して舞の本に於て扱はれた題材を見ると、曾我兄弟・義經を扱つたものが最も多く、その他**平家物語**から題材を得たものが多い。又**大織冠・入鹿・百合若大臣**等平安時代及びその他の時代から材を得たものもあるが、上田博士は**舞の本**の緒言に於て是等の作品が最も古いと言はれて居る。

舞の詞の組織

舞の詞の組織を見ると**地の文**と**詞**とに分れて居るが、地の文も謠曲のやうな華麗な韻文式でなくお伽草子風の散文式であり、全體が劇的な要素が少くお伽草子と同じやうな體裁をなして居る。例へば**富樫**の如きは辨慶と義經が安宅を越える事件を主として扱つて居るが、謠曲の**安宅**の如き劇的な趣がなく、敍事的であつて事件が浮出して居ないのである。今日傳はつて居る幸若舞の曲節は極めて素樸なものであり、舞も極めて單純なものである。

二、謠曲と狂言

謠曲

然しながら此の時代の劇文學としてのみならず一般文學を最もよく代表して居るものは謠曲と狂言とである。謠曲は猿樂の能の詞章であつて、能と合せて味ふべきものである。謠曲は觀世・寶生・今春・喜多・金剛等の諸流派に分れ、それ〴〵によつて曲節のみならず詞章をも多少異にして居るが、大なる相違はない。番數は普通行はれるものは二百番であるが、すべてを合すれば八百番餘りに達する。作者も作られた年代もはつきり言ふ事は出來ないが、近古後期より近世の初頭までに多くの人の手によつて作られたものであらう。世阿彌によつても多く作られたことは**世阿彌十六部集**などによつて知る事が出來る。

謡曲の構造を見ると、シテとワキとが主であつて、それにツレ・トモ等が現れる。またツレが多勢なる時は立衆といひ、又子供のする役を子方といふ。又アヒといふのは狂言師の役である。謡曲の中、詞の文句は是等によつて語られ、地の文は地謡がうたふのが一般である。又シテはその姿が前後變つて現れる場合に是を前シテと後シテと稱する。而して芳賀博士はシテが前後姿を變へるのを複式能といひ、シテが姿を變じないのを單式能と稱せられた。

次に謡曲を演能順に分けると、脇能・二番目・三番目・四番目・尾能（キリノウ）となるが、これを性質の上から見ると、脇能は神事物といはれ、二番目は修羅物、三番目は鬘物、四番目は現在物、尾能は鬼畜物と言はれる。更にこれを内容の上から見ると、神事祝言能・精靈能・人事能の三つに分ける事も出來るかと思ふ。是等を一二の作によつて少しく解説して見たい。神事祝言能は神事に關するもの若しくは祝賀の意を表したりするものであつて、形も單純であり劇的な要素が極めて尠い。思ふに謡曲の原始的なものであつて**高砂**の如きはその最も代表的なものである。此の曲は前シテは翁、後シテは住吉明神であり、ツレは嫗、ワキは阿蘇の神主である。處は播磨であり、季は二月である。阿蘇の神主が高砂の浦を一見せんとして來ると、老翁老婆が謡ひながら來るので、それに高砂住吉の松の由來を聞く。老翁老婆は相生の松の精なる事を語つて神の方に出る。住吉の浦に於て住吉の明神が現れて御世をことほぐといふ説話になつて居る。

精靈能は形は普通複式であつて、死んで往生を遂げない魂魄が此の世に假に姿を現すが、旅人に教化され迷の雲晴れて、眞の姿を現して消えるといふ説話形式になつて居る。例へば**田村**をとつて見る。此の曲は一方から言へば修羅物であるが、また精靈能とも言はれよう。處は京都の清水寺であり、時は三月の花の頃で、前シテが花守、後シテが坂上田村麿、ワキは旅僧である。旅僧が清水寺に參詣して玉箒を持つ花守に向つて寺の來歴を聞くと、花守は委しく述べ花盛りなるあたりの名所の話をする。旅僧もその博識に驚いて素姓を聞くと、その姿は田村堂の内に入つてしまつた。旅僧は花も妙なる法の庭に經を讀誦して居ると、田村麿が現れて旅僧の讀誦は大慈大悲の觀音擁護の結緣たる事を語り、その素姓を述べ鈴鹿の惡魔退治の功績を語つて姿が消えるのである。精靈能の形式は大體是と同樣で、たゞシテが田村麿の樣な武人である事もあり、鬘物と言はれる**松風**の樣な妙齡な女性である事もあり、或は芭蕉の精の如き場合もある。それによつて又別の分類もなされるであらう。

第三に人事能は人事を扱つたもので、一方から言へば現在物である。これには精靈の如く一定の説話形式もなく、又形は多く單式であるが、構造は複雜であり、一曲毎に特殊性があつて劇的要素が豐富である。謡曲の本質は精靈能にあると思はれるが、藝術的に見て人事能はすぐれて居るといふ事が出來る。例へば義經と辨慶とが奥州へ落ちのびる際、安宅の關でにせ勸進帳を辨慶が讀んで難を脱れた説話を扱つた**安宅**の如き、平家の景清が流されて居る所へ、その女の人丸が訪れた哀憐の場面を描いた**景清**の如き、又時頼が佐野源左衞門常世を拾ひ上げた説

話を描いた**鉢木**の如き、その他敵討説話を描いた**望月**の如き、盲目の俊徳丸を扱つた**弱法師**(ヨロホウシ)の如き是れである。形式が囚はれないだけに自由である。

謡曲とならんで狂言がある。狂言は謡曲が猿樂の能として演ぜられる間に演ぜられたのであつて、謡曲との間に著しき相違を示して居る。謡曲は從來の古典文學を集成したものであつて、その詞は華麗であり、その内容は神祕的・宗教的であり、全體に嚴肅な氣分が漂つて居るが、狂言は舊文學の傳統から離れて新しい詞と内容とから成つて居る。即ち言語も室町時代の口語を用ゐて居り、その描く所も室町時代の世相の上に立つて居る。傳統的な權威と、新しく起つて來たものとの衝突葛藤といふ樣な題材を扱つて、そこに滑稽な氣分が漂つて居るのである。而して狂言の今日存するものは**狂言記**・**續狂言記**・**拾遺狂言記**によつてそれ〴〵五十番づつ合せて百五十番と、外に狂言記外五十番に載せられてあるものによつて合せて二百番になる。狂言の流派にも大藏流・鷺流・和泉流の三流あるが、最も勢力あるは和泉流である。

是等の狂言は内容から言つて種々の分類がなされるであらうが、演ずる上から見ると脇狂言と二番目狂言と雜狂言とに分けてある。脇狂言には祝賀の意のあるものを用ゐ、**末廣がり**・**實の槌**などはその例であり、二番目狂言には大名物などを主とし、**文相撲**・**墨塗**・**二人大名**の如きその例であり、雜狂言は種々の題材を扱つてあり、その番數は最も多い。狂言の組織は極めて單純であつて、例へば**末廣がり**の如き、大名が太郎冠者に末廣がりをとゝのへにやると、末廣が

欠

第四篇　近世文學

序　說

元祿期の文學

近古の神祕的宗教觀と傳統的な空氣との中から出でて自由に個性を創造しようとした自覺の下に產み出された近世の文學には潑剌たる生命がひらめいて居た。近世の第一期とも言ふべき元祿文學は、その潑剌たる生命が產み出だしたものである。因襲的な現實から脫却して古に復らうとする運動は古學の復興となり、萬葉歌風の唱道ともなつた。又自然の中にあくまでひたつてそこに自己の生命を見出ださうとする態度は芭蕉の藝術を產出した。而して階級意識の壓迫から幾分解放された町人の藝術を新しく創造したのは近松・西鶴であつた。此の如く元祿時代は因襲から解放せられて、獨自の世界を創造した所に生々とした力が漲つて居る。

安永・天明期の文學

而して第二期ともいふべき安永・天明の時代は、第一期と後の第三期との間の過渡に立つ時期であつて、和歌の如きはこの期になつて萬葉派の歌風を初めて完成した觀があるが、既に芭蕉・近松・西鶴の創造した藝術は漸く頽廢して、第三期に於ける新たなる開展の道を啓かうとして居る。加ふるに第一期の京阪文學が漸く東遷しつゝ、第三期の江戸文學を作り出す過渡時代であ

欠

つたのである。俳諧に於ては蕪村がこの期に出で、その他狂歌・川柳の如き滑稽詩歌も起らんとし、小説に於ては洒落本・讀本（ヨミホン）などの新しき小説の形式が起らんとして居る。劇文學に於ては淨瑠璃は既に衰へ、脚本がこれに代つてその中心に立たうとして居る。が全體に於てこの期は動いて居る時であつて、完成せられた時期といふ事は出來ぬ。

第三期は第一期と並んで近世文學の一の中心をなす時代で、第一期の如く潑剌たる生命は無いが、感性は纖細になり、所謂粋とか通とか意氣とかいふ氣分が横溢して居る。和歌は復古の精神から一歩を進めて現實に立脚し、そこに生命を捉へようとした氣運が現れ、俳諧も一茶の如きは亦現實に足を下したといふことが出來る。小説に於ては讀本・人情本・滑稽本・合卷（ガウクワン）など種々の形式の上に多くの作家が輩出した。淨瑠璃は僅かに存續するだけで、脚本の方面に於ける鶴屋南北から古河默阿彌に發展するその運動に比して遙かに光が弱いのである。こゝではこの三期を考慮に置きつゝ、詩歌・小説・戯曲に分けて考察したい。

第一章　詩歌

一、古學復興時代の和歌

近世の初頭に於ける和歌は**萬葉集**の精神に復つて、こゝに新しい歌を作らうとした。この機運によつて生れ出たのは戸田茂睡（モスイ）・下河邊長流・契沖・荷田春滿（カダノアヅママロ）等である。がこの時代に於ては**萬葉集**を知的に明かにしようとする意識はあつたが、未だ實際の作歌に於て**萬葉集**の歌風を表す事は出來なかつたのである。戸田茂睡は寛永六年五月十九日駿河府中の御城の三の丸で生れたが、五歳の時下野那須郡の黒羽に移つてそこで成人した。江戸に出で戸田恭光（ヤスモツ）と改めて仕官したが、後官を辭して隱棲し、かくれがの茂睡と名乘り現實の譽を捨てゝ學問と文學との世界に進んだ。彼の歌學上の功績は**梨本集**や**僻言調**（ヒガゴトシラベ）によつて從來の二條派の傳統に逆つて歌論を破壞した所にあるのであつて、その歌論に於ける破壞的態度から必然的に創作の上にも多少の清新を加へて居るのである。彼の歌は**とりのあと**や**さざれ石**などによつて見られるが、舊派の歌風の中にやゝ表現や心境の上に新しさを認める。

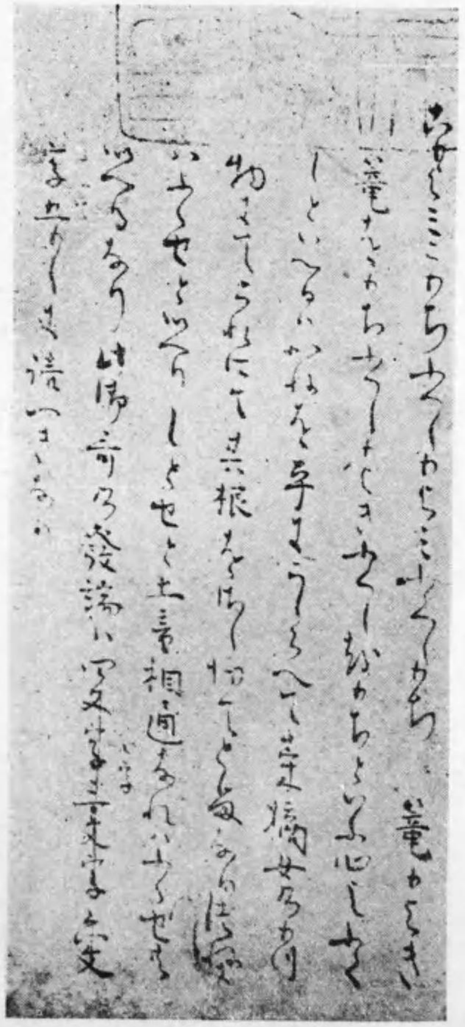
戸田茂睡

ぬれてなく山ほとゝぎす五月雨のふる巢やおもふ親や繼しき
秋の色のながめにかへてこのころは高根のあらし麓のしぐれ
旅衣たちへだてゝもさらざるはさらばといひし人の俤
みる夢のなにそはありてありし世の忘れぬさまを猶したへとや

下河邊長流

下河邊長流は大和龍田に生れ、江戸に出たが志を得ず、難波に歸つて隱棲し、學問や和歌の道にすべてを忘れて生涯を送つた。釋契沖と莫逆の契を結んだ事は契沖の「われを知る人は君のみ君を知る人も多くはあらじとぞ思ふ」によつても知られる。殊に**萬葉集**に造詣が深く、若

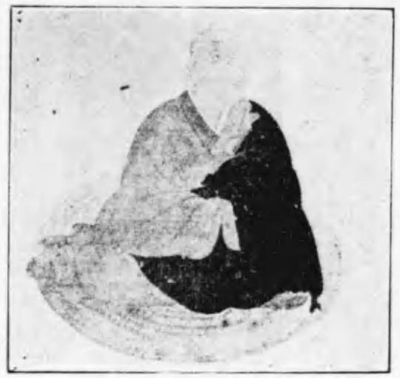
き時に**萬葉集管見**などの著もあつたので、徳川光圀は**萬葉集**の註釋を彼に求めたが、病のため果さず、貞享三年六十三歳で歿した。歌集には延寶九年自ら撰んだ**自撰晩花集**（長流延寶集）と、死後契沖が撰した**晩花集**とがある。その歌風は未だ二條家から全く脱却するには至らなかつた。



下河邊長流筆蹟

里中に夕あさりせし庭鳥のとぐらに入れば日は山の端に
富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり
せば布の胸あひがたきすきまより身にしむけふの秋の初風
つひにわがきても歸らぬから錦たつ田や何のふるさとの山

長流とならんで契沖がある。彼は摂津の尼ヶ崎の武士下川元全を父として生れたが、幼にして出家し今里の妙法寺に入り、更に高野に修行し、後、生玉の曼陀羅院に住持となつたが、暫くにして去つて和泉の久井や池田萬町の伏屋氏により、殊に伏屋氏の許では養壽庵といふ庵の中にあつてその所藏の和書を研究した。契沖が佛學以外に得た國學の基礎はこゝに築かれたといふ事が出來る。後契沖は妙法寺の住持となつたが、元祿の初年には住持の職をも辭し、圓珠庵に隱棲して著述に從ひ、元祿十四年一月六十二歳で寂した。長流とは莫逆の交を結び、天和三年の頃からは徳川光圀の委囑により**萬葉代匠記**の著に從事して、貞享の末に初稿本を上り、元祿三年頃再度の稿を上つたが、それ以後も**古今餘材抄**・**勢語臆斷**・**源註拾遺**の如き古典の註釋や、**和字正濫抄**の如き假字遣の研究などを著したが、和歌の集としては延寶九年に自ら撰した**契沖延寶集**（自撰漫吟集）と後に撰した**漫吟集類題**二十卷とがある。契沖の歌には萬葉調は殆ど見られないが、華麗な中に僧侶らしい靜寂の境地を表して居る。殊に多くの長歌を殘して居るのは注意すべきことである。

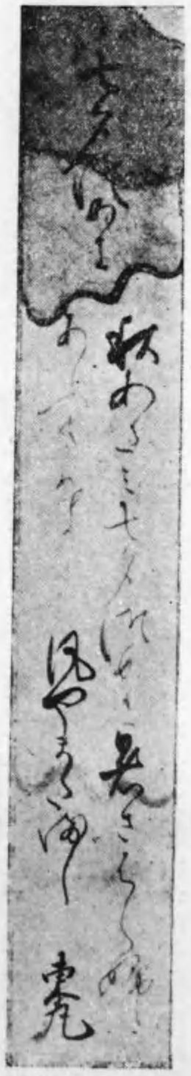


契沖肖像

にごり江にやどる影より霞めばやぬるゝ顏なる春の夜の月

聲はして空ゆく雁のつら〳〵にみれども見えず霞む夕ぐれ
山寺の花はのこりて鐘のおとけふもくれぬと人ぞちりゆく
初瀬のや里のうたゐに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす
しでの山こえぬ人には疎くともさきだつをだに哀とはみよ

長流・契沖よりやゝおくれて、而も彼等と大體同じ傾向に立つものに荷田春滿がある。春滿は伏見稲荷の神官荷田信詮の子と生れ、若くして社家神道などに思をひそめたが後、復古神道を唱へて創學校啓の文があり、**日本紀**に關する著述は最も多く、**萬葉集**に就いても多くの註釋を試み、律令に關する著もある。然し**萬葉僻案抄**・**伊勢物語童子問**などの外は多く流布せず、すべて稿本は伏見の羽倉家に藏せられて居る。氣慨のある人物であつて若くして江戸に出でた事もあり、その門下には賀茂眞淵があつて國學と**萬葉集**研究とを傳へ、甥の在滿は律令有職の方を繼承した。歌集**春葉集**がある。歌才は餘りゆたかでないが、慨世の意氣の自ら磅礴するものがある。



荷田春滿筆蹟

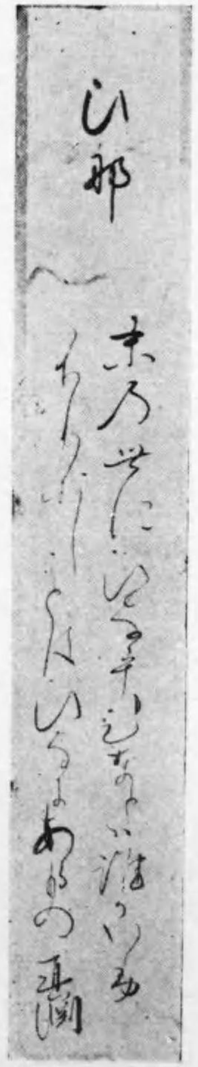
ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥のあとをみるのみ人の道かは
わけ入りてとふもかたるも靜けしややまとの書の深き敎に
見る書はのこり多くも年くれてわが世ふけゆく窓のともしび

二、賀茂眞淵とその時代の和歌

元祿時代に於ける和歌はまだ復古的ではなかつたが、中期に於て萬葉調が實際に作歌の上に行はれた。それは賀茂眞淵を代表として考へることが出來る。賀茂眞淵は遠江の岡部郷に生れ、初め從兄岡部政長の女を娶つたが、早世したので、更に濱松の本陣梅谷の家に入夫した。弱年から學問を好んだ彼は、妻と一子眞滋とを殘して三十七歳の時京都に出で、荷田春滿について國學を學んだ。春滿の歿後元文三年に江戸に出で延享三年五十歳の頃田安宗武に仕へた。それより一方には**萬葉集**を中心として古典を研究し、古道を唱道すると共に、萬葉調の歌をよんだ。元祿に於ては**萬葉集**の研究は勃興したが、未だ萬葉調の歌はよまれなかつたのであるが、彼に至つては復古的精神が歌の創作の上にも現れたと

賀茂眞淵肖像

いふ事が出來る。眞淵の歌は村田春海の撰した**賀茂翁家集**によつて知られる。その他楫取魚彦の編んだ**縣居歌文**や、河津宇萬伎の撰して秋成が補つた**縣居の歌集**があるが、**賀茂翁家集**が中心となるべきものである。彼の歌は宇萬伎や千蔭も言つた如くほゞ三期に分れ、第一期は古今と新古今との中間を取つた傾向の時代であり、第二期は萬葉調を中心とした時代であり、第三期は萬葉調より更に上代に遡つた時代である。萬葉調は彼の中心であるには相違ないが、なほ新古今調が加味されて居るのである。


賀茂眞淵筆蹟

をつくばも遠つあしほも霞むなりねこし山こし春やきぬらむ

信濃路のおきその山の山さくら又も來て見むものならなくに

故里の野邊見にくれば昔わが妹とすみれの花咲きにけり

鳰鳥のかつしかわせの新しぼりくみつゝ居れば月かたぶきぬ

信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな

眞淵の門下は種々の方面に分れて居るが、田安宗武・楫取魚彦を主とする萬葉の歌風、橘千蔭・

村田春海を主とする**古今集**に近い歌風と、本居宣長を主とする**新古今集**に近い歌風とがある。

田安宗武は田安家の祖であつて、學問に志深く、有職律令に詳しかつた。初め在滿を師として學んだが、歌の上に意見の相違もあり、其の他種々の原因から在滿は退いて眞淵を推薦したのである。宗武には**天降言**といふ歌集があるが、萬葉風としては眞淵よりも徹底して居る。

楫取魚彦は下總の佐原の人で、本姓は伊能と言つた。江戸に出でて眞淵の家の近くに住まつた。假名遣の書に**古言梯**の優れた著書がある。歌は**萬葉集**の歌風を最もよく體得したものであるが、宗武のやうな個性味は乏しい。**縣門遺稿**の中に**魚彦歌集**がある。

加藤千蔭は加藤枝直の子で芳宜園といつた。父の業をついで町與力であつた。枝直も眞淵の門でその識見にまさるものはあるが、學問にも歌にも殘した所は比較的少い。千蔭も研究に於ては**萬葉集略解**の好著を殘して居るが、彼の本領は歌人たるにあつた。**うけらが花**は彼の家集で、歌は古今調・新古今調の間をいつた優麗な格調であつた。

（千蔭とならんで注意すべき縣門の歌人に村田春海がある。春海は文化八年に六十六歳で歿して居るから、千蔭よりやゝ若く、町人であつたが、兩人は互に許しあつて親しく交つたのである。彼は豪放の性質であつた。琴後翁といひ家集を**琴後集**といふ。歌と文とを集めてある。彼は擬古文に極めて巧みであつた。而して歌は千蔭と同じ優雅な歌風であつた。

最後に本居宣長は伊勢松坂の商家に生れたが、幼少から學問を好み、十九歳の時山田の今井

田氏の養子となり、山田中地藏の宗安寺の法幢和尚に和歌の添削をして貰つたりしたが、二十一歳の冬養家を辭して松坂に歸つた。そして二十三歳の時母勝子のすゝめにより京に上つて醫學を學んだ。その間に堀景山に儒學を學び、且つ景山のもとで契沖の著書を繙く機會を得て國學の研究にも從事した。二十八歳の冬鄕里に歸つて醫を開業したが、國學の研究も斷えず行つた。三十四歳の五月眞淵と松坂に會つて古事記研究の志を語り、同年十二月眞淵の門人となり、それから古事記傳を主著として源氏物語玉の小櫛・萬葉集玉の小琴・詞の玉緒その他幾多の著書を發表した。彼は新古今集を好みその歌風は新古今調である。新古今集を主とした人に荷田在滿があるが、宣長も同じ立場である。彼の石上私淑言（イソノカミサザナミゴト）に見られる歌論は精細を極めて居り妥當でもあるが、歌は藝術的には餘りすぐれてゐない。

本居宣長肖像
（竹柏園藏）

ふる雪にみ笠もめさず皇子たち御狩せすなりみ鷹つとめよ　田安宗武

わが宿のそがひにたてるかしの木にかし鳥來なく頃は早きぬ　楫取魚彦

青雲の白肩の津は見ざれどもこよひの月におもほゆるかも

ちゝのみの父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり

天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり　加藤千蔭

墨田川みの着てくだす筏士に霞むあしたの雨をこそ知れ

かはほりの飛びかふ軒は暮れ初めてなほくれやらぬ夕顏の花

內日さす宮路の雪にあぢまさの車しづけき朝ぼらけかな　村田春海

なづな咲く花のにほひに暮れかねて霞にのこる春の山畑

とまり舟とまの雫の音たえて夜はの時雨ぞ雪になりゆく

見し世には只なほざりの一ことも思ひ出づれば懷しきかな　本居宣長

軒くらき春の雨夜のあまそゝぎあまたも落ちぬ音のさびしさ

散るまでは世の營みもすてゝみむ花の日數はいくばくもあらず

小澤蘆庵

眞淵門下によつて斯の如く三方面の歌風が唱へられて居た時、京都に於ては舊派歌風から出で新しい態度を唱へた歌人があつた。それは小澤蘆庵である。蘆庵は享和元年に七十九で歿して居るから、宣長等とほゞ同時代である。尾張で生れたが、主として京都に住み、京都に於て活動したのである。蒲生君平や上田秋成とも親交があつた。冷泉爲村に歌を學んだが、彼は獨自の立場を得たのである。彼は**古今集**を主としたが、たゞことうたを唱へて俗談平話がそのまゝ歌であると唱へた。これは俳論に於ける鬼貫などとも類似するのであり、**古今集**の平淡味から來て居る。彼の歌は**六帖詠草**や**六帖詠草拾遺**によつて知られる。蘆庵と親しかつた上田秋成も歌人としてすぐれて居た。秋成に就いては小說の所に述べるが、秋成の歌は**藤簍冊子**に載つて居る。詩心の流露した歌が多い。

をしからぬ命ながらも足乳根のある世はかくてあるよしもがな　小澤蘆庵

うづまさの深き林をひゞきくる風の音すごきあきの夕ぐれ

大井川月と花とのおぼろ夜にひとりかすまぬ浪の音かな

都べはちまたの柳園の梅かへりみおほき春になりにけり　上田秋成

みぞれふり夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人の音もせぬ

秋の雲風にただよひゆく見れば大はた小幡妹がたく領巾

三、香川景樹その他の和歌

近世後期に於ける和歌は京都に於て香川景樹が中心となつて居り、その門に熊谷直好（ナホヨシ）・木下幸文（タカブミ）などが出るとともに、橘曙覽（アケミ）・良寛・大隈言道（コトミチ）等が出でて、短歌に於て新しい機運が動いて來た時である。

香川景樹肖像

香川景樹は鳥取の人であつたが、若年の時京都に出て、やがて香川景柄の養子となつた。景柄は梅月堂宣阿の子孫で舊派の系統であつたが、景樹は後に舊派から離れ、桂園派といふ一派を立てたのである。それには蘆庵の刺激があつた事は明かであらう。天保十四年七十六歳で歿した。景樹は**古今集**を重んじて、調（シラベ）の說を立てた。**古今集正義**は彼のすぐれた著書であり、**新學異見**（ニヒマナビイケン）は眞淵の**新學**に反對したものである。彼の家集には**桂園一枝**がある。

熊谷直好

景樹の門下の中、熊谷直好は周防岩國に生れたが、後難波に住した。少年の時から景樹に就いて歌を學び、文久二年八十一歳で歿した。神樂・催馬樂に註を加へた**梁塵後抄**は彼のすぐれた著書であるが、家集には**浦のしほ貝・浦のしほ貝拾遺**がある。景樹の傾向をよく傳へてその格調はなだらかであるが力が無い。直好とならんで注意されるのは木下幸文である。幸文は備中の人である。初め澄月や慈延等の舊派歌人に學び、後景樹に師事するに至つた。學者としては直好に及ばないが、歌人としては直好を凌いで居る。家集には**憂々遺稿**がある。調は強いとは言はれないが、眞情の人を動かすものがある。殊に**貧窮百首**はその題材のとらへ方に於て新しい所がある。直好は自然觀照に進んで居るとすれば、幸文は生活をうたひ主觀をうたつたと言ふ事が出來る。文政四年に四十三歳で歿した。

妹と出でて若菜つみにし岡崎の垣根こひしき春雨ぞふる

うづみ火の外に心はなけれどもむかへば見ゆる白鳥の山

子はなくてあるがやすしと思ひけりありての後になきが悲しさ

敷島の歌のあらす田荒れにけりあらすきかへせ歌のあらす田

遠近に門さしこむる聲すなり涼みする夜はふけやしぬらむ

香川景樹

木下幸文

良寛

かにかくに疎くぞ人のなりにける貧しきばかり悲しきはなし

大丈夫のをのこさびすと打ちあげて泣かぬ心ぞまこと悲しき

幸文のこの新しい作歌の態度は幕末の良寛・曙覽・言道等に共通するものがあるのである。良寛は越後出雲崎に生れたが、若い時越後を去つて備中玉島に學び、二十餘年の後歸國して國上山の五合庵に住した。七十五歳で天保二年に歿した。書も巧みであるが、歌人として萬葉風をとり、而も單なる萬葉の摸倣から離れて、自由な中に萬葉の精神を體得した。備中の平賀元義も萬葉の歌風によつて、生氣のある歌を作り、**平賀元義集**を殘して居るが、更に注意すべきは福井の橘曙覽である。曙覽は田中大秀の門から出たが、歌人としては**萬葉集**を學んで**萬葉集**から出て居る。その人物も詩人肌の物に拘泥しない恬憺たる所がある。家集を**志濃夫廼舍歌集**といふ。明治元年五十七歳で歿した。大隈言道は福岡の人で二川相近に就いて歌を學んだが、家を弟に讓つて大阪に出て歌人として立つた。後郷里に歸つて明治元年七十一歳で歿した。歌論に**ひとりごち**があり、家集に**草徑集**があるが、外に**今橘集・戊午集・續草徑集**等がある。言道の歌は形から言へば**萬葉集**よりも**古今集**に近いであらうが、その古歌から離れて自由な表現をなした所に良寛や曙覽等に類するものがある。近世の末期に於ける是等の歌人の出たことは、近世の和歌を重からしむるものであつて、なほ萬葉・古今・新古今を守つてゐれから餘り出なかつた歌人に比して、個性の鮮かな點に於て最も注意すべきものがある。而も是等の歌人は多くは

平賀元義

橘曙覽

大隈言道

世に在る時は知られず不遇に終つたのであるが、明治以後に始めて高い位置を與へられたのである。

良寛

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば
梓弓春になりなば草のいほをとく出て來ませ逢ひたきものを
紀の國の高野の奥の古寺に杉のしづくを聞きあかしつゝ
月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに
歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつゝ
かすみ立つながき春日を子供らと手まりつきつゝ今日も暮らしつ

橘曙覽

今も世にいまされざらむ齡にもあらざるものをあはれ親なし
こぼれ絲網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす
蟻と蟻うなづきあひて何かことありげにはしる西へ東へ
たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうまし〳〵といひてくふ時

大隈言道

そよといふ笹の葉音に引入りてなきがら顏になるかたつぶり
妹が背にねぶる童のうつゝなき手にさへめぐる風車かな
親泣けば子さへ泣くなり世の中のせむすべなさも何も知らずて
さし柳さして幾日も經ぬものを根ざし引きみる友童かな

四、初期の俳諧と芭蕉

山崎宗鑑

歌から俳諧に筆を移して見る。俳諧は連歌から出發して、最初は滑稽の想を表したものと思はれる。山崎宗鑑（ソウカン）・荒木田守武の俳諧はさういふ點から出發して居る。宗鑑は若き時は將軍義尙の近侍であつたが、後剃髮して攝津の尼ヶ崎に到り、更に山城の山崎に移つて山崎宗鑑と稱へた。連歌を敎へ、點者ともなつて生活したものと思はれる。晚年四國に行脚して讃岐の琴彈山下の一夜庵で病歿した。宗鑑には**犬筑波集**がある。この集は四季・戀・雜に分けてある。句の作者は記してないが、宗鑑の句の外にその時代の俳人の句もある事と思はれる。滑稽的な句が多い。例へば

荒木田守武

切りたくもあり切りたくもなし
ぬす人をとらへて見れば我子なり

の如き是れである。

守武は伊勢の內宮の宮司であつて、宗鑑の洒落な性行と異なつて眞面目な人物であつたと思はれる。從つてその句も宗鑑に比して眞面目な句が多いのであるが、なほ洒脫な趣を有して居

る。發句を見ても卽興的な句が多いのである。守武の句は天文九年に成つた**獨吟千句**によつて見ることが出來る。

落花枝にかへると見れば胡蝶かな

元日や神代のことも思はるゝ

この宗鑑と守武とは近世以前に出て俳諧を創始したのであるが、德川時代に入つて俳諧は益々盛になり來つた。而して近世に於て第一に注意すべきは松永貞德（ティトク）である。松永貞德は松永彈正久秀の孫に當るといふ傳說がある。彼の活動したのは德川の初期寬永から承應頃迄であつて、所謂古風の俳諧を唱へた。彼に至つて法式から解放されて居たのが、再び種々の規則が作られた。**御傘**は俳諧に關する法則を記したものであり十卷から成つて居る。俳言をいろは順に配列してその去嫌に就いて新規定を試みてある。

又**淀河**に於て宗鑑の**犬筑波集**を法式の上から批評し、**油糟**では**犬筑波集**の前句について付句を試みて、彼の立場を實例によつて示してゐる。彼は俳諧にをかしみを主張したが、又一方には敎訓を唱へた。其の俳諧は連歌の法式をある程度まで守つて、保守的であつた。貞德の俳諧が餘りに法式に拘泥したのに對して、是を破つて自由な破格な態度をとつたのが談林派である。談林は檀林ともいふ。田代松意談林軒が江戸で同志とともに、俳諧をはじめて、談林と稱してから始まるといふ說もあるが、延寶年間に西山宗因が江戸に出て「さればこゝに談林の木あり

梅の花」といつてから始まつたと見るのが通說である。西山宗因は次郎作豐一といひ、梅翁・西翁等その外多くの號を有して居る。里村昌琢について連歌を學んだ。正保の初めには大阪の天滿天神の月並の宗匠となつた。が彼は重賴が貞門を破門され里村家へ入門するに及び、俳諧に心を向けるに至つた。かくて延寶時代には**大阪獨吟集**と題する門下の俳諧集が作られ、又宗因の五百韻や千句も板行され、談林派の勢力は次第に强くなつた。その門に耆谷高政や田中常矩・井原西鶴・一時軒惟中など出でて貞德の古風と對峙した。

宗因等の談林派の句は句格の規則を破壞した所に淸新の趣があるが、その感情は未だ新しい境地を開拓したものではなかつた。遊戲的分子も極めて多いと思はれる。

されば こゝに談林の木あり梅の花　梅翁

世俗眠をさますうぐひす　雪柴

朝霞たばこの煙よこをれて　在色

駕籠かきすぐるあとの山風　一鐵

なふ〳〵旅人三伏の夏　在色

なみ松の聲高うして馬やらふ　雪柴

（談林十百韻）

談林の俳諧は過渡時代の產物であつて、俳諧の完成は松尾芭蕉の出現を待たなければならな

かつた。芭蕉は正保元年伊賀國の柘植に生れた。幼名は甚七郎、後忠左衞門と改め、又宗房ともいひ、初め藤堂家に仕へた。その主良忠は季吟の門で蟬吟と號したが、寛文六年歿したので、彼は仕を辭し遁世して京へ出た。その時二十三歳であつた。芭蕉の遁世の原因に就いては種々傳說があり、主の死を悲んだためといひ、戀愛關係であるともいはれる。京へ出てから北村季吟の門に入つたが、やがてまた鄕里へ歸つた。寛文十二年二十九歳で**貝おほひ**を著して居るが、それは伊賀上野に於て作られて居る。門下の句を集めたもので自らの句も入つて居る。この年の九月彼は江戸へ出た。而して水道工事の監督をしたり、其の他種種の事をしつゝ俳諧生活に精進したらしい。**春二百韻**・**江戸三百韻**など作られたが、この時代には談林の影響が多かつた。

芭蕉肖像（俳諧百一集所載）

あら何ともなやきのふは過ぎてふくと汁

の如きその例である。

が**次韻**時代になると芭蕉は漸く獨自の俳境を開いて來た。**次韻**は延寶八年に成つた。伊藤信德の**七百五十韻**に對して作つたので**次韻**といつたのである。

鷺の足雉脛長く繼添て　桃青

這句以莊子可見矣

禪骨の力たわわになるまでに　其角

しばらく風の松にをかしき　才丸

揚水

（次韻）

この年に「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」といふ句も出來て閑寂の境地がうたはれるに至つたのである。是より**虛栗**（ミナシグリ）・**野ざらし紀行**・**冬の日**・**初懷紙**・**春の日**・**續虛栗**・**鹿島紀行**・**卯辰紀行**・**曠野集**・**奥の細道**・**幻住庵記**・**ひさご**・**猿簑**・**嵯峨日記**・**炭俵**・**別座敷**・**續猿簑**などの俳諧集や紀行などを編んだ。是等の**中冬の日**（貞享元年）、**春の日**（貞享三年）、**曠野**（元祿二年）、**ひさご**（元祿三年）、**猿簑**（元祿三年）、**炭俵**（元祿七年）、**續猿簑**（元祿十一年歿後）を世に**七部集**と稱するのである。是等に於て次第に芭蕉の閑寂味は加はり、**猿簑**に至つてその極點に達したので最も重んぜられて居る。**炭俵**に於てはこの閑寂味から人事に興味を持つて來た。而してこの**炭俵**の成つた元祿七年に京阪の旅をして九月に發病し十月十二日に歿したのである。歿後四年の元祿十一年に**續猿簑**が出でたが、是は芭蕉が生前に大體編んだものである。紀行・隨筆としては**奥の細道**・**幻住庵記**の如きは最もすぐれたものである。

市中は物のにほひや夏の月

あつし〳〵と門々の聲　芭蕉

二番草とりもはたさずほに出でて　去來

灰うちたゝくうるめ一枚　凡兆

此筋は銀も見知らず不自由さよ　芭蕉

只どひやうしに長き脇差　去來

草村に蛙こはがる夕まぐれ

蕗の芽とりに行燈ゆりけす

道心のおこりは花のしぼむとき

能登の七尾の冬はすみうき

魚の骨しはぶるほどの老を見て

待つ人入りし小御門のかぎ

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮

古池や蛙飛び込む水の音

雲雀より空に休らふ峠かな

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

明月や池をめぐりて夜もすがら

芭蕉

（猿蓑）

五月雨をあつめて早し最上川

初時雨猿も小簑をほしげなり

もろもろの心柳にまかすべし

五、蕪村とその時代の俳諧

芭蕉の歿後、その門下は互に門戸を立て、爭ひ、次第に芭蕉の眞精神は失はれて來た時、淸新の俳風を立て、俳諧を復興したのは天明の蕪村であつた。もとよりこの時代の復興の功は蕪村のみではなく、樗良や蓼太・白雄・曉臺・闌更などもある。蕪村は此の時はむしろ畫の方に名があつて、俳諧に於ては隱れて居つたのであるが、明治に至つて正岡子規が蕪村の價値を認めてから、その眞價を知られるに至り、この時代を代表する俳人となつたのみならず、芭蕉とならんで俳諧史上の最もすぐれたる一人となつたのである。

蕪村は享保元年に攝津の東成郡毛馬村に生れた（大江丸の俳諧簑）。姓は谷口、名は寅といつたが、後與謝と改めた。父母を詳にしないが、大野洒竹の**與謝蕪村**には一說として大阪阿彌陀ヶ池に住して北國屋吉兵衞といふ者の庶子であるといふ傳說を擧げてある。芭蕉のやうに武士の出ではなく、町人の出であつたであらう。毛馬村は附近に長柄川（一名、中津川）があつて、その長堤には柳が茂り草が芽ぶいて居て靜かな自然の風物は蕪村の詩心を養ふものがあつたであらう。後年の

作ではあるが、彼が他郷にあつて後故國に歸つた時よんだ春風馬堤曲の中に

籔入や浪花を出でて長柄川
春風や堤長うして家遠し
楊柳長堤道漸く暮れたり

の如き句があるのを見ても是を察することが出來る。蕪村は後この毛馬村から移つて同郡天王寺村に住んだが、やがて江戸に出て八間沽山に倚り、後に早野巴人の門人となつた(俳諧發)。沽山は談林派の俳人であり、巴人は蕉風の俳人であるから蕪村もまた談林より入つて蕉風に入り、次に獨自の俳風を開いたと見るべきであらう。巴人は寛保二年蕪村が二十七歳の時歿して居る。蕪村は師の歿後東の國々をめぐつた。或は下總結城の雁宕の許に居つて俳諧に遊び、或は松島の浦傳ひをなし、筑波山を眺め、妙義に至り、更に奥州をへめぐつた(新花摘)。彼は十年の間東にあつたが(夜半亭發句帖の蕪村の跋)後、寶暦の初め三十六・七歳の頃西に歸つた。

西に歸つた後も近畿・中國・四國等を歴遊して到る所に俳諧を殘し、後京都に居を定めたのである。居を定めた後も丹後の與謝に三年程過したこともあつた(几董から檜葉)が、主として京都にあつたのである。而してから檜葉によれば、明和の初め京都で先師巴人の業をついで二世夜半亭と號した。それ以後は京都にあつてその優美な自然の中に浸つてゐた。それを古典的教養と結びつけて彼の俳境は成つたのであらう。自在な空想と豐麗な修辭とは彼の俳諧の特色を形づくつて居るのである。かくて天明三年冬十二月の二十四日夜六十八歳で此の世を去つた。彼の門人几董は蕪村の終焉の記にその最期のさまを傳へて居る。

蕪村の著には新花摘が天明四年に作られて居り、また女流俳人の句を輯めた俳諧玉藻集もある。一夜四睡は安永癸巳二年九月に興行した四卷の歌仙である。而して彼の句や文を見るべきものは天明四年に几董の編輯した蕪村翁句集二卷と、文化十三年に、其獨亭忍雪・醉庵其成の編した蕪村翁文集二冊がある。

春月や印金堂の木の間より
春雨や小磯の小貝ぬるゝほど
春の海終日のたり〳〵かな
閻王の口や牡丹をはかんとす
不二ひとつうづみ殘して若葉かな
石工ののみ冷したる清水かな
秋の燈やゆかしき奈良の道具市
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

蕪村の時代は優れた幾多の俳人を有するのであつて、天明二年に八十二歳で歿した横井也有、

明和八年に六十三歳で歿した炭太祇、天明七年に八十歳で歿した大島蓼太の如きは著しきものであり、更に蕪村の傾向を承けた加藤曉臺の如きがある。それらのうちで、也有は尾張の俳人で鶉衣を殘し、太祇は人事の句を多く殘して居る。曉臺は、平兵衛と稱し、暮雨庵と號した。享保十七年名古屋に生れたが、壯年江戸に出で御祐筆部屋惣帳方へ出役したが後退き、京師にゆき又江戸にゆき東奥に行き、更に京都に至つてそこに住した。蓮阿坊白尼に隨つて俳諧を學び、蕪村等とともに俳諧を中興せしめた。寛政四年正月二十日六十一歳で歿した。門人曲江亭桃睡によつて曉臺終焉記（一名落梅花）が作られて居る。句は門人臥央の編した文化六年板の曉臺句集によつて見る事が出來る。斯の如く種々の俳人はあるが、蕪村はそれらの中で特に注意すべき人であることは言ふまでもない。

六、一茶と大江丸

安永・天明の復興後は俳諧は再び衰へて、文化・文政から天保にかけて俗調のみ行はれたのであるが、この間に俳諧寺一茶に於て僅かに一道の光を見る事が出來るのである。而して一茶とほゞ同時に出でた大江丸や、成美・士朗の如きも一茶時代を飾る人ではあるが、一茶の如く眞摯に人間愛の精神をうたつた特殊な俳人は他に無いのである。

一茶の傳は一茶同好會から出た東松露香氏の俳諧寺一茶が最も詳密なる研究であるからそれによつて記して見る。一茶は名を信之、俗稱を彌太郎といひ、寶暦十三年に信濃國上水内郡柏原驛に生れた。父は小林彌五兵衛といひ、農を業として居た。母は彼が三歳の時早く死んだ。

六歳の詠といふ

我と來て遊べや親の無い雀

一茶肖像

には母のない寂しい幼童の心境を見る事が出來る。八歳の時繼母が來て、十歳の時義弟專六が生れてからは繼母と不和になつた。父は繼母の虐待を見かねて十四歳の時彼を江戸に上らしめたのである。彼は鄕里にある時、本陣の中村六左衛門について學問を授けられ、更に六左衛門の宅に居た老翁からも俳諧を授けられたのであるが、江戸に出た後も困窮しつゝ俳諧の道に精進したであらう。江戸に出てから後の約十年間は其の傳を詳にしないが、天明七年二十五歳になつて江戸葛飾派の二六庵竹阿の門に入つて俳諧を學んだ事が知られる。寛政二年竹阿が歿して後はその庵を繼いで二六庵（菊明）と號して判者の地位にあつた。が規矩にかゝはらない一茶は葛飾派と和せず、やがて寛政四年の頃葛飾派を去つてしまつた。それよりは俳諧寺一茶と號して西國に大行脚を試みたこともあるが、江戸に住んで俳人としての地位を確保したのである。三十九歳の時父が歿してその終焉日記を書いて居る。文化七年鄕里へ歸つたが、繼母や義弟の逆遇を憤つて草鞋を

もとかず江戸に上つた。五十二歳の時に常田氏の女菊女をはじめて娶り、江戸の俳壇を去つて郷里に歸つた。それから長子混藏、二男千太郎、長女さと、三男石太郎、四男金三郎が生れたが何れも早世し、菊女もまた一茶が六十一歳の時歿した。文政七年六十二歳の時に飯山藩士の娘雪女を迎へたがやがて離縁し、更に六十三歳の時にやを女を迎へたが、それから二年の後文政十年十一月十九日彼は六十五歳で假住居の土藏の中に歿した。遺兒やた女はその翌年に生れた。彼を苦めた繼母もその翌年に歿して居る。

一茶筆蹟及び畫

かゝる一生を不幸の中に過した彼の生涯を見れば、一茶にはひがみの心もあつたらう。強者に對しては反抗し、弱者に對しては盲目的な愛をそゝいだ句を多く作つてゐることが自ら首肯される。彼は環境に支配されつゝ生きた人であらうと思はれる。

一茶の句集には**一茶發句集**（これに二種あつて文政版とこれを增補した嘉永版とがある）・**一茶句帳**などがある。また近年**七番日記**（文化七年から九箇年間にわたる自筆の日記）や**八番日記**・**九番日記**等が發見され出版されて、その中に傳記資料とともに極めて多くの俳句を見ることが出來るやうになつた。また**おらが春**も彼自身の筆に成るもので、傳記資料たるとともに彼の文を見る事が出來るのである。

なほ**大江丸**は享保七年に生れて文化二年三月十八日に八十四歳で歿した。彼は大阪の飛脚問屋であつて、大阪・江戸の間を往來することが七十回にもわたつてゐる。その間に詩心を養つたものであらう。**俳諧懺悔**（寛政二年十一月板）と**俳諧袋**（享和元年二月梓）とは彼の句や文を集めたものである。

霞日や夕山かげの飴の音
いうぜんとして山を見る蛙かな
やれうつな蠅が手をする足をする
鹿の親笹吹く風にもどりけり
這へ笑へ二つになるぞけさからは（こぞの五月生れたる娘に一人前の雜煮膳を据ゑて）
うそ寒や親といふ字を知つてから（文政二年正月一日）
あばら骨なでじとすれど夜寒かな
是がまあ終の栖か雪五尺（十二月廿四日古郷に入る）

一茶

露の世はつゆの世ながらさりながら
ともかくもあなた任せの年のくれ（五十七齢一茶）

七、狂歌と川柳

狂歌は、短歌と同じ三十一音形式を取つては居るが、俗語を用ゐ、また卑俗な内容をうたつたものである。和歌が傳統的な感情にとらはれて居る時に、狂歌はそれから離れて近世の生活を背景として、古典や古人に對する皮肉や諷刺を帶びた輕い滑稽ともなり、近世生活に對する陶醉ともなつてゐる。而してその源流は**古今集**の俳諧歌などにまで遡ることが出來、又それ以後の歌集にも見えてゐるのであるが、所謂狂歌として文學の注意すべき一形式となつたのは近世の中期天明頃である。作者には初期に半井卜養や石田未得があり、中期に唐衣橘洲・四方赤良（太田蜀山ともいふ）等があり、後期に宿屋飯盛・手柄岡持等がある。その後期に至つては既に勢力は衰へて來たと思はれるのである。それらの中で四方赤良は最も秀でた者であらう。

狂歌

太田蜀山

太田蜀山（四方赤良）は名は直次郎といつて寛延二年に生れた。十七歳の頃父の職を繼いで御徒組となり、それ以來この職に從ひ、六十二歳で辭してからは專ら狂歌などに身を入れたのであつて文政八年七十七歳で歿した。彼の事物を滑稽的に表す伎倆は驚くべきもので、時勢を觀て諷刺的によんだとも思はれる「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶといひて夜もねられ

欠

めた柳樽は明和二年初篇を出だしてから次第に續篇を出だし、寛政二年に川柳の歿する迄に二十四篇に達したが、更に二世川柳に至つて文政元年に歿する迄に六十篇に達し、引續き三世・四世・五世と繼いで出したのである。（近世文藝叢書第八・第九に第一篇から第六十篇まで收めてある）

川柳は俳句と同じく十七音形式であるが、俗語を用ゐ、また卑近な材料を捉へて人情の急所を表さうとする。自然をとらへてもそれを擬人し、人間化して居るのである。人事をうたふにも英雄を凡人化することによつて滑稽を表したり、人生の缺陷や弱點を指摘してこれを諷刺的に表さうとする。和歌に見えるやうな優雅な感情はなく、卑俗な世相を寫す事によつて民衆的な世界を表して居るのである。

かみなりをまねて腹掛やつとさせ

米つきに所を聞けば汗をふき

國の母生れた文を抱きあるき

縫紋を乳をのみ〳〵むしるなり

母親はもつたいないがだましよい

清盛の醫者ははだかで脈をとり

道とへば一度にうごく田植笠

按摩とりいびきをきくと手ぬきをし

欠

寢所をへし折つて置くひとりもの
風呂しきを解くとかけだす眞桑瓜
蚊帳釣つた夜はめづらしく子があそび

（柳樽）

第二章　小　説

一、假名草子と井原西鶴

お伽草子によつて小説界に於ける近世的色彩はやゝ現れたのであるが、近世に至つて先づ假名草子として展開した。假名草子は寛文頃に多く出た啓蒙的な小説であつて、漢籍や佛書及び古文等を翻案して平易な假名文にしたものである。假名草子には如儡子（ヒキヲイシ）の**可笑記・百八町記**があり、山岡元隣の**誰が身の上・小さかづき**などがあるが、最もすぐれて居る作者は鈴木正三と淺井了意とであつて、作も多く傳はつて居る。中でも正三の**因果物語**（寛文元年）と**二人比丘尼**（寛文四年）、淺井了意の**お伽婢子**（オトギバウコ）（寛文六年）と**浮世物語**（ウキヨバナシ）（延寶九年）の如きは最も注意すべきものと思はれる。正三の作品は佛教思想の現れて居るものが多く有限の生を解脱して成佛すべきを説く。**二人比丘尼**は夫の戰死によつて、寡婦となつた年若き女性が、家を出で一人の女性に佛の道を聞

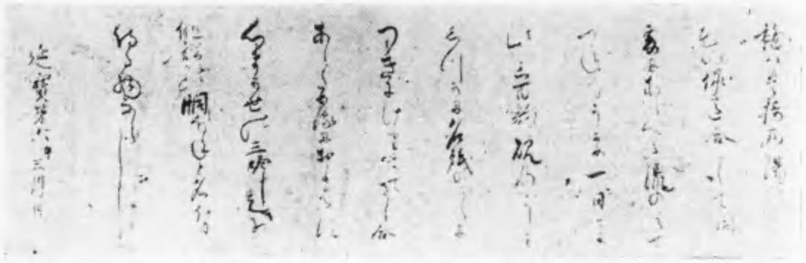
かされ、また亡夫の戰死の場に至つて回向し、更に一人の女性と逢つてともに日を送つてゐると、その女性が死に、その骸の朽ちゆくさまを見て無常の理を知り、老比丘尼を師として尼となり大往生を遂げた次第を敍してある。而して淺井了意の作品にも教訓的の意味はあるが、更に種々の方面に進んで居る。**お伽婢子**の如きは支那の**剪燈新話**によつて之を翻案したもので怪談小説といふべく、**浮世物語**は教訓の意もあるが、世相を描くといふ方面にも進んで來てゐるのであつて、假名草子より浮世草子に展開する經路を語つて居る。浮世草子とは浮世の事を記した意味である。浮世とは廣い意味の人生であるが、狹くいつて好色といふ意味になる。世を知るといふことが男女の道を知るといふ意味に用ゐられて居るやうに、浮世草子といふのも斯の如き意味が多いと思はれる。而して浮世草子の作者としては第一に井原西鶴を擧げねばならない。

井原西鶴の傳は餘り多く知られて居ないが、**見聞談叢**によると、本名を平山藤五といふ。**西鶴置土産**に「浮世の月見過しにけり末二年」の辭世の句に「元祿六年八月十日五十二歳」とある事によつて、寛永十九年に生れて元祿六年五十二歳で歿した事は明かであり、また延寶七年版の**難波雀**や延寶八年の**大矢數**によつて、明暦二年十五歳頃から俳諧に志して、後點者として立つて居たことも知られる。**見聞談叢**によれば盲目の女子一人あつたやうである。而して俳諧師としては談林派の一人として活動した事は既に述べた所であるが、四十一歳の時始めて**好色一**

代男を出版してから浮世草子の作者として立つたのである。歿前の十年間は浮世草子作家として活躍した。彼の浮世草子の主なるものは大體三種に分れる。一は好色物であり、一は町人物であり、一は武家物である。好色物にも女色と男色とがあるが、最も注意すべきは**好色一代男**（天和二年十月）と**好色一代女**（貞享三年六月）と**好色五人女**（貞享三年仲春）とであらう。**一代男**は八卷から成り、世之介といふ好色の人物を中心として、その色慾生活に關する短章の說話を連接して成つて居るが、そこに一貫して世之介といふ人物を設けて好色生活が浮き出されて居り、大阪・江戸・京都其の他各地の遊女に由つて花柳界の世相が細かに描き出されて居る。

西鶴肖像

一代男は男性を中心として、その好色生活を描いてあるが、**好色一代女**は女性の淪落生活の一代の描寫である。宮仕、藝人の生活、花やかな廓の生活、質實な主婦の生活、お針師といふやうに、當時の女性生活の殆どあらゆる方面を送る間に貫く性慾生活が描かれて居る。それは世之介と同樣であるが、たゞ彼にあつてはどこまでも進んで現實の歡樂を追求する積極的態度があるが、**一代女**の女性には現實に生きんがために已むを得ずして陷る消極的な態度が見られる。**一代男**の終は六十年

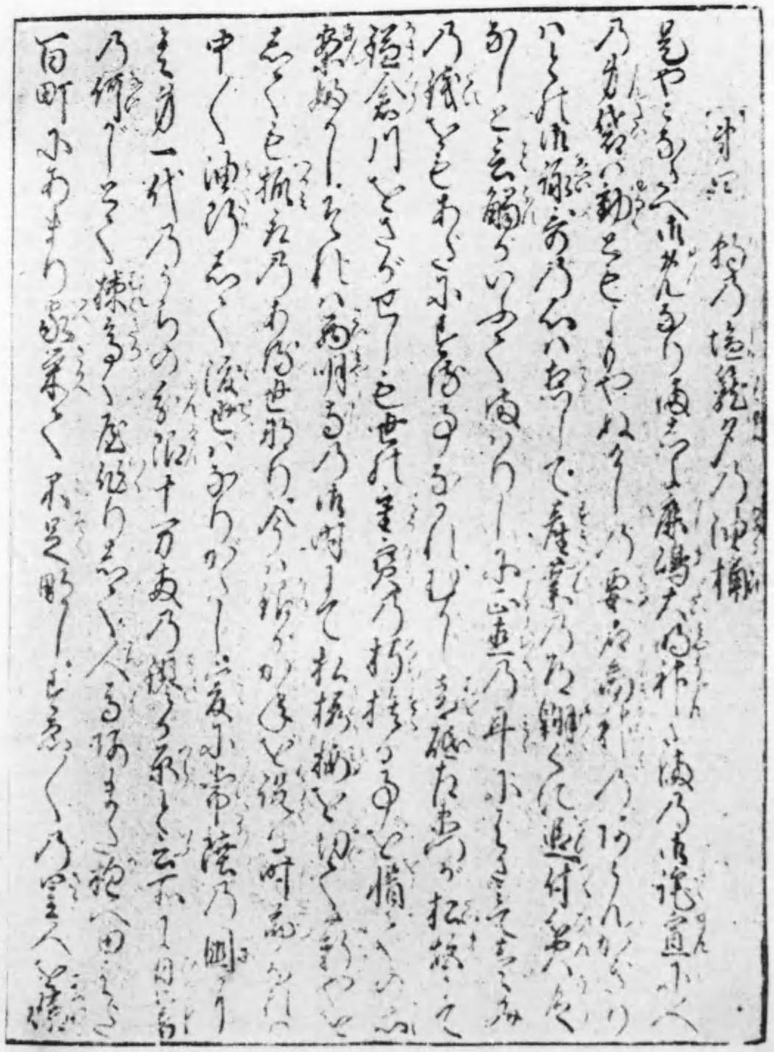


西鶴筆蹟

の好色生活を回想し、更に新たなる歡樂の世界を求めて、好色丸といふ舟に乘つて、女護島に渡る事になつて居るが、**一代女**の終は大雲寺の五百羅漢に詣でて、その五百の羅漢の顏が、一生の中に交つた男性の一つ一つの顏に見えたので、始めて菩提の心を起して北山に庵を結んで世をかくれた。その庵を尋ねた人に語つた話が、この書であるといふのである。こゝに最後に及んで好色生活に對する自己反省の心持が見え、そこに一抹の哀愁がある。**好色五人女**も**一代女**と同年に作られたが、これはお夏清十郎、樽屋おせん、おさん茂右衞門、お七吉三、おまん源五兵衞の五つの戀愛生活を描いたものであり、**一代男**や**一代女**の樣な樣式と違つて、五つのまとまつた短篇をなして居る。而して前者が好色生活の描寫であるに比して、これは戀愛的關係を扱つて居る點に相違がある。しかし戀愛關係といつてもそれは性慾的要素の多いものである。好色物から彼は町人物と武家物とに展開した。町人物では**日本永代藏**・**胸算用**の如きが優れて居る。**日本永代藏**は元祿元年の刊行で、金を中心にした町人生活を主題として如何にして富を得るかといふ當時の町人生活の實相をつかんで表して居る。**胸算用**は元祿五

年の刊行で、年の暮に現れる町人生活の種々相を描いて居る。

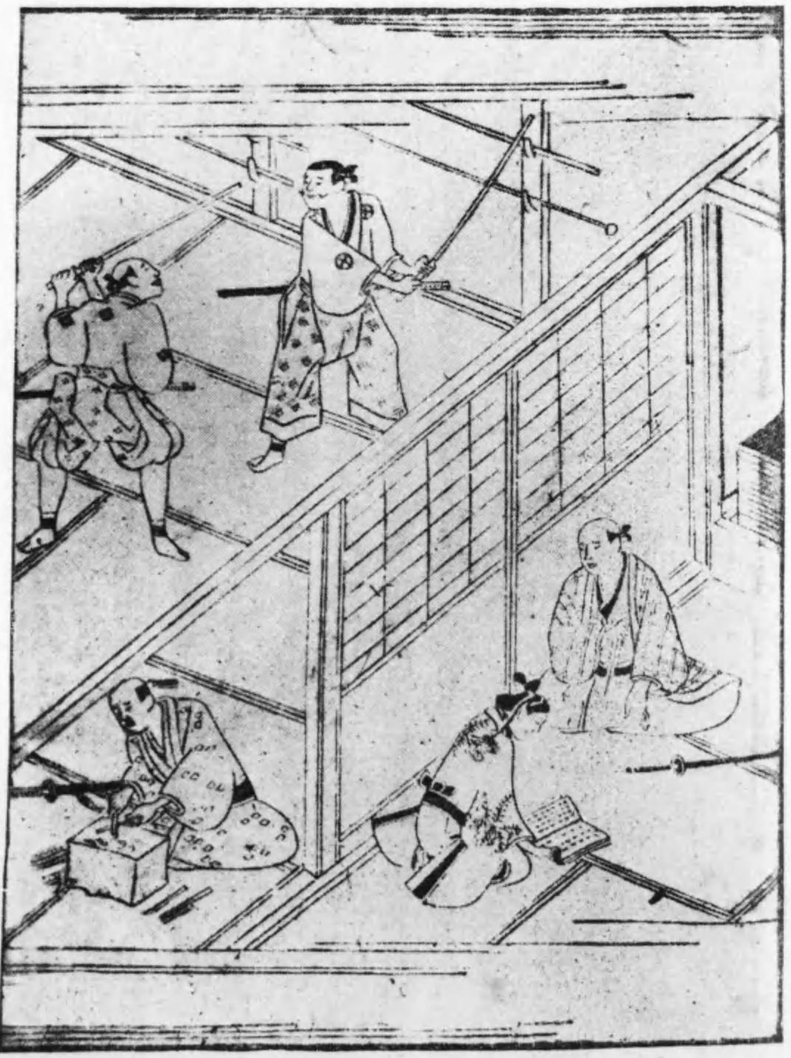
武家物は町人と對立した武士の生活を扱つて居り、**武道傳來記**は仇討を、**武家義理**



（日本永代藏）

物語は色々な義理説話を綴つて居るが、是等は想像の分子が多くて實際の觀察から出て居る所の尠いだけ彼の作としては劣つてゐる。

男色大鑑



（日本永代藏）

は好色物と武家物との二面を有した作品で、同性愛及びそれに由つて起る意氣の描寫を試みたものである。

この西鶴にやゝおくれて浮世草子に作を殘して居るものに西澤一風・錦文流（ニシキブンリウ）・北條團水・月尋堂等がある。西澤一風は西澤九左衞門といひ、西澤與志、朝義（アサヨシ）ともに同人である。大阪の書肆で、淨瑠璃の作もあるが、浮世草子にも多くの作を殘して居る。一二の例として**風流今平家**は一人の町人の榮華から沒落までを平家になぞらへて作り、**後室色縮緬**は十人の後家の物語を書いて居る。形の上から見れば前者は全篇一貫の說話の脚色を有し、後者は斷片的小說話の集となつて居る。文流は傳は明かでないが、作中に「難波津俳諧僧文流」とあるから俳諧師であつた事を知る。淨瑠璃の作も**本海道虎ケ石**を始め三四あるが、彼の本領は浮世草子にある。浮世草子の一二を言ふと、**棠大門屋敷**（カラナシダイモンヤシキ）は大阪の長者淀屋辰五郎とその父のおごりの生涯を敍したものであり、**當世乙女織**は大阪富豪の息子の德二郎といふ律義な男が友人に誘はれて遊里に耽溺する次第を描いたものである。この二作はむしろ好色本的性質を有するものであるが、**熊谷女編笠**の如き、仇討物であつて好色本的性質を有するものもある。なほ北條團水には**晝夜用心記**（六冊、寶永四年）**本朝智惠鏡**（六冊、寶永六年）**日本新永代藏**（六冊、正德三年）等の作があり、月尋堂には**鎌倉比事**（寶永五年）**今樣二十四孝**（寶永六年）を始め種々の作品がある。而して西鶴の作とならび稱する事はもとより出來ないが、それ等に續いて注意せらるべきものに八文字屋本がある。

八文字屋といふのは書肆の名前であつて、初めその主人八文字屋自笑の名を以て出版したから八文字屋本の名がある。その作者には江島屋其磧・八文字屋自笑・多田南嶺等があつて、元祿の末から寶曆・明和に至るまで續いて居る。西鶴本が多くは端物であるのに反して、八文字屋本は多く物語的であり又傳奇的作品である。

江島屋其磧は名を市郎左衞門といつた。元文元年に七十歲で歿して居る。八文字屋自笑は其磧より八歲年上であつた。其磧は初め自笑のために多くの作をなし、自笑の名で出版したが、自笑の名が高くなるに及び、兩人の間に不和を生じたので、獨立してその子に江島屋といふ書肆を開かせたが振はず、後再び八文字屋と結んで自笑と合著の名で版行して居る。かくの如くして自笑の名や合作の名で出て居るものの中には其磧の作が多くあるのである。

其磧の作は元祿十四年の**遊女名よせ傾城色三味線**を始めとして、正德元年の**傾城禁短氣**の如き好色本もあるが、正德四年の**世間息子氣質**、正德五年の**世間娘氣質**の如き所謂氣質物もある。彼の特質はこの氣質物に見られる。世間に多くある息子や娘の類型的性格を描いて居る。西鶴のやうな鋭い觀察は見られないが、西鶴に次ぐ浮世草子の作家であつた。

二、讀本

浮世草子以來、文化・文政期を中心として近世小說は讀本・洒落本・黃表紙・人情本・滑稽本・合

卷等種々の小說形態を生み出した。それらの中で讀本は量的に見ても質的に見ても最も注意すべき形態である。

讀本の名は黃表紙の如く畫を主としたものと異なり、文章を主とした所から生じたものであるが、內容から言ふと、浮世草子の如く現實を題材とした寫實小說でなく、歷史傳說に材を採つた空想的又は理想的小說と稱すべきものである。而して敎訓說話や實錄等の系統をひき、是に支那の稗史演義を結びつけて生じたものと思はれる。此の期に於ける讀本の世に知られたものに建部綾足の明和五年に著した**西山物語**、安永二年に出した**本朝水滸傳**(吉野物語)があるが、共に擬古的の物語であつて、是等は純粹の讀本とも言ひ難く文學的の價値も餘り高くない。この時代の讀本として最も注意すべきは**英草紙**(ハナブサ)と**雨月物語**とである。

建部綾足

古今奇談英草紙

古今奇談英草紙は寬延二年に出版せられた。作者は近路行者と稱し、大江漁夫ともいつた都賀庭鐘である。大阪の人で儒學・醫學・博物學に通じて居た。當時大阪に木村巽齋といふ酒造家の富豪があつて、支那の知識に通じ、支那の書を多く藏して居たので、**英草紙**の作者は此の人に依つて、支那の稗史などをも讀み得た。**英草紙**も**今古奇觀**等の影響を受けて居るのである。短篇から成り、奇談と稱せられるべき說話から成つて居るが、幽靈・怪異を扱つたものは極めて尠く、歷史的題材を扱つてそれに新しい解釋を加へて居るのである。たとへば二位の尼が、安德帝を奉じて海に入つた史實を敍し、これに意見を加へて、外戚淸盛のはからひで姬宮の安德帝を皇子として帝位に立てたのであるから、祕密の曝露せんことを恐れて幼帝と共に海に入つたのであると書いて居る。又賴朝と義經との關係を敍し意見を加へて、義經が賴朝に追はれた罪は賴朝にあるが、しかし賴朝には大江廣元があつて常に惡を勸めたから賴朝の罪の一部は廣元にあるとした。第九の話に、高師直を同情を以て記した如き道德的に囚はれて居ない傾向を見る事が出來る。而してやゝ怪奇的な題材を扱つた第二の話を見ると、馬場求馬といふ貧しき浪人が乞食の群に投じ、乞食の入婿となつてゐたが、偶然時機到來し歸參が叶つて歸るや、その妻のために名譽の毀損さるゝを恐れて途中琵琶湖を渡る時、妻を湖中につき落した。所が死んだと思うて居た妻は因幡の侍に助けられた。その後馬場が因幡の侍の媒介で後妻を求めた所が、それは元の妻であつたのである。怪奇的になるべくして而も現實的になつた所に**英草紙**の特徵がある。

雨月物語

次に**雨月物語**は上田秋成の作である。秋成の傳に就いては**列傳體小說史**に詳しく、**上田秋成全集**や**秋成遺文**にも見えて居る。姓は上田といひ、通稱は東作、號は餘齋というたが、無腸・鶉居等の號もある。享保十七年に生れ、父は秋成自らも知らないといつた如く明かでない。浪華の娼家の出であつたといふことも或は否定すべきではないであらう。四歲の時母にも別れ、上田家に養はれたが、六歲の時其の養母も死に、繼母の手に成長した。後醫を學んで醫者を開業したが、これを廢して、文筆を以て立つたと見るべきであらう。性狷介にして人と容れず、又

容れられず、不平の中に一生を送つたのであるが、この間に妻瑚璉尼はよく彼を助け、また秋成もこれに慰められたものであらう。秋成は加藤宇萬伎に學んで國學にも深く、本居宣長とも論戰をまじへ、**萬葉集**にも**萬葉集會說**・**金砂**の如き著書があるが、最も注意すべきは讀本作者としての彼である。

雨月物語は彼の生涯の中期に作られたと思はれるが、若い時代に作られたものには、八文字屋本の系統を引く**諸道聽耳世間猿**と**世間妾氣質**とがあり、**伊勢物語**の形を擬して作つた**癖談**もある。また晩年の作と思はれるものに**春雨物語**がある。**雨月物語**は九篇の短篇小說集であるが、何れも怪異を扱つて居る所に其の特徵がある。「白峯」は崇德上皇が讃岐の白峯に崩じ給うたのを、西行が仁安三年の秋詣でて崇德上皇の靈にあひまつる次第を記したもので、**撰集抄**・**保元物語**によつた事は明かであり、後馬琴の**弓張月**中に摸せられて居る。「菊花の約」は丈部左門と赤穴宗右衞門との義の交を說き、赤穴宗右衞門が別れに臨み菊花の咲く時に必ず訪れると約束したが、幽閉されて歸る事の出來ないために、自刄して魂になり再會の約を果したといふ構想である。又「淺茅が宿」は葛飾郡眞間の鄕に勝四郎といふ男があつて、妻の宮木を殘して京に行つたが、戰亂のため勝四郎は數年の間歸らなかつた。七年の後歸つて妻と久々で逢つたが、それが亡妻の靈であつたのである。そこに可憐なる妻の心情が見られる。「蛇性の婬」は蛇の淫蕩なる性質から女性に姿を變へて人間に執念深くまとふ事を描き「青頭巾」は高僧の男色を描

いて凄慘身にせまるものがある。その他の篇もそれ〴〵怪異を描いて、一篇毎に特殊の相を示して居る。是等の題材は「白峯」の外は支那の古典から得來つたものであることはこの頃の研究で知られたが、よくこれらを消化した所に秋成の素質が見られるのである。

この**英草紙**や**雨月物語**によつて開かれた讀本は京傳や馬琴に於て全盛期に達した。

京傳の讀本は寬政三年洒落本に筆を止めてから後に作られたのであつて、寬政十年の**忠臣水滸傳**十冊、**復讐奇談安積沼**五冊、文化元年の**優曇華物語**七冊、文化二年の**櫻姫全傳曙草紙**五冊、文化三年の**梅花氷裂**三冊、**昔語稻妻表紙**五冊、文化五年の**本朝醉菩提**十冊、文化十年の**雙蝶記**六冊などこれである。是等の中、京傳の特質を最もよく現して居る**稻妻表紙**を見ると、お家騷動式の說話である。大和國を領する佐々木判官貞國の先妻の子に桂之介があり、後妻の子に花形丸といふがあつたが、後妻は自分の腹をいためた花形丸を後嗣にしようとして、惡臣不破道犬とその子伴左衞門を味方にして桂之介を放埒に導かせる。桂之介は藤波といふ愛妾におぼれるので、忠臣佐々良三八郎は藤波を殺して出奔する。更に名古屋山三郎といふ忠臣もある。是等の忠臣の苦辛の結果惡臣が平げられ、桂之介が家を繼ぎ、忠臣が榮えるに至るのであるが、その間佐々木家に傳はる巨勢

山東京傳肖像
（戲作六家選によるる）

金岡の畫いた百匹の蟹の圖の寶物があり、種々の事件や挿話が結びついて複雜になつてゐる。**元享釋書**に見えてゐる蟹滿寺の緣起や、また不破・名古屋の傳說などはその中の最も著しいもの。である。

京傳の讀本の說話は複雜ではあるが淨瑠璃・演劇等よりとりいれたものが多く、なほそれ〴〵の說話が渾然として統一されて居ない憾があり、且つ全篇を貫く精神が稀薄であるために散漫の感じを免れない。その點に於て馬琴の因果律を以て說話を統一させ、且つ勸善懲惡主義の思想を以て全篇を貫いて居るのと大に違つてゐるのである。

讀本は京傳から更に馬琴に至つて極盛に達したのである。瀧澤馬琴は字は瑣吉、諱は解、通稱は佐七郎・佐五郎・佐吉等といひ、號も著作堂・曲亭・飯臺・蓑笠軒など多い。明和四年六月江戸の武士の家に生れた。父が事情によつて仕を退いてから生活は困難になり、二十歲の時には兄も亡くなつて自ら生活をしなければならなくなつた。武士となる希望を止め、醫學を學んだが成らず、文筆を以て立たんとして、當時作家として一流であつた京傳に就き、その盡力のもとに寬政三年**二十日餘四十兩盡用而二分狂言**（ツカヒハタシテニブキヨウゲン）といふ黃表紙を刊行した。それから次第に名をあげ、書肆蔦屋重三郎にも認められたのである。二十六・七歲の頃下駄商伊勢屋に入婿になつた。彼は後黃表紙を捨てて讀本を出し、京傳を凌駕して一流の讀本作者となつた。後には京傳の女らしい嫉視、や、馬琴の傲岸な利己的な不人情のために二人は不和になつて、京傳が歿した時にも彼はその葬

（藏館書圖學大田稻早）稿　草　著　著　傳　大　八　見　里　總　南

式に參列しなかつた。馬琴は名譽心の強いために作家とも餘り交際せず、獨り高うして居つたのである。晩年には失明し、加ふるに妻お百の我儘に家庭の風波が絶えず、また病弱な一子琴嶺にも死なれて、寂寥の中に嘉永元年十一月六日八十二歳を以て歿したのである。綿密に記した日記によつて彼の生活は窺はれる。著作は極めて多く、殊に長篇が多い。就中**南總里見八犬傳**の如きは文化十一年四十七歳の時から天保十三年七十五歳に至る二十餘年を費して完成した日本に於ける最大の作である。其の他文化元年から文化七年にかけて完成した**椿說弓張月**、文化十一年から文政四年まで費した**朝比奈巡島記**、文政十一年の**近世說美少年錄**等後期の作は長篇が多いのである。彼の作には**夢想兵衛胡蝶物語**の如く、空想的な作品もあり、またお染久松の事件を扱つた**松染情史秋の七草**や、お駒才三の話を材料にした**八丈綺談**や、三勝半七を扱つた**三七全傳南柯夢**もあるが、この市井の事件をも歴史的な事件と解釋せずにはおかなかつた。**近世說美少年錄**（**玉石童子訓**）もお夏清十郎を扱つて居るが、主なる說話は毛利元就・陶晴方を扱つて居るのである。**椿說弓張月**は爲朝の一生を扱つて、彼としては最も傑れた作の一つであり、**俊寛僧都島物語**は**平家物語**・**源平盛衰記**に出て居る俊寛を扱ひ、**朝比奈巡島記**（未完成で終の部分は松亭金水が增補して居る）は朝日將軍義仲

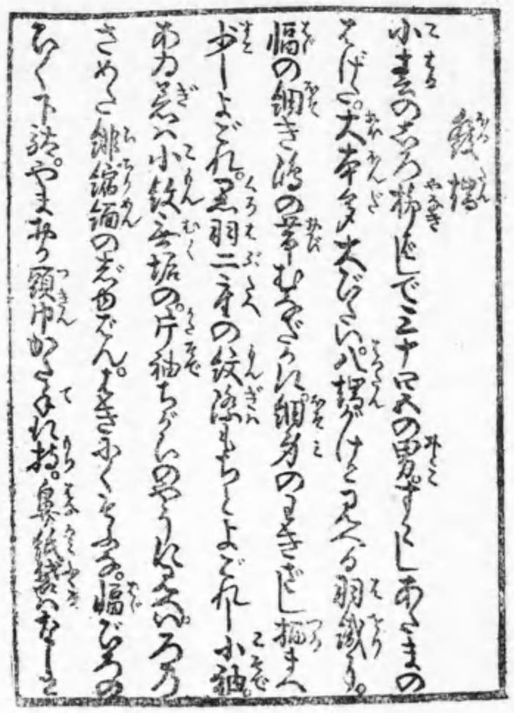
曲亭馬琴肖像
（戲作六家選によるる）

の落胤で和田義盛に養はれた和田義秀を主人公とし、**開卷驚奇俠客傳**（未完、四篇まで成る）は南北吉野時代に、楠・新田兩氏の子孫が南朝の滅亡後ひそかに復讐をはかり、苦節を重ねた事を扱つてある。而して彼の最大長篇**里見八犬傳**は室町時代南總の里見家の興亡を背景として其の家臣八犬士を扱つて、儒教的精神を現してあるのである。この外梅若傳説を扱つた**墨田川梅柳新書**や、播州皿屋敷傳説や紅皿・缺皿の傳説などから材を得た**盆石皿山記**などいふ傳説を扱つた作品もあるが、説話の構成統一の巧みである事は、彼を讀本作者として獨歩の地位を與へしめた第一の理由であらう。

三、洒落本と黄表紙

次に洒落本といふのは、遊里を世界とし、男女の會話を主として遊里の生活を寫したものである。此の種の本は、滑稽や通を内容とするために洒落本と稱したのであらうが、その本の形が小さいため、小本といはれ、又形の肖たために菰蒻本とも呼ばれた。此の洒落本の内容意義に就いて、上田博士は洒落本の洒落は滑稽を意味するのであつて、始め半可通が通を氣取つて失敗し、田舍者が都會の風俗に馴れず、失敗する滑稽を敍述するのが主であつたが、後廓の寫實になつたのであると言はれ、佐々博士は洒落は眞面目の對稱であり、滑稽の意味があるとともに野暮の對稱でもある。洒落本は粹人や通人の世界を描いたものであるといはれた。この滑稽

と通とが洒落本の内容であらう。而してこれを遊廓の外面的寫實に於て表現するのである。而してその寫實も極めて輕い意味でいふのであつて、洒落本の書名を見ても**契國策**とか**大抵御覽**とか**船頭深話**とかいふ漢籍の名をもぢつたものがあり、作者の名も匿名である上に、山手馬鹿人とか夢中散人といふやうな茶化した名の多い事によつてもその態度は察せられるのである。



遊子方言

洒落本の起原に就いては寶暦・明和頃に始まつたと見るべきであつて、その初めの作としては寶暦六年に江戸で作られた**異素六帖**や、同年に大阪で刊行された**聖遊廓**が擧げられてゐる。然し是等は遊廓を材料にして居るだけで、戯文とすべきものであるが、明和年間の**遊子方言**に至つて寫實的傾向となつて來たのであつて、洒落本を、比較的眞面目な態度で廓の生活をそのまゝに寫實したものに限るとすれば、**遊子方言**を濫觴とすべきであらう。**遊子方言**は田舍老人多田翁の著とあり、書名は**楊子法**

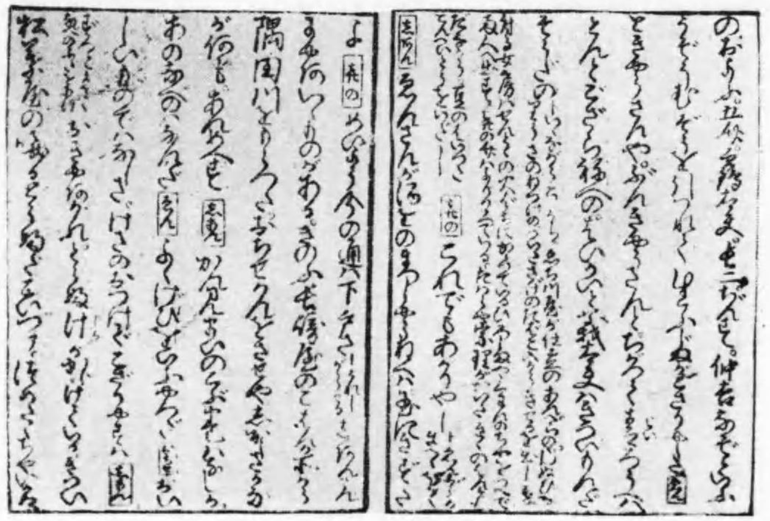
廓中奇談

辰巳の園

言をもちつたものであるが、洒落本はこの作に於て時期を劃したといふ事が出來、これから遊廓の特殊な生活の寫實を主とする洒落本が現れるに至つたのである。

明和六年には**廓中奇談**が出た。作者は**山陽先生**とある。「船窓笑話」「弄花巵言」「掃臭夜話」より成り、「弄花巵言」は茶屋に送られ廓に至るまでの客と遊女との樣子を描いてある。「掃臭夜話」は夜鷹と二人の勞働者の立話を書いてある。又明和七年には**辰巳の園**が出た。作者は夢中山人寐言先生とある。深川の廓をうつした洒落本の最も古いものとして注意せられて居る。船宿の樣子、船宿の主婦と客との對話、船頭との問答、深川の特殊なる遊女屋の樣子、その部屋を異にするに從ひ、三組の違つた遊びを描き、半可通の部屋や、野暮な武士などをうつして居る。

更に續いて安永二年に夢中山人の**南閨雜話**があつて、品川の遊廓を描いて居り、安永三年には風來山人の**里のをだまき**があるが**異素六帖**の系統に入るべきものである。同年に蓬萊山人の**婦美車紫鹿子**がある。かくの如くして**異素六帖**の出た寶曆七年頃から安永四年頃に至る二十年程の間に、洒落本は次第に其の一定の型を得來つたのであつて、これまでを洒落本の第一期とする事が出來る。而して江戸文學後期に於て山東京傳を主とする第二期に入るのである。この第一期に於ては作者としては蓬萊山人歸橋・山手馬鹿人・田螺金魚の如きが代表的な作家である。讀本や洒落本が此の期に於て作られるとともに、黃表紙を始め種々の形式の小說が作ら



通言　總籬

れた。風來山人の小說の如きもこの時代に作られた。風來山人は讃岐の生れであつて平賀源內といひ、本草學に詳しく、科學的な才があつて火浣布なども作つたが顧みられず、不平の中に一生を送つた人であつて、文筆の如きは彼の餘業に過ぎなかつたのであるが、なほ淨瑠璃に小說にその才氣のひらめきが見られる。小說では**風流志道軒傳**がある。**風流志道軒傳**は淺草の境內に葦簾を張り一脚の机を出だし、一本の大きな自然木を携へ机をたゝいて**太平記**その他の軍書を讀んで生活した男が、風來仙人といふ仙人に會ひ、空を飛ぶ事の出來る扇を得て、大人國や小人國などを訪ひ、支那に遊び、女護島に至るといふ樣に諸所をへめぐつた次第を敍してある。**根無草**は男色の流行を論じてある。又「放屁論」も有名で、彼の戲文は極めて多いのである。

次に京傳の洒落本はその數多く、天明七年の**通言總籬・古契三唱**、天明八年の**吉原楊子**、寛政三年の**通氣粹語傳・京傳予誌・仕懸文庫**をはじめ多くあるが、**通言總籬**は彼の傑作である。この作を見ると凡例に「予去々春**江戸生艶氣花燒**（ウマレヅハキノカバヤキ）ト云冊子ヲ著シテヨリ云々」とあつて、この黄表紙の人物をかり、篇中の人物として居るのである。卽ち艶次郎と志菴とが氣之介の家を訪れ、氣之介の妻おちせも加はつて種々の食道樂やら何くれの話をなし、次に吉原に行き遊女との對話となり、朝歸に至るまでを描いて、そこに通を示して居る。その會話の中に寫實的な描寫を見る事が出來るのである。而してその趣向は第一期の**遊子方言**や**辰巳の園**以來定まつたものであつて、その型の中に於て遊廓を描いて

金々先生

居るのである。

洒落本は風俗上害があるとて禁ぜられたのであつたが、寛政三年蔦屋重三郎の勸めによつて禁を犯して**仕懸文庫・錦の裏・娼妓絹飾三部**の洒落本を作つたために彼は罰を蒙つたのである。これより京傳は洒落本の製作を止めて、主として讀本を作るに至つた。而して寛政三年以後も洒落本は京傳以外のものによつて綴られ、洒落本の第三期を作つたのであるが、特に新しい展開は見られなかつた。

菜華夢

黄表紙は繪畫本位の草双紙であつて、赤本・黒本・青本などとともに、其の表紙の色からつけられた名である。是等の草双紙は江戸に行はれて既に八文字屋本の大阪に行はれて居る時から

現れたのである。繼川春町の**金々先生榮華夢**はその時期を劃するものであつて、盧生が夢の故事をとつて、金村屋金兵衞といふ男が粟餅屋で餅の出來るのを待つ間に夢を見て泉屋清三といふ豪商の跡目を讓られ榮華を盡したが、放蕩のため追ひ出された時に夢が覺めたといふ趣向である。その後多くの作家が出でたが、繼川春町・朋誠堂喜三二の如きは代表とすべきものであり、明和・安永の頃に出でて輕い文學を作り出して居るのであるが、その他にも作家は多い。天明五年出版の唐來三和の**莫切自根金生木**（キルナノネカラカネノナルキ）の如きは、萬々先生といふ人物を主人公として金が出來るのに困つて種々焦慮するが、少しも減らないのみか益々增加するといふ趣向を以て記してある。

巡廻能名代家

何れも繪畫を主として、詞はそれを說明したに止まるものであつて、春町の如きは自ら畫をも描いて居る。文學としての價値は乏しいが、また一つの小說の樣式であつたのである。

四、滑稽本・合卷・人情本

讀本とならんで注意すべき小說の樣式に、滑稽本・合卷・人情本がある。

滑稽本は內容から名づけたのであつて、中期に於ても風來山人其の他によつて作られて居るが、此の期に於て一九と三馬と出づるに及んで注意すべき一樣式となつたのである。

十返舍一九は明和三年に生れて、姓を重田、名を貞一と言つた。駿府の町同心重田與八郎の二男であつたが、後小田切侯に仕へて大阪にあつた。やがて職を辭し、また大阪の材木商人の女婿ともなつたが、離緣せられて江戶に歸つた。其の後妻を娶つて一女をも擧げた。その性質は磊落で酒を好み、無邪氣に世を送つたと傳へられて居るが、寧ろ眞面目な性格であつたらしい。天保二年七月二十九日六十七歲で歿した。彼は靑本や讀本を作り、また洒落本をも作つたが、傑出して居るのは滑稽本であり、殊に**東海道中膝栗毛**である。**膝栗毛**は享和二年に初篇を出した所、非常なる好評を博したので文化六年迄に第八篇を出して**東海道中膝栗毛**を終つたのであるが、更に翌年から**續膝栗毛**を出して、**金毘羅道中・宮島見物・木曾道中・上州草津溫泉街道**等を刊行して文政五年二十一年目に正續全部が成つた。が**東海道中膝栗毛**以後は新しい趣向も盡きて、二番煎じの感は免れなかつた。**膝栗毛**の脚色は江戶神田八丁堀に栃面屋彌次郎兵衞といふものがあり、駿河府中の出身であるが、家產を蕩盡して旅役者の成れの果てなる鼻之介（後喜多八と改めた）と江戶に出で、喜多八は商家に奉公し、自分は家を持つたが思はしい事もないので家をたゝんで、品川から東海道を上つて伊勢參宮や京見物をして大阪に行くまでが發端と東海道中であり、續篇も同じ二人が旅をして居るのである。樂天的な二人が道中演ずるさま〴〵の無邪氣な失敗を描

十返舍一九肖像
（戲作六家選による）

いて滑稽の感情を現したものである。

膝栗毛の事件は、悉くが彼の創意に成つたのでなく、部分的には種々の材料から得て來た事は明かである。山手馬鹿人の作である**變通輕井茶話**　**道中粹語錄**といふ洒落本や、**東海道名所記**や、また室町時代の狂言や近世の落語から出て居る事を指摘し得るが、しかし大部分は作者の直接經驗、若しくは作者が旅行中に蒐集したものが多いのであらう。

三馬肖像
（戯作六家選によるる）

三馬は通稱を西宮太助といひ、姓は菊池、名は泰輔、字は八德といつた。父は茂兵衛といひ、安永四年淺草田原町三丁目に生れた。幼くして本石町四丁目の書賈翫月堂堀野屋仁兵衛（一說に中橋の書賈北林堂）の丁稚となり、後山下町の書林蘭香堂萬屋太治右衛門の婿養子となつたが、間もなく妻も病死したので離緣して、日本橋十九文横町に住み古本店を開いた。而して書肆の小僧をして居る間に讀んで得た知識を以て自らも戯作をはじめたのである。十九歳の時**天道浮世之出星操**（デツカヒ）といふ黄表紙を刊行したのが處女作で、それより多くの戯作を著したが、**浮世風呂**・**浮世床**によつて一九の**膝栗毛**と相對して聲名を得たのである。彼は世才に長、じ戯作とともに仙方延壽丹と稱する賣藥をはじめ、また江戸の水といふ白粉下を賣出して利潤を得た。文政五年正月六日四十七歳で歿した。

譚話（オドケバナシ）　**浮世風呂**は文化六年春第一篇を出だしてから同九年に第四篇を出だして完結した。また**柳髮新話浮世床**は文化八年に初篇を出だし、同九年に第二篇を書いて未完のまゝであつたのを、文政六年に瀧亭鯉丈が代つて第三篇を記したのである。**浮世風呂**は男風呂と女風呂とに分けて、種々な人物の會話に由つて赤裸々な世相を記してあり、**浮世床**も床屋に於ける會話に由つて世相を客觀的に記してある。風呂と床屋とは人々が最もくつろいだ氣分でそれ〴〵の個性を最もよく發揮する所であるから選定した場所であらう。全體の統一した構想はもとよりないが、種々の階級の男女の會話の中に廣く人生の相を思はせるものがあるのである。

瀧亭鯉丈と梅亭金鶏

滑稽本としては近世の末期に於て瀧亭鯉丈の**花暦八笑人**・**滑稽和合人**、梅亭金鶏の**妙竹林話七偏人**等がある。一九や三馬の滑稽は世相をとらへて描寫する所から生ずる自然の滑稽であるが、是等は生活の倦怠にあいて種々の趣向を案出して滑稽を感じようとするものであつて、そこに病的な頽廢期の藝術を見る事が出來る。鯉丈は三味線彈きと櫛や小間物の細工とを兼ねて職業として居たが、一九や三馬にならつて滑稽本を作つたのである。しかしその作品の性質が、一九や三馬と異なる事は前に述べた如くである。天保十二年に歿して居る。金鶏の**七偏人**は鯉丈の趣向にならつて作つたものである。彼は明治初年にまでわたつて筆を執つて居た。

柳亭種彦の合卷

更に近世後期の小說で注意すべきは、柳亭種彦の合卷と爲永春水を中心とする人情本とである。種彦は天明三年に幕府旗本の家に生れ、本名は高屋彦四郎知久といひ、祿も二百俵を領し

た。文化四年二十五歳の時既に著作がある（列傳體小說史）といふから、著作を始めたのは、その時代からであつたらう。讀本にも二三の作はあるが、主として合卷作者として立ち、天保五年には**邯鄲諸國物語**の初篇を出だして稿を續けた。彼の作中最も名ある**偐紫田舍源氏**（ニセムラサキ）は畫工國貞の畫で文政十二年に初篇桐壺を出だし、それから引續いて天保十三年に三十八篇藤袴・まきばしらにまで達した。此の年水野越前守の改革があつて種々風俗の取締も嚴重になり、種彥も呼出しを受けて、**田舍源氏**は絶板になつた。これがため種彥は意氣阻喪し、また病重つて終に天保十三年七月十八日六十歳で歿した。彼には考證的隨筆として**還魂紙料**（スキカヘシ）二冊（文政九年刊）、**用捨箱**三冊（天保十二年刊）がある。

柳亭種彥肖像
（戲作六家選によるる）

一體合卷は形の上では黃表紙の性質をうけ、內容の上では讀本を傳へてやゝ通俗化した繪入小說である。黃表紙は五枚を一卷とするのを普通とするが、文化三年に式亭三馬が**雷太郎强惡物語**といふを綴つて普通の黃表紙十卷となるべきを五卷づつ合冊にして二冊として出版した。これから此の如き綴ぢ方が流行して、之を合卷と稱し、內容も大きくなり讀本式になつたのである。尤もこの合卷の形はこれより以前にもあつた。繪畫は黃表紙ほどではないが合卷に於てもなほ重要である。更に合卷中に正本製といふものがある。

これは讀式の脚本であり、場面の立て方も劇的であり、舞臺上の說明などもある。卽ち當時の演劇の流行の機運を受けて、小說が演劇化された所に興味が存するのである。

長篇の外に彼には短篇の合卷があるが、その最も世に知られて居るのは長篇であつて、**偐紫田舍源氏**は當時の士女の愛讀措かなかつたものである。是は**源氏物語**の飜案で、時代を表面室町時代に移して、實は江戶時代の生活を描いてある。源氏と弘徽殿の女御の產まれた皇子との關係を、義政の子の義視と義尙との關係に改め、源氏の情生活を義理化し、全體をお家騷動式にしてある。それだけ**源氏物語**の生き〳〵した感情は失はれて居る。歌も俳句に改めてある。

爲永春水の人情本

次に人情本は內容から言へば洒落本の洒落や滑稽味を除いて、人情を現さうとしたものであり、表面は敎訓を標榜して居るものもあるが、すべて淫蕩な情生活を描いて居る。この人情本の作者の中で爲永春水は代表的な作家である。

春水は越前屋長次郎といひ、書賈を營んで居つたが、その間に草雙紙などを作りはじめた。三馬の門人となつて三鷹と名乘り、また振鷺亭二世とも言つたが、未だ名を成すに至らなかつた。然るに天保三年に**春色梅曆**を著して時好に投じ、爾來金龍山人狂訓亭爲永春水と號して人情本を作つた。同四年には**春色辰巳園**を出だし、引續いて同じ性質の作を發表したが、彼の作には代作もあるらしく、**いろは文庫**の如きも二世爲永春水の作と言はれて居る。天保十三年の改革に、手鎖の刑に處せられ間もなく歿した。五十四歳であつた。**梅曆**等は丹次郎といふ美男子

に多くの女性をからませ、戀の葛藤の後一人は正妻となり、他は妾となるといふ如くして、結末を告げるのであるが、その間に淫蕩的な氣分をそゝる點に於て風俗上の害は多い。人情本が當時禁ぜられたのは、或は當然であつたらうと思はれる。人情本の作者としては春水の前に曲山人や鼻山人もあり、後に松亭金水をはじめ多くあるが、特に注意する程の作者もない。

以上の如く近世後期の小説は文化文政を中心として幾多の樣式と幾多の作家とを出だしたが、近世の末期には多くは歿して、僅かに假名垣魯文等によつて明治初期に結びつけられてゐるのである。

（修紫田舎源氏）

第三章　戯曲

一、古淨瑠璃と近松

古淨瑠璃

近世の劇文學としては淨瑠璃と脚本とが擧げられる。これらは謠曲狂言からの發展が見られる。第一に淨瑠璃を考察する。淨瑠璃は詞章と曲節と人形操とから成る綜合藝術で、曲節・詞章は平家・謠曲その他を綜合して作られたもので、謠曲が古典的であるに比し、人形の所作や三味線によつて更に複雑になり、劇的になつて居る。而して淨瑠璃の起原は**宗長日記**享祿四年の條に駿河の宇津の山邊で淨瑠璃を語らせた記事があり、又天文九年の**守武千句**中に「いとゞだに座頭まがひの杖つきの」「淨瑠璃かたれともしびのもと」「こよひはや時はうし若ふけはてゝ」の連句があるから、享祿の頃に僻遠の地にまで行はれた事と、淨瑠璃の原始的のものに牛若傳說を綴つた作品のあつた事が知られる。現存する淨瑠璃の最も古きものに**淨瑠璃十二段草子**がある。この曲は牛若丸が三州矢矧の宿の長者の女淨瑠璃姫と逢ふ說話を十二段に綴つたものであつて、小野お通の作とせられ、淨瑠璃の名義の起原はこの曲の名に基づくとせられて居るが、お通の傳もはつきりして居ないので、年代的に見て**淨瑠璃十二段草子**がお通の作であるかどうか、また今日の**十二段草子**が、享祿頃の牛若傳說を綴つた淨瑠璃であるか否かは明かにし難い。

金平物

曲節も最初は簡單なものであつたらうが、次第に複雑になり、また詞章も初めはお伽草子風のもので、それが次第に劇的のものに發達していつたのであらう。淨瑠璃の古い詞章には右の**十二段草子**や**阿彌陀の胸割・八島・高館**などが傳はつてゐる。**阿彌陀の胸割**は本地物で、日頃阿彌陀を信仰した女が危難を免れたことを敍してある。近世になつて殺伐な武勇を尊んだ土地一般の氣風に促されて、江戸に所謂金平淨瑠璃と言はれるものが流行した。薩摩淨雲は寛永の初めに江戸に下つて淨瑠璃を弘め、勇壯活潑な詞章・曲節を以て江戸人の好尙に投じたのである。淨雲の弟子に丹波太夫・丹後太夫・源太夫・長門太夫などがあつたが、この中、丹波太夫は淨雲の勇壯なるところを受け繼いで一層強い方面に進み、岡淸兵衞の作である金平物を演じて喝采を博した。金平物といふのは金時の子の金平を始め勇壯な人物を設けて、怪物を退治し、勇武な行爲を現すを敍したもので、**金平法問諍**とか**金平廿人切・金平天狗問答**の如きすべてそれである。是等は粗野なあくまで誇張した表現に過ぎないのであつて、藝術的價値は乏しいが、當時の幼稚な江戸人の鑑賞力はこの程度のものしか理解し得なかつたのである。次に源太夫は京都に上つて淨瑠璃をひろめたが、その弟子の井上播磨掾は大阪に於て淨瑠璃を弘め、殊にその孫弟子に當る竹本義太夫は終に義太夫節なるものを完成し、義太夫節は淨瑠璃を代表するに至つた。この義太夫のために詞章を作つて、淨瑠璃をして近世文學中の最も重要なる一方面としたのは近松門左衞門である。近松は義太夫のみならず、それ以前に宇治加賀掾のためにも數曲を

近松門左衞門

作つて居り、**天鼓**の如き井上播磨掾のためにも作つて居るが、主としては義太夫のために書いたものである。義太夫の歿後は政太夫のために筆をとつて居る。

近松門左衛門肖像及び自筆辭世文

近松の傳は西鶴と同樣に不明である。傳說によれば相森信盛といひ、生國は不明で、兄は相國寺の宗長老であり、弟は岡本一抱子といふ儒醫で、妹は錦江といつた。彼は嘗て宮仕したともいはれ、或は役者であつたともいはれてゐる。その歿したのは享保九年十一月二十一日七十二歲の時である。彼が淨瑠璃作者としての初めは現存する確實なるものでは、延寶八年二十八

牟藜古雅志所載

歲の時に刊行された**赤染衛門榮花物語**である。この作は古淨瑠璃風の作であるが、既に彼のすぐれた技倆が見えてゐる。それ以後一生に成した作は百數十曲の多きに達するのである。

近松の作品は時代物と世話物とに分たれる。時代物は極めて多く、また彼が力を盡したものと思はれる。これを操にかけて、慰本位の觀衆の鑑賞に供したものとしては主なるものであつたに相違ない。

國姓爺合戰は政太夫等のために書下したものであり、正

徳五年六十三歳の作であるが、時代物の特質をよく現して居ると思ふ。三年越十七ヶ月の間興行を續けて大入を占めたといふのは、慰本位に新しい趣向を凝した所にあると思ふ。明朝の遺臣鄭芝龍が日本に於て設けた子の和唐内は、母を伴つて支那に渡り、異腹の姉錦祥女の夫甘輝を語らひ、韃靼を討つて明朝を再興しようとする。甘輝は妻の緣にひかれたと言はれるのを嫌つて和唐内に味方するのを肯じないので、錦祥女が自ら死して夫に義を勸める。終に甘輝も和唐内とともに韃靼を討つといふ所に、義理と人情との葛藤を見せて觀者の涙をそゝる。支那に材を借りただけで實は日本に題材を得たものと變りないのである。併し表面的にせよ支那に材を取つた所に他の作品と目先の變つた所がある。かういふ奇拔な趣向を以て觀者の興味をひかうとしたのは時代物一般の特質であつて、そこに不自然な點の多いのは已むを得ない。

世話物は町人階級の實際の世相をとつて描いてあるだけに自然であり、また人情の描寫といふ點に於ても優れて高い藝術的價値が認められる。世話物の初は元祿十六年の**曾根崎心中**であると言はれる。この作はお初徳兵衞の情死の事實を扱つて居るもので、徳兵衞が惡朋輩の九平次に大事な金を騙り取られた困惑のはてに終に心中するに至るのであつて、構想は極めて簡單であり、また死に導く動機も餘りに輕く、生に對する執着が尠い。これは前期の世話物を通じた特徴である。後期の作になると、前期の作に比して、複雜な主題を扱ふやうになり、戀愛を中心としながら、親子の愛や夫婦の愛の如きをも同時に扱ふ樣になつて居る。寶永八年五十九歳の時の**冥土の飛脚**に於ても梅川と忠兵衞との戀愛を扱ひながら、忠兵衞の父の愛を描いて居る。享保三年六十歳の時の**博多小女郎浪枕**に於ても惣七の父の愛は、**冥土の飛脚**の新口村二番煎じの感はあるが、同じく父性の愛を扱つて居る。享保五年六十八歳の時の**心中天の網島**は遊女を中心とした心中物であるが、治兵衞の妻おさんの心情には妻としての眞情が溢れて居るのである。享保七年七十歳の時の**心中宵庚申**の如き八百屋半兵衞と其の妻の千代との夫婦の愛を描いて居り、遊女を中心とした作から見ると、同じ心中物でも非常に相違がある。享保六年六十九歳の時書いた**女殺油地獄**は、家庭の境遇から生れ出た與兵衞といふ不良性を帶びた青年が人殺をする經路を描いてあるが、義父實母の與兵衞に對する愛をも描いて社會悲劇的な性質を帶びて居る。が前期と後期との作を通じて見られる所のものは、愛の精神である。世話物と雖も近松の作品は唯現實を如實に描寫したものはない。現實を美化して彼の虛實皮膜の藝術論を作品の上に具象的に表して居るのである。

紀海音

紀海音は近松と同時に出でて豐竹座に據つて竹本座の近松と對峙して居た人である。海音は寛文三年に生れて近松より十一歳程若い。姓を榎並氏といひ貞峨と號し、通稱を喜左衞門といひ、後善八と改めた。父は鯛屋善右衞門といひ、貞因と號して俳諧をよくした。兄は油煙齋貞柳といふ狂歌師である。始め和泉の堺の柿本寺に入つて僧となり悅山和尙の弟子となつた。後還俗して醫者ともなり、又契沖に國學を學んだとも言はれる。而して豐竹座の座附作者となつ